本庄市郷土叢書第３集

本庄市の武蔵武士

―武蔵七党児玉党の活躍とその後―

２０１４

本庄市教育委員会

児玉党発祥の地阿久原牧空撮（児玉郡神川町下阿久原）

空からみた阿久原牧。阿久原牧のあった阿久原地区は上武山系・谷川・神流川に囲まれた自然の牧場であった。

児玉党の祖は阿久原牧の別当として力を蓄え、やがて武蔵国の平野部へと進出していったのであろう。

秩父牧の一つ阿久原牧跡（児玉郡神川町下阿久原）

秩父牧は阿久原牧と石田牧（秩父郡内の長瀞町・皆野町にあった）より構成される官牧で、毎年20匹の馬を朝廷に献上していた。

有氏神社社殿（神川町下阿久原）

児玉党一族の祖有道維行を祀る有氏神社で児玉郡神川町下阿久原の秩父瀬に鎮座する。この地にあった秩父牧の一つ阿久原牧の別当として児玉党の祖有道維行が力を蓄え、子孫は武蔵国の平野部に進出し、特に嫡流の一族は児玉郡の平地に広く分布していった。

児玉郡に割拠した児玉党一族の共通した信仰対象であった金鑽神社（神川町二宮）

　金鑽神社は児玉郡に分霊社が多くある古社で、その分布は九郷用水を引水する村々に残されている。金鑽神社・九郷用水・児玉党は深い関係があったものと思われる。

児玉党塩谷氏の館跡と推定される真鏡寺空撮（本庄市児玉町塩谷）

真鏡寺境内に残る伝渋谷金王丸の墓（本庄市児玉町塩谷）

児玉六郎右衛門尉時国の館跡と伝える玉蓮寺（本庄市児玉町児玉）

日蓮は鎌倉幕府によって捕らえられ佐渡に配流となった。この時、鎌倉街道を北上した日蓮を己の館に泊め、教えを請うた児玉時国は、日蓮が許されて鎌倉へ帰る際にも手厚くもてなしたという。後に己の館を寺にしたのが玉蓮寺という。境内には日蓮が足をあらったと伝える井戸が残る。

伝平重衡首塚（児玉町蛭川釈迦堂墓地内）

「平家物語」では児玉党庄四郎高家は、一の谷合戦で平三位中将重衡卿を生け捕りにした。重衡は勇将であり頼朝にも気に入れられ助命も考えられたが、南都焼き打ちを恨んだ興福寺衆徒の強い要求で処刑された。高家は首を貰い受け、郷里に持ち帰り手厚く供養したという。なお「源平盛衰記」や「武蔵七党系図」では庄家長が生け捕ったとしている。

石橋の馬頭観音堂

一の谷合戦で活躍した真下五郎の愛馬を弔ったと伝える。真下五郎は激戦の中、愛馬の活躍により一命をとりとめ、身代りに愛馬が死んだといい、名字の地の下真下地内に愛馬を葬り観音堂を建てたという。石橋墓地内に所在。

児玉町下浅見地内より西光寺があったといわれる浅見山(大久保山)方面を望む。

現在、大久保山と呼ばれる丘陵は見る方向から薊山(浅見山)・琴平山・塚本山などと呼ばれている。この丘陵内にかつて児玉党の菩提寺西光寺があったといわれ、今でも小字に字西光寺・大門等の地名が残っている。延元２年(1337)に起きた薊山合戦で西光寺は焼失し、境内にあった梵鐘は池の中に沈んだと伝えられる。

栗崎の宥勝寺

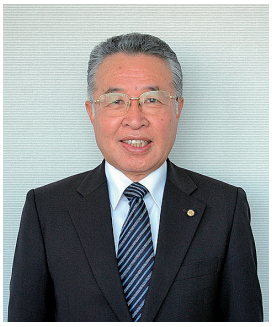
薊山合戦で焼失した西光寺を後に再興したものという。

墓地には庄小太郎頼家の供養塔がある。この供養塔は五輪塔であるが、頼家の妻が造立したとの伝承がある。

一の谷合戦で討死した庄小太郎頼家供養塔(本庄市栗崎宥勝寺)

庄頼家は庄太郎家長の嫡男で、一の谷合戦で討死したという。「武蔵七党系図」では頼家の子孫の記述はないが、討死当時は20歳というから、子供がいた可能性は高く、頼家の弟は本庄姓を称したものが多いことから、頼家の子孫は新たに獲得した備中国の所領に移住した可能性がある。

序



本庄市は関東平野の北西部に位置し、古代より開発された交通の要衝地であります。現在もJR高崎線や八高線が南北に通り、国道17号・254号・462号が縦横に走り、さらに上越新幹線本庄早稲田駅や関越自動車道本庄児玉インターチェンジもあり、上信越方面や北関東へとつながる交通拠点となっています。

本書は中世という時代、‘もののふ’の世に活躍した武蔵武士児玉党の活躍を取り上げたものです。この時代の武士の登場は私たちのロマンをかきたてるものがあり、その活躍は日本各地に広がっていきます。本庄市は古代末期に登場し、中世という時代を通して活躍した児玉党武士が割拠した地域です。その活躍は源平の争乱でめざましく、軍記物語の『平家物語』には児玉党武士が華々しく登場しています。

本書は『本庄市郷土叢書』として既に刊行した第１集・第２集に続く、第３集となります。第１集では養蚕と製糸をテーマとして近代という時代に焦点を当て、第２集では鎌倉街道と中山道をテーマとして主に中世から近世という時代を中心に取り上げ好評を博しております。第３集では武蔵武士児玉党をテーマとして中世という時代を取り上げております。本書によって地域の歴史に触れていただき、郷土学習や生涯学習に役立てていただければ幸甚です。ささやかな小冊子ではありますが、多くの皆様に郷土研究や学習の参考書としてご利用いただければ幸いです。

平成２６年３月

本庄市教育委員会

教育長　茂木孝彦

例　　言

1．本書は、古代末期に現在の本庄市域に誕生した武蔵武士の児玉党について、その盛衰について概観し、併せて中世という時代の本庄地域について紹介しようとするものである。

2．本書では、特に鎌倉幕府の成立にあたり大きな役割を果たした武蔵七党と呼ばれる武士団の内、本庄市域を中心に分布した児玉党一族について、個々の一族の動静や地域に伝わる伝承について紹介する。

3．児玉党については、本市域以外にも、埼玉県内では東松山市・坂戸市・越生町・秩父市・皆野町等に分布し、さらに群馬県でも高崎市や甘楽町にも分布するが、本書では本庄市内に本貫地があったと推定される一族を中心に紹介する。

4．児玉党関係に関する史料は極めて少なく、その動静を明らかにする事は極めて困難であるが、全国各地に残された各種の史料や古記録、さらに系譜史料から文学作品など、様々な史料群より児玉党に関係すると思われるものを検討して本書の執筆の基としている。

5．本書の執筆にあたり、基本的な史料は既に刊行されている『児玉町史中世資料編』をもととし、『埼玉県史中世資料編』・『本庄市史』・『東松山市史中世資料編』・『坂戸市史中世資料編』・『越生町の歴史』等の自治体史を参考として執筆した。

6．本書には、難解な人物名や地名、史料名、さらに専門的な用語が多出するが、随時ルビを付した。

7．本書に掲載したイラストは、国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」収録の、明治期に出版された絵本類等より、着色して収録した。

8．上記の自治体史以外にも多くの文献や論文等を参考としたが、巻末に文献の代表的なもののみ一覧を付した。

9．本書は、本庄市教育委員会文化財保護課が編集した。本文については野口泰宣が執筆を行った。

10．本書の刊行にあたり多くの方よりご協力を賜わった。記して感謝いたします。なお、根岸久氏・矢内勲・平田重之氏よりは写真及び情報等の提供を賜っている。

目　　次

口　絵

序

例　言

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１章　児玉党の発生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　古代末期から中世初頭の児玉・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　児玉党の発生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第２章　児玉党の活躍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第１節　児玉党草創期の動静・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第２節　治承・寿永の争乱と児玉党・・・・・・・・・・・・・・・7
　第３節　鎌倉幕府の成立と児玉党・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第４節　建武の新政権と児玉党武士・・・・・・・・・・・・・・・16
　第５節　南北朝期の児玉党の動静・・・・・・・・・・・・・・・・17
　第６節　室町幕府と児玉党一族、そして児玉党の消滅・・・・・・・18

第３章　児玉党の一族詳説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　第１節　庄氏一族・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　第２節　児玉氏について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　第３節　塩谷氏について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
　第４節　真下氏・富田氏について・・・・・・・・・・・・・・・・39
　第５節　その他の地域の児玉党・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第４章　児玉党一族の館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
　第１節　児玉党庄氏一族の館・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
　第２節　児玉党の他の一族の館・・・・・・・・・・・・・・・・・44

第５章　児玉党とその伝承など・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　第１節　児玉地方に伝わる伝説・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　第２節　各地に伝わる伝説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
　第３節　児玉党と軍配団扇紋・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

おわりに
参考文献一覧

『本庄市の武蔵武士』―武蔵七党児玉党の活躍とその後―

はじめに

児玉党とは、古代末期に於いて武蔵国児玉郡を中心としてその周辺地域及び上野国西部地域を本拠とした血縁関係で結び付いた同族的武士団である武蔵七党の一つである。治承・寿永の内乱期に坂東武者として名を馳せ、全国各地に新たに所領を得て移住していく者が多く、各地に一族が広がっていった。児玉党一族は源平合戦で華々しい活躍をし、武蔵武士の名を世に広めたが、その後の度々起きた内乱や西国各地への移住等により、次第に歴史の彼方へと消えていった。そんな児玉党一族についてその動静について本庄市域を本貫地とした一族を中心として概観していく。

第１章　児玉党の発生

第１節　古代末期から中世初頭の児玉

⑴　公家社会から武家社会への変貌

古代における児玉地方の様子は史料も少なく判然としないが、天平19年(747)に児玉郡の内50戸が東大寺の封戸に編成され、さらに東国には馬牧が多く設置されたが、児玉郡内にも郡の南西部の山間部に秩父牧の一つ阿久原牧が設置された。阿久原牧は朱雀院の私牧であったが、承平３年(933)年４月に勅旨牧となった。このように東国地域が中央集権体制に組み込まれていたことがわかる。

児玉党の祖を祀る有氏神社(神川町)

この地域は古墳群が多く存在し、また条里制が施行され九郷用水が早期に開削されその条里水田に用水を供給した。しかしながら古代末期になると東国各地で「蹴馬の党」と呼ばれる集団が横行し、官物を奪い取る等の事件が続発した。このことは東国で馬を使用した武装集団が各地に成長したことを意味している。東国では地形的に物資の輸送を馬に頼っており、東国各地に多くの馬牧が設けられ、有力領主層はその馬を持って租税の輸送を行ったが、世情不安が広まると各自が武装化していく場合が多かったと思われる。天永４年(1113)には相模国で愛甲内記太郎が横山党に殺害され、横山党が追討されるという事件が起きた。この事件は史料上で東国において「党」と称する武士団が登場する最初の例となった。おそらくは同じ頃には児玉党も成立していたのではないだろうか。

⑵　武士の発生(武蔵七党と坂東八平氏)

１．武蔵七党

武蔵七党は、平安時代末期から鎌倉・南北朝時代にかけて、武蔵国を中心として上野、相模といった近隣諸国に広がっていた中小の同族的武士団の総称である。実際には横山党、猪俣党、村山党、野与党、西党、児玉党、丹党、綴党、私市党など七つ以上の党があったが、その中から七つの党を選んで武蔵七党と呼ばれた。七党の組み合わせにはいく通りかあって一定していない。鎌倉時代に鎌倉幕府が編さんした記録の『吾妻鏡』には「横山党」・「児玉・丹の党類」などとあり、「武蔵七党」の表現はまだ見られず、『平家物語』では「児玉の人ども」、「党には猪俣・児玉・野井与・横山・西党・都筑党・私の党」とあって七つの党をあげている。『太平記』では「武蔵七党」の表記が多出することから南北朝時代以降に呼ばれるようになったものであろうか。

2．坂東八平氏

坂東八平氏とは、平安時代中期に坂東(関東地方)に下向して土着した桓武天皇の子孫平高望流の内、鎮守府将軍平良文を祖とする八つの氏族をいい、「八平氏」と呼ばれた。９世紀末に上総介として下向した平高望の系譜を引くといわれる武士である。関東には平高望の子孫として上総氏・千葉氏・三浦氏・中村氏・秩父氏・鎌倉氏があったが、坂東八平氏と称する時は上総、千葉、三浦、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾の八氏をさす場合が多い。他にも中村氏、鎌倉氏、土肥氏などが入る場合もある。八平氏の一族は、関東の国々で在庁官人として国衙の要職を勤める場合が多く、上総国等の親王任国制下の国では次官の「介」となり実務を取り仕切っていた。そのため武蔵七党などの中小武士団とは別格であり「大名」等と称された。なお、三浦氏からは和田・杉本・佐原氏などが、秩父氏からは畠山・河越・江戸・小山田・稲毛・榛谷・葛西・豊島・渋谷・高山・小林氏などが出ている。

⑶　荘園制と児玉条里(阿久原牧と児玉庄)

1．阿久原牧

空から見た阿久原牧

秩父牧を構成する牧の一つで、児玉郡の阿久原牧と秩父郡の石田牧の二つで秩父牧を構成していた。阿久原牧は皇室の朱雀院領秩父牧の一つであったが、承平３年(933)に勅使牧となっている。記録上、延喜３年８月13日に『政治要略』(平安時代の政務運営等を記録した書)に朱雀院領武蔵国秩父牧の名が初めて登場する。記録には秩父牧として名を見せ阿久原牧の名がみえるのは、承平３年(933)に朱雀院領秩父牧が勅使牧になった記事がある。『政治要略』に秩父牧は「一処秩父郡石田牧、一処児玉郡阿久原牧」とある。これにより秩父牧が秩父郡石田牧と児玉郡阿久原牧より構成されていたことが分かるのである。『政治要略』のほか『西宮記』・『貞信公記』・『本朝世紀』・『日本紀略』・『小記目録』・『権記』等の記録に秩父牧の記事が見えるが、概ね年に馬20匹を貢進する記事で、おそらくは阿久原牧では半分の10匹貢進が例年の数だったのであろう。

2．児玉庄

空から見た共和地区

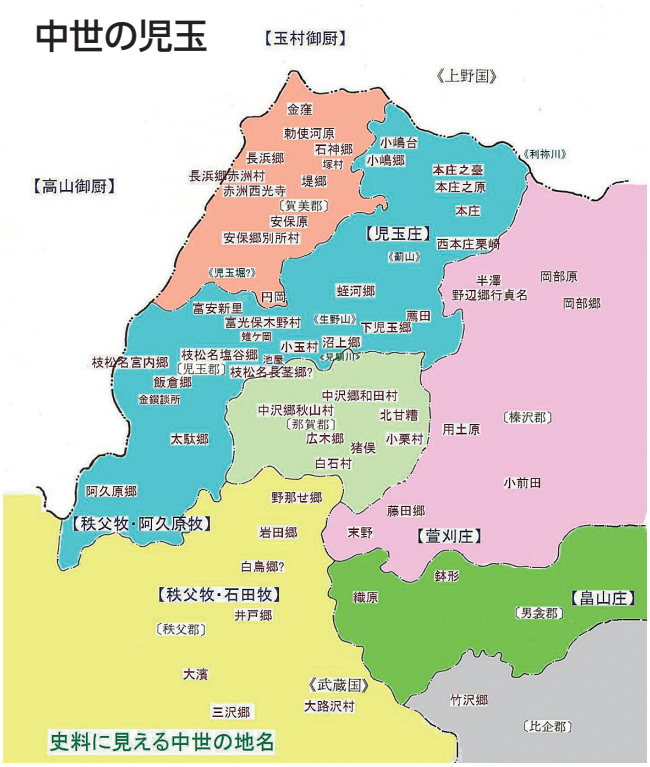
古代末期において児玉郡内に児玉庄という荘園が存在した。この児玉庄の規模や範囲などは史料が残されておらず内容を知る術はない。しかし児玉党一族の分布や中世後半から近世の史料により児玉庄と中世の郷村について考えてみよう。

児玉庄が信頼できる史料上に登場するのが、京都の貴族九条兼実の日記『玉葉』で、『玉葉』安元元年(1175)11月の条に、児玉庄が上野国高山御厨に訴えられた記事が見られるのが唯一である。それ以外では信頼性は劣るが系図史料の『武蔵七党系図』(以下、『七党系図』と略す)と『吉野系図』の注記に児玉庄が見えている。

児玉庄が児玉郡内のどこに所在したか不明であるが、手掛かりとしてやや時代は下るが、文永11年(1274)の「大嘗会雑事配賦」(『金沢文庫文書』)に児玉郡衙が郡内の国衙領に賦課したと推定される文書がある。これには郡内の名・郷・村の記載が見られ、ここに児玉庄域と推定される地域が含まれていないので、逆に記載のない地域が荘域と考えられる。この史料には枝松・枝松久光名・富光保木野村・富安新里・近吉・薦田が見られ、さらに安保文書中にも枝松名が見られ、この名内には塩谷・宮内・長茎郷が含まれていた。これらの名・郷・村は旧児玉郡内の児玉町児玉地区から金屋地区にかけての地域が枝松名の範囲に含まれる。神川町新里地区も富安に含まれるので、郡の中西部地域は国衙領が多かったとすると、これらの地名に見られない郡の北東部の共和地区から本庄市にかけての地域と、本泉地区が児玉庄のあった場所と考えられる。これは児玉党庄氏一族の分布地域と重なっている。

『七党系図』には児玉庄大夫家弘、その子庄権守弘高とあるように、児玉庄の庄の字が名字となっていったものと思われる。特に児玉庄大夫家弘の「大夫」の称号は、地方豪族で五位相当の者をいい、その地の開発領主をいうともいわれ、まさに家弘が児玉庄の開発主体者であったものと思われる。

3．その他の中世の郷



鎌倉時代前半に於いて児玉郡内には枝松名(塩谷郷・宮内郷・長茎郷)・枝松久光名・富光保木野村(保木野)・富安新里(神川町新里・中新里)・近吉・薦田(美里町小茂田)・太駄郷の名や郷・村があり、これらの名・郷・村は旧児玉郡内の西南部の地域である。

時代はやや下るが応永３年(1396)の「日光輪王寺大般若経奥書」には児玉郡本庄郷・西栗崎、応永25年(1418)の「足利持氏御判御教書」(『安保文書』)に蛭河郷(児玉町蛭川)が見える。明徳元年(1390)の「藤原泰次寄進状」には下児玉郷(美里町下児玉)が、戦国期の天正５年の「北条氏邦朱印状」(『武州文書』)には入阿佐美・阿佐美之村(児玉町入浅見・下浅見)、天正18年の「小幡信茂判物」(鈴木文書)には両今井村・両阿佐美村・両富田村・四方田村などがあり、これらから考えても蛭川・真下・阿佐美・四方田・今井・富田・下児玉・薦田・本庄・西本庄・西栗崎などの郷村が存在していたわけである。

共和地区には九郷用水が通水し、この「九郷」とは九つの郷を指すともいわれ、「九郷」自体の呼び名も戦国時代には既に存在していた。

明治21年に作られた「共和村地誌」の一つ『蛭川地誌』付録の「九郷用水誌」によれば、九郷とは青柳郷(八幡山)・黄田郷(八日市)・真下郷・蛭川郷・今井郷・浅見郷・高関郷(四方田郷)・富田郷・北堀郷の九つをあげている。これは九郷用水の開鑿伝承や用水流域村に鎮座する金鑽神社の分霊社の存在から考えられたものと思われる。特に九郷用水流域に金鑽神社の分霊社が多く祭られており、開鑿伝承も古代まで遡り、金鑽神社が深くかかわっているので中世期のこの地域とこの神社との関係は切り離せない。現在の金鑽神社分霊社は単独で鎮座するものや境内社となっているものなど様々であるが、その分布は次の通りである。

八幡山、児玉、八日市、上真下、下真下、蛭川、入浅見、下浅見、高関、四方田、東今井、西今井、東富田、西富田、北堀、栗崎、西五十子、河内、太駄、美里町下児玉、神川町小浜、神川町下阿久原。

以上のように、九郷用水流域及び周辺地域には22か所に金鑽神社の分霊社が鎮座していた。

第２節　児玉党の発生

(1)　児玉党の出自考

平安時代も半ばを過ぎると、坂東諸国で武士の発生が見られる。その中で特に武蔵国周辺では「党」と呼ばれる中小の武士団が多く発生し、「武蔵七党」と呼ばれ血縁関係によって結ばれた武士団であったと言われている。武蔵七党は、児玉・丹・横山・猪俣・村山・私市・西・都築(綴)・野与党で、これらの内から七つをとって武蔵七党と呼ばれ、書によっては党の入れ替わりがある。一般にはこれらの党の総称として武蔵七党と呼んでいる。児玉郡周辺地域には児玉・丹・猪俣の三党が分布しており、児玉党の出自について考えてみよう。それは昔から系図を中心に考えられてきたため現在においても児玉党の出自を明らかにすることはできない。

有道家時(塩谷氏)・・・・『米良文書』
有道時綱(四方田氏)・・・『大徳寺文書』
有道重綱(　〃　　)・・・『金沢文庫文書』
有道弘光(四方田弘長カ)・『明月記』
有道行平(小代氏)・・・・『明月記』
有道俊平(小代氏)・・・・『小代文書』
有道有高(越生氏)・・・・『報恩寺年譜』
有道広経(真下氏)・・・・『鑁阿寺大御堂棟札写』
有道行成(浅羽氏)・・・・『坂戸市万福寺板碑銘』

1．丈部系有道氏

天長10年(833)に丈部長道・氏道兄弟が功により有道宿祢姓を朝廷より賜り、後に子孫の有道維能・維行が関白藤原道隆・伊周父子の家司を務め、伊周の失脚後武蔵国に土着した。(『医道系図』・『児玉町真下系図』・『上里町荘系図』等)

2．藤原・有道婚姻説

儀同三司藤原伊周の第二子伊行が父の中央政界失脚後、外祖父有道氏を頼り武蔵国に下向し土着した。藤原伊周が武蔵国の豪族有道氏の妻を娶り、その子伊行(遠峯)を党祖とする。(『七党系図』・『薦田系譜』ほか)

3．藤原伊周の長子顕長の子遠岩を祖とする

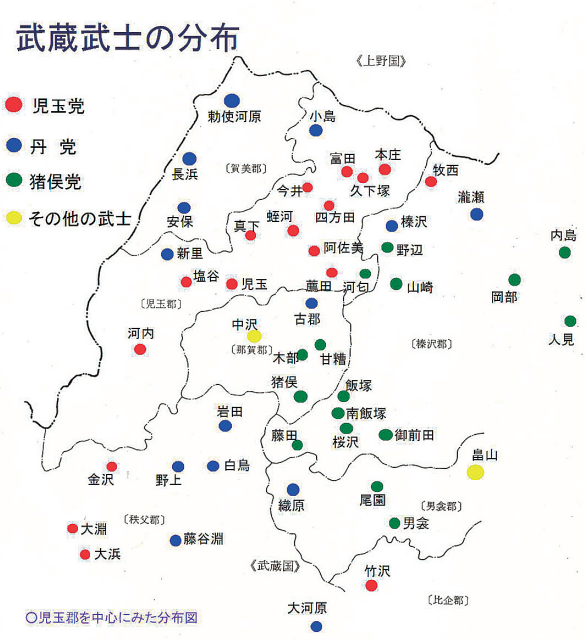
祖を伊周の第二子の伊行とする系図が多いのに対して、長子顕長の子に遠岩を位置づける。(『山口県児玉系図』・『岐阜県塩谷系図』・『岡山県庄系図』ほか)

4．源姓とする

赤松氏と児玉氏(或は秩父氏)の婚姻説、源姓の赤松則景が児玉家に養子に入りその第二子氏行を祖とする。(『奥平系図』・『小幡系図』・『長崎県針尾系図』・『熊本県児玉系図』外)

5．平姓とする

児玉党の一族の内、遠峯の長子弘行の系統は有道姓で、次子経行は平姓秩父氏と数代に渉る婚姻関係及び養子関係で子孫は平姓を称する。経行の女子は秩父重綱に嫁ぎ、子の行重・行高は重綱の養子となり平姓を称す。(『七党系図』)



以上の五例で、この外にもあるが若干異なるものの概ね上記の説に含まれる。いずれの説も系図上の注記より導き出されたため、中央貴族の藤原氏や武家の棟梁筋の源氏とのつながりを示しており、意図的に結び付けたものであろう。しかし児玉党の武士が古くから「有道姓」を称していたことは事実で、上表のように史料に見える。いずれも鎌倉時代初期には有道姓を称していたが、次第に藤原姓(真下氏は源姓)を称するようになる。

有道姓を称した一族と藤原氏とのつながりを示す史料はないが、児玉党の発祥の地、或いはその経済的基盤となったとされる阿久原牧との関係で、承平３年(933)に、牧の別当に藤原惟条が任命されているが、この惟条と維行(惟行)との関係が注目されよう。児玉庄大夫家弘が児玉庄を立荘し、その後に京都の藤原氏に寄進したとすれば、時代的にはさらに下ったものとなるが、それ以前に児玉党の祖は中央の藤原氏と何らかのつながりを持ったのであろうか。

⑵　児玉党の構成と一族の分布

児玉党は系図上56もの庶子家を分出したといわれる。56氏が全て在名を名乗ったわけではなく、現在比定出来る地名は限られるが、その一族の分布を見ると武蔵国から上野国西部にわたって分布が見られる。

『七党系図』頭書に書かれる名字には次の様なものがある。

庄・本庄・久下塚・若水（若泉）・四方田・宮田・蛭河・今居（今井）・阿佐美・小中山・塩谷・児玉・富田・薦田・長茎・新生・中条・新里・鳴瀬・里岩（黒岩）・岡崎・入西・浅羽・堀籠・長岡・大河原・小見野・粟生田・小代・越生・高坂・平児玉・秩父・与島・吉田・竹澤・多子・小幡・倉賀野・大類・稲島・狛島・片山・新屋・大淵・鳥方・真下・御名・大浜・奥平・吉島・山名・島名・小河原・木西（牧西）。

この中で庄は児玉庄から起こったもので特定の地名はない。入西は児玉党初期の入西資行（相行）が称したという名字であるが、入西は入間郡西部を示す略語であり、平児玉も有道姓の児玉氏に対して平姓児玉氏を意味する言葉で地名を負った名字ではない。秩父も本来は平姓秩父氏との婚姻関係・養子関係で引き継いだもので、本来は秩父郡の郡名を冠したのであろう。児玉姓も一族初期の段階では児玉郡の郡名から付けた名字であるが、鎌倉期以降になってからは一族が児玉郷内児玉村の地名をとって称したと考えられる。児玉党一族の分布は現在のＪＲ八高線沿線添いに多く分布していることがわかる。この地域は山地と平地の分かれ目、幾つもの小河川が関東平野に流れ込む場所に位置する。そこには谷戸田地域が多数あり、早期に開発が進んだ地域であった。これらの地域はかなり離れてはいるものの、道路網でそれぞれが結ばれている。南北には鎌倉街道上道の原形の道により結ばれ、上野国西部と秩父郡とは後に上州道と呼ばれた道で結ばれていた。そのため決して児玉党一族の分布は突飛的に広がっている訳ではないのである。

第２章　児玉党の活躍

第１節　児玉党草創期の動静

⑴　前九年の役と後三年の役

後三年軍記『国史教科書』

11世紀後半になると東北地方では安部氏が勢力を強め、政府より派遣された陸奥国司と対立し、国司軍を破る状況となった。政府は永承６年(1051)に源頼義を陸奥守として鎮定のため陸奥国に派遣した。頼義は安部頼良を降参させ一旦は鎮定に成功したが、さらなる干渉のため内乱に進展した。康平５年(1062)に出羽の豪族清原光頼・武則兄弟の応援を得て安部氏を滅ぼし戦乱は終結したが、これが前九年の役と呼ばれる内乱である。しかしその後、大功のあった清原武則が鎮守府将軍に任命され、この地に勢力を誇ったが、清原氏内部でも一族間の争いが生じた。武則の孫の真衡と清衡・家衡の異母兄弟の間で争いが生じた。源頼義の子の義家は永保３年(1083)に陸奥守に任官すると清原家の抗争の調停に乗り出した。義家は坂東諸国、特に奥州方面における源氏の影響力は父頼義の代に貫徹せず、京に於ける源氏の立場もまだ不十分と感じていたと思われる。義家は清原氏内部の争いを利用して源氏の名声を高めるチャンスと見たのである。清原氏の内部争いは真衡の病死をもって納まったが、今度は清衡と家衡(異父兄弟)の間で争いとなった。義家は清衡に加担し応徳３年(1086)に家衡を攻め、苦戦ししつも翌年には家衡を滅ぼすことができた。これが後三年の役と呼ばれる争乱である。

児玉党もこの段階ではまだ党と呼ばれる程成長しておらず、祖が北武蔵児玉地方の豪族として参加したものと思われる。特に後三年の役に源義家との関わりは、武士の記憶として伝えられた。児玉党の一族小代行平の置文(『小代文書』)があり、また横山党惣領の横山氏も参加し活躍した様子を『小野系図』に書き残したが、そこに児玉氏が参加していたことが載っている。

小代氏の置文は、児玉党初期の様相を語ってくれる。これは比企郡正代(当時は小代と書いたのであろう)を本拠地とした小代氏の源平合戦当時の当主小代八郎行平の記憶と、その曾孫伊重が書き残したものである。その中で後三年の役に児玉党の祖ともいえる児玉弘行の参加した部分をとりあげると次のようになる。

「弘行は副将軍として相並び、朝敵を追討した次第が絵図に書かれている。奥州征伐の後、有大夫弘行と有三別当経行は武州児玉郡を屋敷として居住していた。平賀朝雅が代官として上京した折り、蓮華王院の宝物の絵巻を見る機会があり、奥州後三年の合戦の次第を書かれている部分に、東八ヶ国の諸将は大庭に敷き皮の上に座っているのに、屋形の中に八幡太郎義家は大将軍にて御座しており、その対面に児玉有大夫弘行朝臣が副将軍にて書かれているのを平児玉倉賀野公行が拝見した。その後、噂では誰

かの陰謀により副将軍弘行の名が消されて別の者の名前にすり替えられているという。児玉一門で言上して絵を拝見して、もし噂通りなら正しく弘行の名に訂正してもらうように」

後三年の役に児玉弘行が参加した様子がこの置文で知られ、特に弘行が京都蓮華王院蔵の絵巻物に副将軍として大将軍源義家と館内に対座して描かれている。この絵巻物が実在したことは他の記録にも見えているが、おしくも現在失われているため弘行が書かれているかは不明となってしまった。

「小野(横山党)系図」には、横山次郎大夫経兼の注記に、後三年の役の後の出来事であるが「上野国の多胡四郎別当大夫が八幡殿に従わないので児玉有大夫広行が討ってを承り、舎弟経行が代官となり四郎別当を討ち取った」とある(入間田宣夫『中世武士の自己認識』三弥井書店)。この注記は直接後三年の役の記事ではないが、児玉広行(弘行)・経行兄弟が横山経兼らとともに源義家に属して活躍したことを記録したものである。また、『粟生系図』(『続群書類従』所収)には上野国多胡庄を領していた伴太大夫が八幡殿の命令で丹党・児玉党によって討たれたという。児玉党はその功でうすかねという鎧を賜ったという注記がある。

【小野系図】
横山次郎太夫
経兼
十八代、八幡殿奥州貞任責給時、横山野次大夫小野経兼承先陣畢。(中略)又八幡殿上野国多胡四郎別当大夫、高経、依不奉従于仰、**児玉有大夫広行承討手、以舎弟有三別当為代官、討取四郎別当**、與其首進武蔵国足立郡御狩之宿、首者経兼承之、
(後略)

『粟生系図』では伴太大夫の祖父民部大輔任隆が上野国多胡庄・玉村ミドリ・片山庄を知行し同国に住んだという。伴太大夫は討たれたが子孫は存続し片山氏・玉村氏・粟生氏を称している。どれだけ信頼が置けるか不明であるが、多胡庄の領主が八幡太郎義家の命により児玉党に討たれたという事件は小野系図と一致するのであながち嘘とも思われない。また片山氏は児玉党の一族に同氏があるので、あるいはこの時の事件以後児玉党に組み込まれて行ったのであろうか。

児玉党の祖児玉弘行が義家副将軍的立場にあったのかどうかは定かではないが、この絵巻物に書かれた様子は児玉弘行がそれなりの高い境遇に遇せられたいたことを示している。児玉弘行とその代官として活動した経行兄弟は、まだこの段階では後の児玉党一族の分布する地域に大きな影響力・或いは統率力を有していたと考えれば、義家にとってまとまった大きな軍事力となっていたと思われる。小代氏置文には弘行が児玉郡の館より、武蔵国入西郡(入間郡西部)の子息資行のもとを尋ねるとき随兵百騎でやってきたと書いているが、戦時の動員兵力はその数倍になるだろう。この時代では後の源平合戦時の庄氏や小代氏・越生氏といった児玉党個々の一族の動員数とは比較にならない勢力をもっていたと思われる。

⑵ 大倉館の戦い

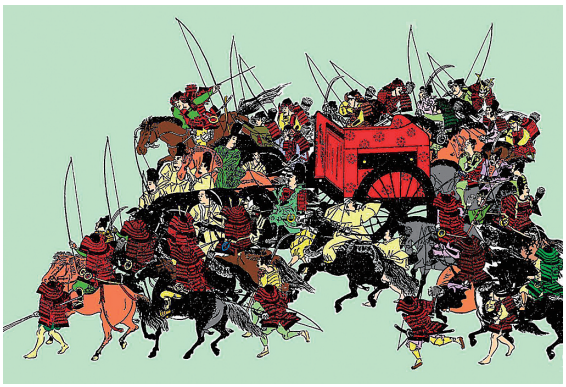
源義家は後三年の役により東国の有力豪族と主従関係を結び、武士の棟梁と仰がれたが、義家以降、嫡子義親の代に勢力を失った。特に源氏内部の争いや、朝廷の源氏台頭への恐れによる諸政策により、源氏の勢力は下降線を辿っていった。当然そのことは坂東諸国への源氏の影響力の低下をもたらしている。そんな中、源為義の子義朝の代になると、再び源氏の隆盛と坂東諸国への影響力の回復をめざして動きが活発となった。義朝は相模国に進出して先祖の縁故の地鎌倉を起点に大庭御厨に干渉し、さらに下総国相馬御厨へも干渉した。結果、三浦一族や大庭一族、更に千葉一族らを再び臣従させることに成功した。また義朝の弟義賢は独自に上野国多胡庄を起点に北武蔵の豪族と関係を強めた。義賢は秩父一族の河越重隆と強い関係を築いたようである。この頃秩父一族内部でもおそらくは何等かの争いが生じたようで、秩父家の家督が長男の流れ(畠山氏)より次男の流れ(河越氏)に移り、武蔵国留守所総検校職は河越氏が握っていた。義賢はそんな状況の中武蔵国大蔵館(嵐山町)に入ったものと思われる。

義朝も武蔵進出の機会を狙っていたと思われるが、義賢の南下は源義朝による関東地方の掌握の大きな障害となった。しかし秩父氏の内部争いをついて義朝は秩父家の本来の嫡男の流れ秩父重弘或いはその子畠山重能と関係を強めていった。

そんな中、久寿２年(1155)８月に関東で大きな合戦が引き起こされた。関東で覇権を握ろうと源氏間の一族の勢力争いがついに勃発し、北部上野国より南下する源義賢と、南部の相模国より北上をめざす源義朝の子義平が武蔵国大蔵(嵐山町)で衝突したのである。悪源太義平は父義朝の意を汲んで叔父源義

賢を大蔵の館に討ったのである。この段階で児玉党一族がどのように行動したのかは不明である。
結果、殺された源義賢と組んでいた河越重隆も殺され、子の能隆は秩父行俊に預けられたという(『越生町の歴史』)。このことは勝利者側についた児玉党一族が比企・入間郡へ進出する大きな要因になったものと思われる。

⑶ 保元の乱と平治の乱

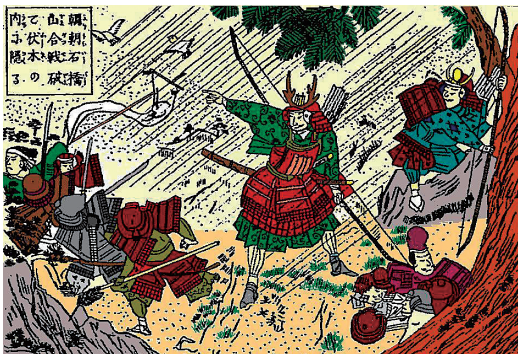


保元平治の乱『中学日本小史』

平安時代の末期、朝廷で起きた政変で、時の権力者鳥羽法皇のもと、子の後白河天皇とその兄崇徳上皇が対立し、さらに藤原氏においても摂政の藤原忠通と弟の左大臣頼長が氏長者をめぐって争った。後白河天皇の元には源義朝・平清盛・源頼政らが、崇徳上皇側には源為義・平忠正らの武士が集まった。保元元年(1156)７月２日に鳥羽法皇が崩御し、以後、両者の対立は急激に深まり、11日に遂に武力衝突した。乱は後白河天皇側の源義朝の火責めにより天皇方の勝利で終わった。この合戦では源平の棟梁が天皇方に与し、特に源義朝は坂東に進出して東国武士の多くを郎党化していて、この乱にも多くの東国武士が従っている。相模国では波多野・大庭・海老名・山内須藤氏、武蔵では河越・豊島・中条・成田・別府・箱田・玉井、児玉の庄、猪俣の岡部氏、斎藤・平山・横山、村山の金子・山口・仙波氏、上総の上総介、下総の千葉氏、甲斐の塩見氏等がいた。
保元の乱後、京都では平清盛と源義朝が朝廷内部で勢力争いを起こし、平治元年(1159)に平治の乱が勃発した。平清盛側が大勝し、以後平家中心の武家の持つ武力が無ければ政治は動かない社会へと大きく変貌した。保元の乱で武蔵武士は源義朝の郎党として参戦活躍したが、平治の乱では東国武士の動員が間に合わなかったのか、児玉党武士の乱への参加はみられない。しかしながら義朝の敗戦による死は東国における源氏の影響力を失わせることとなった。

第２節　治承・寿永の争乱と児玉党

⑴ 石橋山の合戦



石橋山合戦『絵本源平盛衰記』

治承４年(1180)８月に源頼朝が山木館を襲撃し平氏打倒の挙兵をした時には、児玉党を始め関東の武士団は平氏政権下に組み込まれていた。武蔵国の国司は平氏であり、畠山重忠の父重能とその弟小山田有重は京都に大番役で在番中であった。
石橋山合戦にはその多くが頼朝討伐の軍勢中にあったと思われるが、児玉党の動きは明確ではない。『平家物語』には児玉党の真下四郎重直が斉藤別当長井実盛や俣野景久らと共に平家方として参戦している。また畠山重忠が頼朝に加わろうとする三浦一族と合戦に及び、その後、三浦氏の本拠衣笠城を攻めたときに、河越氏が武蔵七党を率いて衣笠城を攻め落としているから、児玉党の武士はそれに従ったものと思われる。
頼朝は石橋山合戦で敗れて安房国に逃れたが、その後体制を立て直し、上総介広常や千葉常胤ら房総の豪族を配下に組み込むことに成功した。その後、武蔵国の豪族葛西氏や江戸氏、さらに畠山氏等もこれに従った。この段階で、武蔵国の有力者畠山・河越・江戸氏を始め武蔵七党など多数の武士が源頼朝方へ帰参した。児玉党武士もその多くが源頼朝の配下となったと思われる。なお、児玉党の庄四郎高家は木曽義仲に従い各地を転戦したといわれる。
頼朝は鎌倉に入り本拠と定めた。平氏は頼朝追討の宣旨を得て、平維盛を総大将として駿河国に向かい、富士川で両軍が対峙したが、平氏軍の士気は低下し逃げ去る者も多く、水鳥の羽音に驚いて潰走したという。頼朝は一旦追撃を命じたが、関東にはまだ従わないものもいたため、配下の進言により鎌倉に帰還し、その後、常陸国の佐竹氏を鎮圧して関東の平定がなった。

⑵　木曽義仲との戦い

粟津合戦『絵本源平盛衰記』より

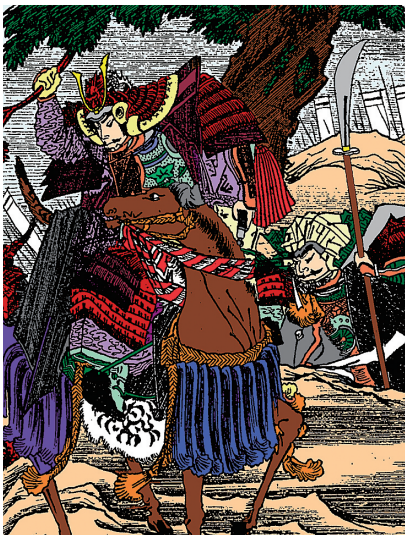
鎌倉を本拠と定めた頼朝は、弟の範頼と義経を大将として平家追討が始まった。頼朝軍は既に入京を果たし平氏を京から追い払った源義仲勢と戦うことになる。

木曽義仲は信濃国で挙兵し、北陸道の戦いで勝利を収め、入京を果たしたが、義仲は京都の治安維持に失敗し、さらに朝廷の皇位継承問題に口を挟んだことから、次第に後白河法皇に疎んじられた。後白河法皇は源頼朝の上洛を促し、東海道・東山道方面の実質的な支配権を頼朝に与えることで義仲にとって代わらせることを企図した。義仲は西国の平氏追討を命じられて播磨国に進んだが、水島の戦いで大敗して京に戻った。頼朝軍の上洛を知った義仲は後白河法皇の自分に対する態度に激怒し、法皇の居る法住寺殿を急襲し法皇を捕らえて幽閉した。義仲は前関白の松殿基房と連携して新体制を敷いたが、戦力は大幅に低下していた。

範頼・義経軍は宇治・勢多方面で木曽義仲勢と合戦となり大勝した。この時、佐々木四郎高綱と梶原源太景季の先陣争いで有名な宇治川合戦が行われた。『平家物語』には文中に源範頼に従う者に猪俣党の猪俣小平六範綱が見える。またこの時に畠山重忠に丹党が従っていた事が見える。児玉党の面々も同様に従って参戦したものと思われる。鎌倉勢は宇治・瀬田の合戦で勝利を収め京都六条河原まで進出した。この時、武蔵武士の会話が『平家物語』に記されている。塩屋(塩谷)五郎維広は児玉党武士、勅使河原五三郎有直は丹党武士であった。敗れた木曽義仲は腹心で四天王の今井兼平ら少数の者たちと落ちのびようとしたが、近江国粟津にて討死した。同じ四天王の一人樋口兼光は別行動をとっていたが翌日、義仲の死を知った兼光は京へ戻る道中で源義経の軍勢に生け捕られた。26日、義仲らの首と共に検非違使に身柄を引き渡され、２月２日、渋谷高重によって斬首された。『吾妻鏡』によれば、兼光は武蔵国児玉党の人々と親しい間であったため、彼らは自分達の勲功の賞として兼光の助命を訴え、兼光は児玉党に降服したのであった。義経が朝廷に助命を奏聞したが、兼光の罪科は軽くないとして許されなかったという。樋口次郎兼光と児玉党との間に何らかの深い関係があったことが考えられる。『吾妻鏡』では「為親昵之間」とあり、『平家物語』では「児玉にむすぼほれたり」とある。これは単に親しい関係以上の特別な関係があった事を意味している。一説には児玉党出身の娘が樋口氏の妻となり兼光を生んだとも言われるが定かではない。しかし児玉党と上野国に進出した木曽義仲との関係等を思うと、婚姻関係等があっても不思議ではない。

⑶　源平合戦

１．一の谷の合戦から屋島・壇ノ浦の合戦へ


一の谷合戦鵯越(絵本源平盛衰記)

西国に落ちた平氏一門は一旦九州まで落ちたがその後盛り返し、播磨国水島の戦いで木曽義仲勢を撃破して勢いに乗り、かつて平清盛が開いた摂津国福原まで戻り体制を整えていた。

範頼・義経軍は京を出て摂津国に向かい一の谷合戦が行われた。平氏は東の生田口、北の夢野口、西の塩屋口を警護し、南面は海に守られていた。摂津に到着した源氏軍に児玉党武士は、庄三郎忠家、同四郎高家、同五郎広方、同太郎家長、塩谷五郎惟広、秩父武者四郎行綱、小代八郎行平の７名の名前が『吾妻鏡』に見える。おそらくは他の一族もこれらの７人に代表されているのであろう。

生田口は範頼軍、夢野口は安田義定軍、塩屋口は義経・土肥実平軍が向かった。義経は鵯越途中から土肥軍と分れ急坂を懸け下り一の谷を急襲したという。

この合戦で武蔵武士の活躍ぶりが『平家物語』に書かれている。生田の森では先駆けした猪俣党藤田行康や私市党の河原兄弟が討死した。塩屋口では熊谷直実父子が先駆けしている。この一の谷合戦で源

氏軍は生田口と塩屋口の両木戸を突破し、有利に合戦が進み、平氏軍は敗走した。この合戦で熊谷次郎直実は平敦盛を討ち取り、猪俣党の猪俣小平六範綱は平盛嗣を討ち取った。さらに同党の岡部六野太忠澄は平忠度を討ち取る活躍をしている。

児玉党一族も活躍は華々しく、『平家物語』では児玉党が使者を派遣して武蔵国の前国司である平知盛に情勢の不利を伝える下りがある。さらに児玉党が平知章・監物太郎頼方主従を討ち取っている。児玉党三騎は団扇の旗を差して、中納言平知盛・武蔵守知章父子と従者の賢物太郎に戦いを挑んだ。この戦いで児玉党は３人が討死した。平知章を討ち取った武士は監物頼方に討ち取られているが、討死した児玉党３騎の内「大将とおぼしきもの」は『七党系図』で庄太郎家長の嫡子小太郎依家（頼家）が一谷合戦で討ち死にしたとしていることから、この「大将とおぼしきもの」は庄小太郎頼家のことかも知れない。同じく一谷合戦で児玉党の庄四郎高家が本三位中将平重衡を生け捕ったことが『平家物語』見える。しかしこれについては『源平盛衰記』では庄三郎家長とし、『七党系図』ても庄家長の手柄とする。岡山県『荘系譜』でも同様である。

庄四郎高家は児玉家弘の四男で児玉郡蛭河郷を本拠とし、後に高家の嫡流は蛭河姓を称した。『七党系図』では刑部丞に任官したとする。この刑部丞任官の正式な記録はないが、承久の乱における宇治川合戦の功名(『吾妻鏡』)に蛭河刑部三郎がいるので、高家が任官したことに疑いはない。しかしながら庄高家は『七党系図』と『源平盛衰記』では平経正を討ち取ったとしている。

また猪俣党の猪俣小平六範綱が平家の勇将越中前司盛俊を討ち取ったが、『源平盛衰記』には児玉党の塩谷五郎惟広が登場し、そこに猪俣則綱の心情が描かれている。おそらくは児玉党・猪俣党共に行動し、功名を競っていたのであろう。『源平盛衰記』にはさらに越前三位通盛(平清盛の弟教盛の嫡男)を児玉党が追いかけ、窮地に追い込み落馬したところを佐々木成綱に組伏せられた。これも児玉党の功名の一つである。

一の谷合戦で大敗した平家一門は海上に逃れ、讃岐国の屋島(四国の徳島県高松市)に本拠を構えた。平家は瀬戸内海を掌握し有力な水軍を持っていたが、鎌倉方にはそれがなく暫く休戦状態となった。その後、源義経は代官として京都に留まり、源範頼は鎌倉に帰還した。源頼朝は平家追討を範頼に託し、追討軍は鎌倉を立ち中国四国方面へ転戦した。範頼軍は長くのびきった戦線の維持に苦慮し、四国の平家軍の存在は鎌倉方にとって脅威であり、頼朝は義経に屋島に拠る平家攻撃を命じたのである。義経は屋島の平家軍を撃破し、つづいて下関の彦島に逃れた平家方との最終決戦というべき壇ノ浦の合戦で義経軍は大勝し平家は滅亡したのである。児玉党一族は一の谷合戦に続いて参戦したものと思われるが活躍の詳細は不明である。僅かに『源平盛衰記』には庄太郎家長、同五郎弘方の名が見られる。

２．奥州合戦

文治５年(1189)に起きた奥州合戦は頼朝が東北地方に勢力を持つ藤原泰衡を滅ぼした戦いである。奥州藤原氏は藤原清衡・基衡・秀衡の三代にわたって栄華を極めた。秀衡は頼朝に追われた源義経を匿ったが、頼朝は義経の引き渡しを要求した。秀衡はこれを拒絶し、頼朝と対決姿勢を見せたが間もなく死没し、嫡男の泰衡は頼朝の強い要求に屈して平泉衣川にて義経を殺害した。頼朝は泰衡を許さず、全国の御家人に動員令を発し自ら出馬する軍を起こした。先陣は畠山重忠であった。これを見て当初宣旨の発給を拒んでいた後白河法皇も泰衡追討の宣旨を出した。

進発した鎌倉勢の中に児玉党武士は、『吾妻鏡』によれば越生右馬允有弘、庄三郎忠家、四方田三郎弘長、浅見太郎実高、浅羽五郎行長、小代八郎行平、塩屋太郎家光の７名が見え、一の谷合戦時とは少し世代が変わっている。庄五郎弘方の代わりに子の浅見実高が見え、庄太郎家長の弟の四方田三郎弘長も見える。また越生氏や浅羽氏も見えている。なお、『吾妻鏡』の記事には奥州合戦出発前にも何人かの名前が見えている。伊勢国に所領を得た四方田五郎弘綱、鎌倉の鶴岡八幡宮放生会に勤仕した浅羽小三郎行光である。なお塩屋(谷)太郎家光については『七党系図』にはその名前が見えない。

奥州での合戦は鎌倉勢の大勝となり藤原泰衡は郎従の河田次郎に討たれた。しかしながらこの合戦で討死した児玉党一族がいたようで、塩谷太郎高光は一の谷合戦で先駆けし、奥州合戦で討死したという(建久９年の関東御教書写『肥後古記集覧』)。『吾妻鏡』に見える塩屋太郎家光のことであろうか。また『七党系図』には塩谷小太郎高光の弟の児玉二郎経光が奥州合戦で討死したとある。さらに高光兄弟の叔父の塩谷五郎維弘も「奥州合戦失亡または討死」とあり、大きな痛手を被っている。

第３節　鎌倉幕府の成立と児玉党

⑴　鎌倉幕府と児玉党武士

源頼朝が「鎌倉殿」と呼ばれ武士の頂点に立ち、鎌倉において幕府を開き武家による支配を開始した。全国に守護を置き、地頭による支配を行った。しかしながら京都における朝廷の支配も継続しており、朝廷と鎌倉幕府の二元的支配体制となった。そのため鎌倉殿の御家人となった武士たちは大番役として鎌倉に出仕するとともに、京都大番役で上京するケースも生じた。

児玉党武士は鎌倉時代には上記の大番役のほかにも幕府の各種行事を勤めたり頼朝の上洛に際して警護役で参加している。建久元年(1190)11月に頼朝は上洛したが、随兵として一族の多くの者が参加している。『吾妻鏡』によれば、越生四郎、庄太郎三郎、四方田三郎(弘長)、浅羽小三郎(行光)、塩谷六郎、阿佐美太郎(実高)、塩屋三郎、越生右馬允(有弘)、秩父平太、倉賀野三郎(高俊)、小代八郎(行平)、浅羽五郎(行長)、庄太郎(家長)、小見野四郎(盛行か)、庄四郎(高家)、塩谷太郎、真下太郎の17名の名が見える。以下、『吾妻鏡』の記事から話を進める。

建久４年(1193)２月に児玉党と丹党の間で争いが起き、今にも合戦になろうとしている旨が鎌倉に届いた。頼朝はこの争いを鎮めるために畠山次郎重忠に命じて調停を行わせた。４月には重忠による調停がまとまり「両党和平」したという。この争いは何だったのか、『承久記』にみえる丹党の安保刑部丞実光と児玉党の塩谷民部丞家経の会話に、「同国の者として、所領も境もを並べて、朝夕申通ずる中にて、今日も一所に打連れて」とあるように、安保氏と塩谷氏の例に限らず、丹党と児玉党の武士は所領の境を接するケースが多くみられることから、所領争いがあったのかも知れない。児玉郡内・秩父郡内・入間郡内に両党とも多く分布しているのである。これ以後、鎌倉時代を通して多くの内乱や事件が発生して、児玉党武士もそれに巻き込まれていくが、それについては後述し、平時における幕府内での児玉党武士の動静について触れておく。

建久６年(1195)３月に源頼朝は東大寺供養に出発する。児玉党武士も随兵としてこれに従った。参加した者は、小代八郎(行平)、浅見太郎(実高)、浅羽三郎、庄太郎(家長)、四方田三郎(弘長)で、建久元年の上洛ほど大規模ではないが児玉党武士の面々はほぼ同様である。寛喜元年(1229)正月３日の幕府の垸飯の儀式に、初めて本庄四郎左衛門尉(時家)の名が見える。時家は庄太郎家長の第四子で、本庄姓の初見である。

暦仁元年(1238)２月の将軍頼経の上洛があり、児玉党一族も多くの者が随兵として参加した。既に源平の戦いの時より40年以上経過しているため、多くの一族で世代が交代しており、さらに任官したものが多いのが特徴である。

真下右衛門三郎、秩父左衛門太郎、倉賀野兵衛尉、阿佐美六郎兵衛尉、塩谷民部六郎、四方田三郎左衛門尉、塩谷六郎左衛門尉、蛭河四郎左衛門尉、本庄四郎左衛門尉(時家)、本庄新左衛門尉(朝次)がいる。さらに６月の将軍頼経の春日社参詣には四方田五郎左衛門尉資綱が従っている。

仁治２年(1241)５月には、幕府の評定で小林小次郎時景が本庄四郎左衛門尉時家の狼藉を訴え、時家の所帯が収公される。これは時景の所従の藤平太妻が通行している時に時家が馬２匹を押し取る狼藉を働いたためという。

寛元元年(1243)７月の幕府の臨時御出の供奉人の一人に塩谷四郎左衛門尉の名が見え、寛元２年(1244)７月の鶴岡馬場で行われた流鏑馬で競馬役として富田次郎兵衛尉と浅羽左衛門四郎が見える。

建長２年(1250)３月に京都の閑院殿造営にあたり雑掌分担目録が作成され、児玉党一族にも分担分の賦課が割りつけられた。塩谷民部大夫跡として材木３本、小代人々として２本、本庄四郎左衛門尉、四方田五郎(弘綱)跡としてそれぞれ１本、浅羽人々として１本、越生人々として２本、蛭河刑部丞跡として河堰６丈、本庄三郎左衛門入道が６丈となっている。

建長６年(1254)正月の御的初めの行事の射手として秩父弥五郎の名が見える。正嘉元年(1257)９月の勝長寿院造営事始めの儀式の雑掌として北条政村の雑掌として四方田三郎左衛門尉景綱がいた。弘長元年(1261)正月の幕府年始の儀式で阿佐美左近将監、蛭河四郎左衛門尉の名が見え、以後、『吾妻鏡』には児玉党武士の名は見られなくなる。

建治元年(1275)５月の京都六条八幡宮造営に際しても児玉党一族に賦課がなされており、武蔵国として塩谷民部大夫跡10貫、浅羽小大夫跡８貫、阿佐美右衛門尉跡７貫、蛭河刑部丞跡７貫、庄太郎・同次

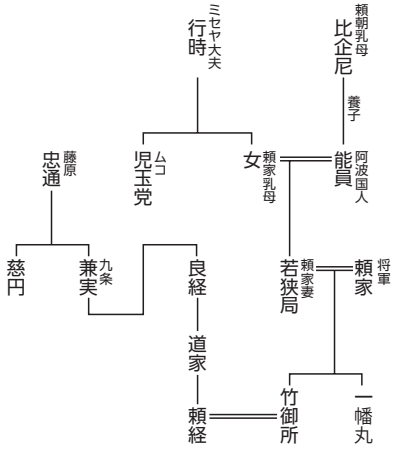
郎跡８貫、越生人々７貫、小代人々10貫、秩父武者次郎跡７貫、真下右衛門尉跡４貫、さらに美作国に庄四郎入道跡として８貫が記載されている。併せて76貫になる。この賦課高は武士の勢力を示していると言われ総貫数6641貫の内、北条氏一門が13人で2750貫を占めている。いわゆる大名と呼ばれる幕府内の有力御家人は足利義氏が200貫、長井左衛門太夫入道跡が180貫、城入道(安達義景)跡が150貫、小山下野入道跡が120貫、二階堂氏が二人で各100貫、さらに武田氏や中条家長跡・千葉介・小笠原入道跡がそれぞれ100貫である。児玉党武士それぞれの貫高は少ないが党全体でみれば幕府の有力御家人並の勢力があったとも言えるのではないか。

⑵ 鎌倉時代の内乱と児玉党

１．比企氏の乱

建仁３年(1203)に二代将軍源頼家の外戚であった比企能員の暗殺事件が起こり、比企一族が北条氏を中心とする幕府軍のために滅ぼされた。これは頼朝の没後、嫡子の頼家が二代将軍となり、比企能員の娘が頼家の子の一幡を産むと、能員は外戚として権勢を振い始めた。北条政子と父の時政は危機感を募らせ、比企能員排除の陰謀を企て、頼家が重病となったのを契機に行動を起こし、北条時政は比企能員を自邸に招き謀殺した。政子は将軍に代わり比企氏討伐の命令を発し御家人たちは比企氏の拠った小御所を攻め、たった一日で比企一族は滅亡したのである。この事件に児玉党一族が関与している。『愚管抄』(鎌倉時代の歴史書で慈円の著)によれば、「ムコの児玉党ナド、アリアイタル者ハ皆ウタレケリ」とあり、「(ミセヤノ大夫)行時ハ又児玉タウヲムコニシタル也」とある。

比企氏関係系図



『児玉町史中世資料編』より

比企氏は武蔵国比企郡を基盤とする武士で、周辺の武士ミセヤノ大夫行時の娘を妻にしたという。その行時も児玉党を婿にしていたともいう。ここでいう「ミセヤ」が何氏だか不明だが、以前、頼朝が京都の義経を襲わせた際に、水尾谷十郎以下の武士が参加したことが『吾妻鏡』に見える。『玉葉』にはこの時に「小玉党卅騎」が参加したとある。これを勘案すれば水尾谷氏は児玉党と関係がありそうである。水尾谷氏は比企郡川島町付近の武士で、比企郡内および隣接する入間郡西部には児玉党一族が分布している。この付近の児玉党武士は小代・高坂・粟生田・越生・小見野氏などがいる。但し、「小代行平置文」には、小代行平は手勢を率いて北条時政邸を警護したという。なお、先の「ミセヤ」も「水尾谷」と関係しそうである。

いずれにしろ比企氏事件で婿であった児玉党一族は大打撃を受けたものと思われる。一族の滅亡や、他の御家人の庇護下におかれ被官化したものもあったと思われる。

２．畠山重忠誅殺事件

元久２年(1205)６月、武蔵国の有力御家人であった畠山重忠が陰謀のため滅ぼされる事件が勃発した。これは前年に重忠の子の重保と北条時政の後妻牧の方の婿養子の平賀朝雅の京における口論から発したもので、朝雅は鎌倉に戻ると義母牧の方に重忠謀反の讒言を行い、時政は重忠謀殺を画策した。６月22日には鎌倉で謀反の噂が広まり、由比ヶ浜で畠山重保が謀殺された。重忠は19日に鎌倉に向かって菅谷館を出発し22日に武蔵国二俣川(現神奈川県横浜市)まで来ると鎌倉の異変が伝わり、幕府の大軍と対峙した。重保の死と自分に謀反の疑いにより追討軍を差し向けられたことを知り、館に退かず潔く戦うことを選び奮戦するも多勢に無勢で討ち取られた。戦後、重忠の手勢は少なく、兄弟は他国にあり、重忠の謀反は間違いで無実であったことがわかった。その後、重忠謀反を唱えた一族の稲毛重成・榛谷重朝父子が事件の首謀者として討たれた。この事件は北条時政と畠山重忠の武蔵国における勢力争いが裏にあったといわれ、北条氏の武蔵国への進出のために重忠は犠牲になったという。

この事件では児玉党は幕府軍にあり、重忠と戦った稲島二郎友行は重忠に討ち取られている。稲島氏は平児玉の秩父武者行弘の子五郎友行が初代である。

3．和田義盛の乱

和田胤長助命嘆願。『少年右大臣源実朝』

建暦３年(1213)５月に起きた幕府重臣の和田義盛の乱である。相模国御家人の和田義盛は三浦氏一族の武士で、幕府創業の功臣で要職の侍所別当を勤めていた。建久10年(1199)に源頼朝が死去して以来、梶原景時、比企能員、畠山重忠と幕府創業の有力御家人が滅ぼされ、北条氏の幕府内における権限が高まった。北条時政に替わり子の義時が二代執権となっていたが、和田氏を始めとする三浦一族の存在は幕府内での実権掌握を狙う北条氏にとって大きな障壁であった。北条義時は機会あるごとに和田氏を挑発し和田氏の反乱を狙っていた。５月２日に義盛は北条義時追討の兵を挙げる。しかしながら同盟を結んでいた同族の有力御家人三浦義村が寝返り、義盛挙兵の報を北条義時に報告した。鎌倉内で激しい戦いとなり、義盛に与したのは和田一族に、横山時兼率いる横山党、土屋大学助義清、古郡左衛門尉保忠、渋谷次郎高重、中山四郎重政と太郎行重、土肥先次郎左衛門尉惟平、岡崎左衛門尉実忠、梶原六郎朝景・同次郎景衡・同三郎景盛・同七郎景氏、大庭小次郎景兼、深沢三郎景家、大方五郎政直・同太郎遠政、塩谷三郎惟守などであった。和田義盛に与したのは一族と親類縁者に盟友達であった。この争乱は二日に及んだが、多勢の幕府軍のために和田軍は敗北した。和田氏に与して討死した者の中に児玉党の塩谷三郎惟守と塩谷太郎があった。惟守(『七党系図』では維盛)は治承・寿永の合戦時に『吾妻鏡』に名を見せている塩谷五郎惟広(『七党系図』では維弘)の子と思われる。塩谷太郎については『同系図』にある太郎維光と思われる。維光の注記には「建暦三年五月二日父同討死」とあり、父の維盛の注記は「建暦乱和田一味して被誅」とある。塩谷氏は嫡流が伊勢国方面へ西遷し、次の五郎維弘の系統がこの乱で大打撃を受けたため、末子の六郎家経の系統が東国にあって塩谷氏の中心となったようである。またこの乱で幕府方に生け捕られたものに富田三郎があった。富田三郎は極めて強力であったようで、乱後将軍実朝の面前で奥州産の大鹿の角二本を折るという強力を披露し、その罪を許されている。この富田三郎の実名は不明であるが、『七党系図』にある児玉党の富田三郎親家のことと思われる。『同系図』の注記には「富田三郎強力」とある。この乱で他の児玉党一族の動静は不明だが、恐らくは幕府軍に属したものが多かったと思われる。その中で小代八郎行平は北条義時より使者を命じられて幕府方として活躍している。

4．承久の乱

承久元年(1219)正月に三代将軍源実朝が甥の公暁に暗殺されるという大事件が起きた。将軍暗殺後の鎌倉幕府は北条政子が頼朝の正室として権力を振い、それを執権の北条義時が補佐した。京都では後鳥羽上皇が実権を握り、鎌倉幕府との対立姿勢を見せていた。執権義時は後継将軍として親王下向を後鳥羽院へ申し出たが、後鳥羽院は近臣の藤原忠綱を鎌倉へ送り、伊賀局の所領摂津国長江庄等の地頭職撤廃の条件を付けてきた。義時はこれら条件を突っぱねたが、親王将軍はあきらめ、摂関家から九条道家の子(後の将軍頼経)を鎌倉殿として迎え、後鳥羽上皇もこれを容認した。しかしながら両者の関係は悪化し、後鳥羽院は討幕の決意を固めた。

承久の乱　６月14日宇治合戦討敵人々

秩父平次五郎	一人、不知名	富田小太郎	一人
庄四郎	一人生捕	庄五郎	一人生捕
小代右馬次郎	二人	小越四郎	一人
秩父次郎太郎	一人、上臈云々	小越四郎太郎	二人
小越右馬太郎	二人	児玉刑部四郎	一人
小代与田次郎	一人	宿屋太郎手	五人

６月13日・14日宇治橋合戦手負人々

小代小次郎・蛭河刑部三郎・蛭河三郎太郎・塩谷左衛門尉・塩谷太郎・塩谷六郎・塩谷弥四郎・塩谷奥太・塩谷小三郎・塩谷五郎・富田太郎・富田五郎

６月14日宇治合戦越河懸時御方人々死日記

塩谷民部大夫・庄三郎

(『吾妻鏡』より)

承久３年(1221)５月14日、後鳥羽院は流鏑馬揃えと称して諸国の兵を招集した。これには朝廷北面の武士や近国の武士、さらに京都大番役の武士が応じた。翌15日に京方の軍勢は京都守護伊賀光季邸を襲い光季を討ち取ったが、光季はこの変事を鎌倉に急報した。京方は挙兵序盤の勝利に気を良くし、後鳥

羽院は「関東で義時と一所に死んでもよいと思う者はどれほどいるか」と近臣に問えば、三浦胤義は「朝敵となった以上義時に従うものは一人もいないはずだが、推定すれば千人足らずぐらいと思う」と答えた。すると児玉の庄兵衛尉家定が「胤義殿は変な事を申す。ただ千人であるはずがない、平家追討以来、義時より重恩を受けた者は数多くおり、何が起きても奉公したいと思う者は少なくみても壱万人を下る事はない。という家定も関東におれば義時に従う」と申した。これを聞いた後鳥羽院は機嫌を悪くしたが、後によくぞ申したと後鳥羽院は思った(『承久記』)。ここで登場する「児玉の庄四郎兵衛尉家定」は児玉党庄氏の武士で、おそらくは上京して北面武士として院に仕えていたのではないかと思われる。この庄家定については、『七党系図』に庄三郎忠家の末子「家定　左兵衛尉」とあるのでこれに該当しよう。庄家定のその後については不明である。

後鳥羽院は院宣を全国に発して諸国の武士を誘い、さらに側近の三浦胤義の兄三浦義村の挙兵を促したが従う武士はなかった。京都での上皇挙兵の報告は鎌倉方を動揺させたが、北条政子は御家人を集め、頼朝以来の幕府の恩顧を訴えて御家人の動揺を鎮め、京方追討を決定させた。

幕府軍は東海道・東山道・北陸道の三方より進軍し、美濃(岐阜県)・尾張(愛知県)等で京方の軍勢を破り京都を目指して進軍した。６月13日には宇治・勢多方面で両軍が対陣し、14日に宇治川で激しい戦いが行われた。この時、大雨で宇治川が増水したため、幕府軍は強引に宇治川を渡り多数の溺死者を出した。この宇治川の合戦では児玉党武士の奮戦が知られている。

『承久記』によれば、宇治橋の合戦では、「武蔵国住人塩谷左衛門尉家友押寄テ戦ケルガ、被射倒ヌ、子息六郎左衛門尉家氏、親ヲ乗越テ矢面ニ立テ戦ケルガ、是モ薄手負テ、父ヲ肩ニ引懸テゾ除ニケル」とあり、父が負傷してもその親を乗り越えて戦う当時の武士の勇猛果敢さが表れている。塩谷家友(家朝)は塩谷民部丞家経の嫡男で、塩谷氏は父・子・孫の三代にわたって参戦し、家経ほか数名が討死し、負傷者も多く出すという活躍をしている。宇治川の渡河にあたっては、丹党安保実光と児玉党塩谷家経は日頃よりの顔見知りで、すでに八十近い高齢で、子供達も多くあって、このままでは病気で死ぬものと思っていたが、この幕府の一大事に参加できて死んだとしても思い残すことはないと、二人は川に乗り入れて濁流にのまれて流死してしまう。この時、家経に従った塩谷四郎や塩谷権次郎太郎も一緒に流死してしまった。

『吾妻鏡』では、この合戦で功名を挙げた者に秩父平次五郎・同次郎太郎・富田小太郎・庄四郎・小代右馬次郎・同与田次郎・小越四郎・同四郎太郎・同右馬太郎・児玉刑部四郎・宿屋太郎がおり、負傷した者には小代小次郎・蛭河刑部三郎・同三郎太郎・塩谷左衛門尉・同太郎・同六郎・同弥四郎・同奥太・同小三郎・同五郎・富田太郎・同五郎がおり、蛭河氏や富田氏の名前も見える。討死したものは塩谷家経と庄三郎しか載せていないが、宇治川で流死したものは『承久記』では塩谷家経以外にも二人載せているので、実際はかなり多くの者が死傷したものと思われる。

この承久の乱には幕府方として多くの児玉党武士が参戦し活躍した。その活躍の結果、勲功の賞として新たに獲得した地頭職は新補地頭として従来の本補地頭と区別して表現されている。児玉氏も新補地頭として安芸国下竹仁村を獲得している。

５．宝治合戦

熊本県荒尾市浄業寺の小代氏墓

宝治元年(1247)６月に起きた北条氏とその外戚安達氏が三浦一族を滅ぼした事件。鎌倉幕府内では三代執権北条泰時の没後に、得宗専制に不満を持つ北条氏一門や成人した将軍頼経を担ぎ出そうとする勢力と、北条得宗家と安達氏との間で不穏な情勢となっていた。特に外戚の安達氏は同じく外戚となる有力御家人の三浦氏を強く警戒していた。安達家当主で高野山にあった安達景盛入道は特に三浦氏排斥の強硬派で、景盛は高野山を下山後、三浦氏打倒の行動をとった。時の執権時頼は安達・三浦両氏の調停を図ったが、安達氏側が戦いを仕掛け、結果三浦一族が滅亡した大事件であった。この合戦における児玉党一族の動静は不明だが、小代重康は北条得宗家側にあって活躍したようである。幕府より重康の父重俊は重康の活躍を賞されて肥後国野原庄(熊本県荒尾市)を拝領している。記録は残されていないものの、得宗被官となった庄氏や蛭河氏・浅羽氏等は当然得宗家側として活躍したものと思われる。

６．二月騒動

文永９年(1272)２月に起きた北条一族内での内紛。６年前の文永３年(1266)に蒙古より国書が届き、その返書問題や異国警護をめぐって鎌倉は騒然としていた。この頃、実権を握る北条得宗家に不満を抱く京都の六波羅探題南方の北条時輔や、鎌倉の名越時章・教時兄弟、教時の子の宗教が謀反の容疑で誅殺された。この追討を主導したのは執権の北条時宗と連署の北条政村だったという。この事件の伏線は26年前の寛元４年(1246年)に起きた宮騒動(寛元の乱)にあった。北条得宗家に対して庶家の名越光時と前将軍頼経らが起こした反乱未遂事件で、光時は鎌倉から追放された。光時の弟の時章や教時も関与したと推定されるが、この時は罰せられなかった。今回の事件で得宗家被官が討って役として差し向けられたが、事件後、名越時章は無実だったことがわかり、時章を討った５人の武士が処刑されている。この中に四方田滝口左衛門尉時綱がいた(『武家年代記裏書』)。四方田時綱は児玉党四方田氏で『七党系図』によれば、四方田三郎左衛門尉景綱の子で、兄に四方田新三郎左衛門尉高政がいた。正嘉元年(1257)９月に行われた勝長寿院造営の事始めの儀式で父の景綱が北条政村の雑掌を勤めている(『吾妻鏡』)ので、子の時綱も政村の手の者であったと思われる。なお、時綱処刑後に時綱の子太郎重綱や娘は父の菩提を弔うため仏教経典を作成している(『児玉町史』中世資料編)。

７．文永・弘安の役(蒙古襲来)

石塁上の武士『神風 元寇物語』

文永11年(1274)と弘安４年(1281)の二度にわたって日本に来襲した蒙古襲来事件(元寇)である。文永の役では蒙古軍は対馬・壱岐を席巻し、一部の兵力は博多に上陸した。鎌倉武士たちは馴れない蒙古軍との戦闘に苦戦したが、次第に集団戦法にも馴れ健闘した。日が暮れて一旦軍船に戻った蒙古軍は夜半の暴風雨のため壊滅したという。弘安の役では幕府は事前に防備体制を整えており、14万ともいわれる大軍を迎え撃ち、優勢に戦い九州上陸を許さなかった。今回も夜間の暴風雨により蒙古軍は壊滅した。

この二度の蒙古襲来に対して児玉党の武士たちが参戦したかは不明であるが、弘安４年(1281)閏７月に幕府は児玉六郎と同七郎に命じて、子息を安芸国の所領に下って異国警護に当たるよう命じている(『児玉文書』)。これと同様に児玉党の小代氏にも同様な命令が出ている(『小代文書』)。児玉氏は安芸国竹仁村の地頭職、小代氏は肥後国野原庄の地頭職を持っていて、いずれも子息たちに下向を命じているのである。史料は残されていないが、児玉氏と同様に塩谷氏(安芸国能美島地頭)や本庄氏(筑前国小中庄地頭)などにも同様な命令があったのではないかと思われる。『八幡愚童訓』(菊大路本(鎌倉時代末期))によれば、「九国ニハ少弐・大友ヲ始トシテ、菊池・原田・松浦・小玉党以下」とあり、児玉党武士も参戦したようである。九州の児玉党といえば小代氏や薦田氏が考えられよう。しかしながら小代文書中には、該当する文書は見られない。薦田氏については、薦田基氏調製の『薦田出自系譜』によれば、薦田盛秀が文永11年蒙古襲来の時、九州にはせ参じたという。さらに弘安４年の蒙古合戦で功があったといい、正応２年に肥前国神崎庄一部を勲功賞として賜うという。なお、幕府は蒙古軍への反撃を計画して高麗国征伐のため兵船と水手の準備を六波羅探題に命じた。探題はそれを受けて２通の「六波羅探題施行状案」(毛利家文書)を発給した。１通は弘安４年８月に備中国の庄四郎太郎入道ほかに命じているが、この命令は同年９月には取り消されている(川添昭二「伝記を書くということ」『本郷』吉川弘文館)。備中の庄氏は水軍にも通じていたのであろうか。

８．霜月騒動

鎌倉時代最後の幕府内の大規模な内乱で、北条得宗家の執事で内管領の平頼綱と北条氏の外戚として権力を行使した有力御家人の安達泰盛(秋田城介)の幕府を二分する大規模な争乱となった。得宗被官と有力御家人の最後の抗争で弘安８年(1285)11月に勃発する。本来は北条氏の私的家人で御家人より身

分的には低い存在の被官であったが、得宗家の権力増大に伴い、その権力を行使する得宗被官の権力も増大し、鎌倉時代末期には主家をもしのぐ権勢を持った。

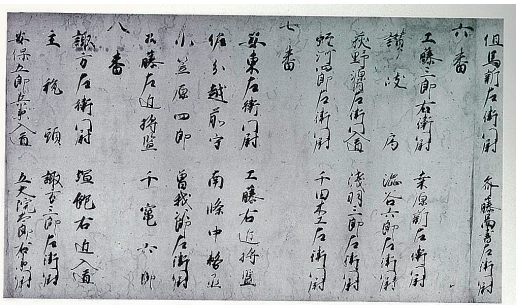
両者の対立は執権北条時宗在世時には均衡を保ったが、時宗が没し子の貞時が14歳で執権となると対立は急激に激化した。11月17日昼時に貞時邸で合戦がはじまり、午後４時頃には安達泰盛方の敗北となった。この争乱は鎌倉に留まらず全国各地に波及し、泰盛方は敗北した。泰盛に与した武士には小笠原・足利・武藤・伴野・伊東・鎌田・二階堂氏などがいた。

霜月騒動の結果、幕府の有力者安達一族が滅亡したため、北条氏に対抗できる勢力はいなくなった。度重なる内乱で北条氏に対抗できる御家人勢力が滅亡し、逆に得宗被官勢力が力を付け始め、特に霜月騒動の結果、得宗被官が強大な権力を持ち、得宗家から粛清されることとなった。これが正応６年(1293)に起きた平禅門の乱である。得宗被官の筆頭であるものを内管領と呼び、平頼綱はその権力の増大を恐れた北条貞時によって誅殺された。しかしながら北条高時の代には頼綱の一族の長崎高綱(円喜)・高資父子が再び内管領となり権力を振った。全国に波及したこの霜月騒動は各地に所領を得て移住していった児玉党系武士達にも大きな影響を与えたに違いない。『七党系図』には浅羽氏や片山氏・白倉氏が関与している記述がある。

⑶ 大名に被官化する児玉党一族

鎌倉幕府が成立して以後、幕府の勤番役や諸行事などに名を見せる児玉党武士は『吾妻鏡』で確認できるが、次第にその名が見えなくなる。その理由の一つには治承・寿永の合戦の活躍、或いは承久の乱や前後して起きた内乱で獲得した各地の所領に移住したりして鎌倉や本貫地不在になっていたこと、さらに前述したように度重なる幕府内の内乱で一族没落の憂き目にあい、生き残った有力大名の庇護化におかれ、御家人としての資格を失ったものがいた事などが考えられよう。

児玉党一族の中で実際に北条氏をはじめとして有力御家人の被官となった者で、庄四郎は北条重時より伯耆国北条郷地頭代職に任命される。浅羽三郎左衛門尉・蛭河四郎右衛門尉は北条時宗被官(得宗被官)、相州御方四方田三郎左衛門尉景綱は北条政村被官、足利義氏被官として雑掌真下中務丞広経がいた。この他、得宗被官と思われ内管領平頼綱に味方して誅された白倉成家や浅羽氏盛なども同様に北条氏の被官となっていたと思われる。



円覚寺文書

児玉文書

⑷ 西遷する児玉党(蒙古襲来と西国移住)

西国や東北地方に新たな所領を得た児玉党一族は、代官として一族の者を派遣して新所領を経営していた者が多かったが、次第に西国等の所領に移住していく者が増加した。その中でも美作国広野庄の地頭となった庄氏は本補地頭だったと思われ、建治元年(1275)の「六条八幡宮造営注文」に、美作国に「庄四郎入道跡」とあって、この庄氏一族が西遷していたことを窺わせている。特にその頃は蒙古襲来で幕府は動揺し、御家人を鎮西に派遣して警護を命じたが、さらに西国に所領を持つ御家人の子息等を所領に派遣して防備に努めるよう命じている。『小代文書』によれば、文永８年(1271)９月には小代右衛門尉(重康)の子息に肥後国の所領(野原庄)に下って守護人に従って防戦にあたらせるよう命じている。弘安４年(1281)には幕府は児玉六郎と児玉七郎に子息を安芸国の所領(下竹仁村)に差し下し、賊船が門司にあらわれれば守護人の催促に応じ防戦するように命じている(『児玉文書』)。これを契機に小代氏や児玉氏は西国の所領へ移住していくことになった。同じく安芸国能美島の地頭であった塩谷氏の一族も同様に移住したものと思われる。移住の契機については不明であるが、当主は関東にあって一族が各地の所領に派遣されそのままそこに定住したものも多かったと思われる。

⑸　鎌倉幕府の滅亡と児玉党武士の動静

『絵本太平記』新田一族挙兵

幕府は度重なる内乱によって北条氏以外の有力御家人の多くが姿を消した。梶原・畠山・和田・三浦・安達氏が滅亡し、さらにそれら大名に与した御家人も没落していった。承久の乱の結果、朝廷の討幕の動きは一旦封じられたが、有力御家人の滅亡は幕府の体質を弱体化させていった。多くの生き残った御家人は幕府の中枢から遠ざけられ日本各地に散り、幕府は得宗家と有力な得宗被官を中心とする体制となっていた。蒙古襲来以後、御家人の異国警護番役の負担増、恩賞の停滞、悪党の活性化、貨幣経済の進展、分割相続による弱体化など御家人の窮乏が増大した。当然ながら幕府に対する不平不満は増大した。承久の乱以後幕府は朝廷に干渉し、天皇擁立にも口出しした。そのため朝廷にあっては後醍醐天皇が即位してから天皇親政を目指した討幕への動きが加速した。正中元年(1324)に起きた正中の変(天皇および側近の幕府討幕計画)で、討幕計画が未然に防がれたが、罪を逃れた後醍醐天皇の計画はその後も推し進められた。元弘元年(1331)８月には計画が直前に密告により洩れたが、天皇は御所を脱出して山城国笠置山で挙兵した。楠正成らがそれに従って挙兵した。これが元弘の乱である。

幕府は大軍を派遣して鎮圧し天皇を捕らえて隠岐に配流したが、楠正成が挙兵し、幕府軍が鎮圧にてこずる間に各地で挙兵する者が出現した。播磨国では赤松則村(円心)が挙兵し、後醍醐天皇は隠岐を脱出して伯耆国船上山に拠り幕府追討の綸旨を発した。幕府は船上山に大軍を派遣したが、５月７日には幕府軍の中核であった足利高氏(尊氏)や佐々木道誉らが反旗を翻して六波羅を攻めた。関東では５月８日に新田義貞が上野国行品神社で挙兵し鎌倉に進軍を開始した。この時、備中国にいた庄氏は後醍醐天皇の呼びかけで参陣したようである。庄三郎高為の名も見える(『太平記』)。

六波羅連華寺(滋賀県)

幕府は承久の乱後、京都に幕府の出先機関たる六波羅探題を設置して朝廷の監視や西国の所領争いの裁定、京都の治安維持等を担当した。探題の責任者は北条氏が任命されていた。関西にあった足利高氏は真っ先に京都の幕府の出先機関の六波羅探題を攻め滅ぼしたのである。この時の探題は北条仲時で、高氏のために京都六波羅を負われ東国へ落ちのびようとしたが、近江国(滋賀県)番場にて野伏に襲われた一行は仲時以下一族郎等ともに自刃して果てた。『六波羅蓮華寺過去帳』によれば、仲時に従い自刃した者に、「塩屋右馬允演恒・塩谷弥三郎家弘・庄左衛門四郎俊充」なる武士がいた。児玉党塩谷氏の一族と備中国(岡山県)草壁庄の地頭として西遷した児玉党庄氏の武士と思われる。庄左衛門四郎俊充については、関西に伝わる各種庄系図では「左衛門四郎資房」に当ている。さらに関東では新田義貞が上野国で挙兵し、鎌倉街道を南下して鎌倉を攻めた時に、本領にいた児玉党武士の多くは新田義貞に従い鎌倉攻めに参加したようで、『太平記』には「児玉党五百余騎」とか「同国(武蔵国)住人庄三郎高為」等が見える。義貞率いる軍勢は鎌倉を攻め落とし、ここに鎌倉幕府は滅亡することとなった。この時、北条得宗家の被官となっていた児玉党の庄氏や蛭河氏・浅羽氏等は北条高時に従い自刃した者が多かったのではないだろうか。

第４節　建武の新政権と児玉党武士

⑴　雑訴決断所結番及び武者所結番と庄氏

元弘３年(1333)の鎌倉幕府滅亡により、翌建武元年に後醍醐天皇の建武の新政が開始された。新政権は増大する所領争い等を処理する機関として雑訴決断所を８月に設置したが、その二番の中に「庄左衛

門尉藤原長家」がいる(「雑訴決断所結番交名」『続群書類従』)。さらに建武３年(1336)４月に設置された武者所(京都の警備を目的とする機関)の４番に荘(庄)四郎左衛門尉藤原宗家がいた。庄長家と庄宗家は『七党系図』でいう庄四郎高家の第四子家国の子孫で親子の関係にあたる。庄四郎高家の直系の流れは蛭河姓を名乗り得宗被官となっていたが、四男家国は庄姓をそのまま名乗り、新田氏に従って倒幕に参加したものと思われる。長家・宗家とも藤原姓を称しており、『七党系図』の注記に「元弘三年十一月二十日如元可為藤原氏由被宣下」とあって、意図的に藤原姓をこの時に称したものと思われる。それまで児玉党一族は有道姓を名乗っていた。なお、庄氏の嫡流は早期に美作国又は備中国の所領に西遷したものと思われるが、『七党系図』の庄高家の四子の家国の注記に「東国」とあり、この系統は西遷しなかったことが分かる。

「武蔵七党系図略図」

庄四郎　四郎左衛門尉
高家―家国―時国―経家―**長家**―宗家
肥前守

※長家
元弘三年十一月二十日如元可為藤原氏由被宣下、武者所伺候之時者被書藤原長家畢。

「雑訴決断所結番交名」（「続群書類従」）
（前略）
庄左衛門尉　布施彦三郎入道
藤原長家　道乗
（後略）

⑵ 建武新政下の児玉党一族の動静

建武２年(1335)７月、北条高時の遺児北条時行が諏訪頼重に擁立され挙兵する事件が起きた。これが中先代の乱で鎌倉にいた足利尊氏の弟直義を敗走させ一時鎌倉を制圧する事に成功した。しかしながら直義は兄尊氏に急報し、尊氏軍の来襲により時行軍は潰走した。この時、北条時行に従っていた蛭河彦太郎入道が生け捕られている(「実廉軍忠状」)。この蛭河彦太郎入道の実名は不明だが『七党系図』に庄四郎高家(蛭河氏の祖)の嫡流の子孫に「某　彦太郎入道」とある。おそらくは鎌倉幕府滅亡時に生き延び得宗家嫡流の時行に従って捕らえられたのであろう。なお『太平記』には時行方に塩谷民部大夫も参加したとある。

足利尊氏は北条時行討伐のため鎌倉に滞在したが、後醍醐天皇の帰京命令にも従わず、新政権から離反する。天皇は新田義貞に追討を命ずるが敗北し、建武３年(1336)正月、尊氏は入京を果たした。この時、新田軍の中に児玉庄左衛門の名が見える(『太平記』)。また尊氏に従って山城国の桂川合戦で四方田太郎左衛門尉が討死し、尊氏は子の太郎左衛門尉に感状を発給している(「足利尊氏感状写」『古証文』)。また近江国の伊岐代合戦では同国内に所領を持つ矢島六郎が足利方として参戦していた(「田代顕綱軍忠状」『田代文書』)。天皇は比叡山に逃れ、奥州よりの援軍北畠顕家軍の活躍で一旦は京都を回復し尊氏を九州に追いやることができた。しかしながら尊氏は九州で体制を立て直し、５月には湊川の合戦で勝利し再び京に入った。尊氏が九州に落ちのびた際にも備中国の庄氏は尊氏方として同国の勢山を切り崩して立て籠もったという(『太平記』)。後醍醐天皇は吉野に逃れ南朝となり、ここに新政権は崩壊することとなった。尊氏は光明天皇を擁立して南北朝の時代へと進んでいく。児玉党の一族も北朝に南朝方にそれぞれ属して戦うことになる。

第５節　南北朝期の児玉党の動静

⑴ 南北朝の動乱と児玉党一族

南北朝期、南朝方に属した児玉党一族が『太平記』で語られている。しかしながら南朝の重臣北畠顕家を討ち取ったのは武蔵国の越生四郎左衛門尉であり北朝方だったわけである。『太平記』によって南朝方の児玉党の動きを追ってみよう。暦応４年・興国２年(1341)には北朝方の攻勢により北陸の諸国の南朝方の城は一つも無くなったという。そんな中で南朝の忠臣で武蔵国の住人畑六郎左衛門時能は越前国の鷹巣城に立て籠り、児玉五郎左衛門が従いゲリラ戦を展開している。北朝方にあっては足利尊氏の執事高師直の手の者に丹党武士で父の安保光泰から分れて独自の行動をとった安保肥前守忠実(直実)や児玉党系の小幡右衛門尉の名がある。さらに北朝方の内紛で観応２年(1351)に高師直が誅された際に、直義に属していた阿佐美三郎左衛門が師直に属し日頃より顔見知りで負傷した梶原孫七を泣く泣く首を取ったとある。いわゆる観応の擾乱である。同年に駿河国薩埵山で起きた尊氏・直義兄弟間の合戦では児玉党も参戦し多くの討死者を出したという。ここでいう児玉党は大類・富田氏らであった。『七

党系図』では富田又太郎親氏の注記に「観応二年十二月薩埵山高名」とあり、平児玉流の大類孫太郎行光(大類弾正行光)の注記には「薩埵山討死」とある。再び『太平記』の記述に戻ると、文和元年・正平７年(1352)に新田義宗は直義に従った武士達も集めて上野国に挙兵する。児玉党もこれに応ずるという。この児玉党には「浅羽・四方田・庄・桜井・若児玉」がいた。『太平記』では南朝方の新田義宗に属した児玉党が活躍するが、同書では旗の図柄や色などで区別した「一揆」と称する集団が登場してくる。児玉党も「打輪(団扇)の旗は児玉党」と表現されており、さらに「月弓一揆・白旗一揆・鍬形一揆・母衣一揆・花一揆・平一揆」などが登場する。「一揆」とは「揆(やり方・手段)を一とする者」という意味で、同じ目的を持った武士達が集団を組んだものである。延文５年(1360)に紀伊国(和歌山県)龍門山で起きた合戦で南朝方の塩谷伊勢守が討死した。この塩谷伊勢守が児玉党系の塩谷氏かは不明であるが、後年、武州白旗一揆に塩谷九郎入道行蓮(「塩谷行蓮軍忠状」)がいることから関係がありそうである。

⑵ 南北朝期の様相と児玉党武士

足利尊氏が建武政権から離反して新たに北朝を立ちあげると児玉党武士も南朝・北朝に分かれて戦うことになった。中国四国地方にあって安芸国下竹仁村に西遷した児玉氏は、尊氏が建武３年に北畠顕家の活躍で西国に落ちのびた際には尊氏に従い所領を安堵されている(『萩藩譜録』)。その後、観応の擾乱後は九州大宰府にあった足利直冬の元に参陣している(『児玉文書』)。直冬は尊氏の子であるが、父子関係に恵まれず尊氏の弟直義の養子となり、尊氏・直義兄弟が争うと直冬も義父直義側に立って戦った。なお足利氏に従った児玉党系の武士に四方田氏がおり、四方田入道は足利直義に仕えていたようで、足利直義が失脚して北陸落ちした時に従った武士の中に四方田入道の名が見える。

南北朝の時代、この時代は「悪党」が出現・跳梁する時代でもあった。幕府滅亡の少し前の正中２年(1325)に摂津国垂水庄が悪党の乱暴を六波羅探題に訴え出たが、その悪党の中に真下宮内丞がいた(『東寺百合文書』)。真下氏は戦国期に真下弥太郎広長が摂津国橘御園内に所領を持っていた(『政所賦銘引付』)ことが知られており、摂津国内で真下氏が活動していたのである。

第６節　室町幕府と児玉党一族、そして児玉党の消滅

⑴ 足利氏と奉公衆真下氏

室町幕府が成立し、足利氏の政権が樹立すると足利氏に従っていた武士達が幕府の実務をこなしていく。児玉党系の一族の中では早期に足利氏の被官となった真下氏が史料上に名を見せる。すでに鎌倉時代に真下中務丞広経が足利義氏の被官となり鑁阿寺の建設の際に雑掌として活動していたが、室町幕府創設後には広経の子孫と思われる武士が幕府の奉公衆として活動している。

⑵ 関西方面に地盤を築いた児玉党武士

鎌倉幕府の創設以来、児玉党武士達は日本各地に新たに地頭職を獲得し、中でも庄氏は本補地頭として早期に美作国広野庄に移住している。この庄氏一族は隣国の備中国にも草壁庄や小坂庄等の地頭職を得ており、美作国より備中国に基盤を移していったようである。児玉氏は承久の乱の勲功の賞として安芸国下竹仁村を獲得し、蒙古襲来を契機に移住していった。おそらくは塩谷氏も同様な道を歩んだものと思われる。児玉氏は奥州にも所領を獲得しており、一族の者を新たに獲得した土地に派遣し、そのままその地に移り住んだものと思われる。小代氏も同様に九州の地で活躍していく。以上のように庄・児玉・小代氏を除くと、児玉党の一族の多くが日本各地に散らばったと考えられるが、その多くがその後どうなったのかは不明である。

⑶ 関東や東北地方で活躍する一族

南北朝の動乱以後、児玉党の一族は関西方面や東北地方に一族を派遣したり、当主自ら一族を率いて移住する場合があった。さらに鎌倉時代に度々起きた内乱に連座して御家人としての地位を失った者も

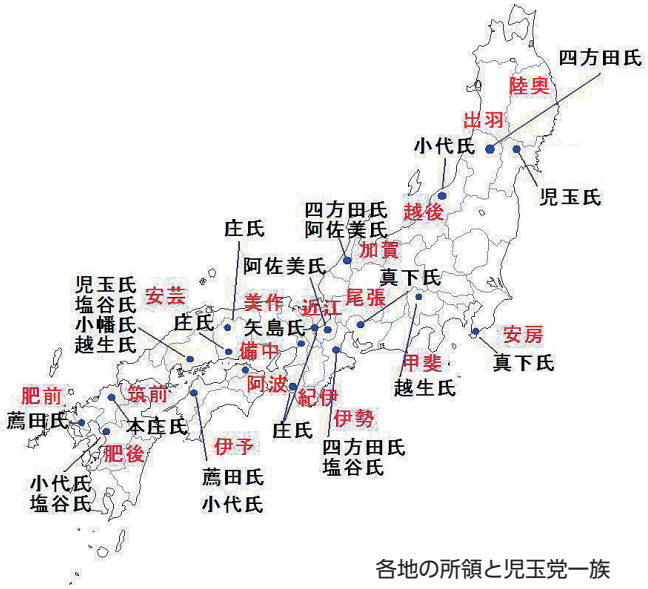
いた。生き残り関東に残った一族も南朝・北朝方に分かれて戦うこととなった。関東に残った一族も次第に従来の名字の地を基盤として血縁と地縁関係で結ばれた児玉党に限らず「党」的武士団の繋がりは解消され、新たに地縁や共通の利益を求めて関係を結んだ「一揆」へと変化していった。軍記物語の『太平記』でも児玉党が度々登場するが、次第に白旗一揆などの色々な一揆が登場し、軍記物語上からも武士団としての「党」が消えていくことになる。

第３章　児玉党の一族詳説

第１節　庄氏一族

⑴　庄氏と一族の分派

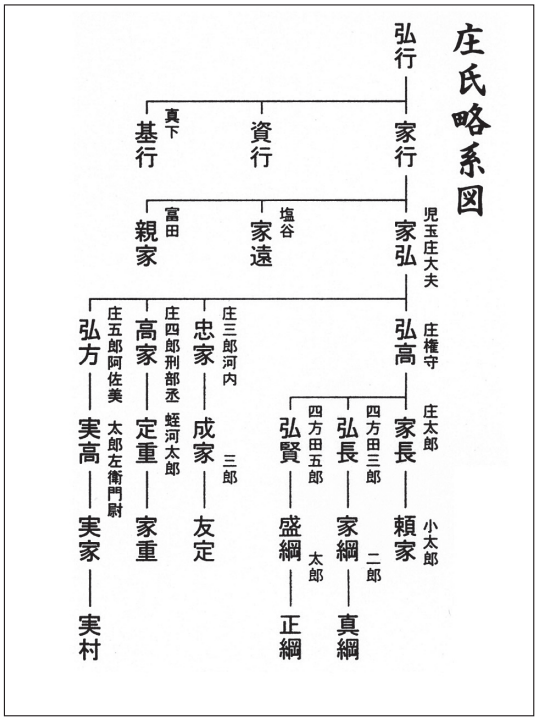
１．庄氏の位置づけ



各地の所領と児玉党一族

『七党系図』では児玉弘行は別当との注記がある。その子の家行は武蔵権守との注記があり、その子の家弘は児玉庄大夫である。これは弘行が阿久原牧の別当、つまり管理者であり、家行は武蔵国の権守で、権守とは定員外の役職を意味する。権力を有した場合と名ばかりの場合があったが、その地位にふさわしい者が任命された。家弘は児玉庄の開発者であり、その子の弘高は再び権守である。庄弘高は武蔵権守であり、児玉党の他の一族でこの地位についた者はいないから、まさに庄氏は児玉党を代表する家柄でありそれなりの家格を有していたといえる。

庄氏一族は系図上では庄・蛭河・阿佐美・今井・鷹田・本庄・四方田・牧西・久下塚・若泉・小河原などに分れている。この中で庄氏は保元の乱に庄太郎・庄三郎が源義朝に仕えて活躍した(『保元物語』)。源平合戦では庄太郎家長と叔父の三郎忠家・四郎高家・五郎弘方兄弟の名が見られ、さらに家長の弟の四方田三郎弘長と同五郎弘綱兄弟が活躍している(『吾妻鏡』・『平家物語』等)。その後、鎌倉幕府が成立し、庄氏一族も御家人として奉公し、鎌倉時代を通じて蛭河・阿佐美・本庄氏を分派していて、その名が史料・記録上(『吾妻鏡』等)に散見される。



庄氏の庶子家は九郷用水の流域に多くが本貫地を構えている。九郷用水の成立は古代に遡り、荘園内の水田に水を供給する九郷用水の重要性は述べるまでもないが、その用水路の維持管理の面からも庄氏の本拠は上流域にあったのではないか。九郷用水は幾つかの支流を分派するが、上流部の分派堰付近の右岸に真下氏がおり、真下氏が庄氏と比較して劣勢ながら、早期に児玉一族から分派して独立しているのは、九郷用水上流域右岸にいて用水管理面で大きな影響力を持っていたのだろう。おそらくは庄氏もこの真下氏に直接用水支配の面で対抗の出来る地域(真下氏の反対側の用水路左岸付近の現在の八幡山から吉田林)が庄氏の本拠にふさわしい。後年、八幡山に雉岡城が築かれるが、小丘陵上の地形にあり北部から西部にかけて条里水田が広がり、九郷用水本流及び支流も近く、さらに鎌倉街道上道も付近を通り、館を構えるには絶好な位置となっている。

2．共和地区における庄氏の分布

入浅見地区

初期庄氏にとって八幡山・吉田林付近が重要な拠点であった。庄氏の実質的祖ともいえる児玉庄大夫家弘は有力庶子家として忠家・高家・弘方を周辺地域に分派し、家弘嫡男の弘高は庄権守と称して、庄一族惣領として用水水口を押さえて九郷用水系下流域を支配したと推定される。下流域の庶子家は所領を分割相続したが、当然その管理下におかれたわけである。三男の三郎忠家は系図の肩書に「河内」の記載がある。おそらくこれは現在の本泉地区の河内を指すもの思われ、子孫に金沢(秩父郡皆野町金沢)を称す者がいるので、小山川(身馴川)流域に庄氏の勢力範囲が延びていたのであろう。この地域は児玉郡と秩父郡を結ぶルートで、かなり早くから結ばれていた重要な交通路であったと思われる。河内には児玉党と関係が深いとされる金鑽神社の分霊社があり、さらに隣地の元田には正嘉２年(1258)銘の大型の三連板碑があり、中世に於けるこの地域の重要性の一端が知られる。

四男の四郎高家は一時木曽義仲に従っていたことがあり、宇治川の合戦後に義経に従ったという。さらに『平家物語』では一ノ谷合戦で平重衡を生け捕ったとする。高家は共和地区の蛭川を支配し子孫は蛭河姓を称するようになる。蛭川地区は共和地区の条里水田地帯のほぼ中央に位置し、庄氏庶子家の中でもかなり有力な位置付けができる。なお庶子家の中には一部にはそのまま庄姓を名乗った者がいた。蛭河氏は系図上ではさらに地区東部の今井地区を支配して今井氏を分派している。

四方田氏館跡空撮

五男の弘方は共和地区の南西部の入浅見から下浅見地区を相続して阿佐美(または浅見)氏を称するようになる。入浅見地区は共和地区の南部にある生野山の幾つかの尾根に挟まれた谷戸田水田をその基盤とするようで、この地域には庄田・前田・鎌倉・矢場・城の内・内手などの中世的地名が残っている。阿佐美氏は阿佐美郷の南東部の身馴川流域にある薦田(小茂田)郷(現美里町)も支配していたようで、薦田氏を分派している。

なお共和地区から東側に続く北泉地区にも庄氏一族は広がっていた。関越自動車道本庄児玉インターチェンジの東側の四方田地区は弘高の三男以降の兄弟が本貫地として四方田氏を称した。治承・寿永の争乱時より弘高嫡男の庄太郎家長と共に四方田三郎弘長の名が見られる。『吾妻鏡』や他の史料には弘長の弟弘綱や景綱などの名も見られ、庄氏の中でも四方田氏の活躍が目覚ましい。四方田地区よりさらに東部の北堀・栗崎地区は中世後期に東本庄などと呼ばれており、おそらくはここが本庄の地で、庄太郎家長の次男以降の兄弟が本庄氏を称した。

鎌倉時代以前は「庄」氏は武蔵国北部の児玉庄を意味したが、一族の分割相続が進み、庄氏が幾つかの家に分かれると、庄姓では自分の所領を直接表現しなくなった。蛭河・阿佐美・四方田・本庄・薦田など具体的に地名を名乗って自らの所領を主張していかなければならない時代でもあったのである。

⑵　活躍する庄氏

1．児玉党庄氏の西遷と北条氏との関係

草壁庄(岡山県)

治承・寿永の内乱から奥州合戦にかけて庄氏一族は活躍し各地に所領を獲得した。鎌倉幕府成立後も御家人として活躍するが、建久元年(1190)の源頼朝の上洛に際しては、庄太郎(家長)以下、一族の多くの者が参加している。承久３年(1221)に起きた承久の乱にも庄一族は参戦し、庄三郎・庄四郎・蛭河刑部三郎・同三郎太郎の名が見え、庄四

郎は敵一人を生け捕りにしたが、庄三郎は討死にしている。この他にも『吾妻鏡』には多くの児玉党一族が見られる。

本庄四郎左衛門尉時家・本庄新左衛門尉朝次・蛭河四郎左衛門尉・阿佐美六郎兵衛尉・四方田三郎左衛門尉景綱・四方田五郎左衛門尉資綱・阿佐美左近将監・四方田新三郎左衛門尉(高政)・四方田滝口左衛門尉時綱・真下右衛門三郎などである。

庄氏は備中国草壁庄・小坂庄・美作国広野庄の地頭職、摂津国久貞名下司職、伯耆国北条郷代官職等、四方田氏は備前国本調本庄の地頭職・出羽国平泉寺付近の所領・加賀国野田村・伊勢国多々利庄と丹庄山公田等、阿佐美氏は近江国甲賀郡他、蛭河氏は但馬国相博保地頭職、本庄氏は筑前国小中庄地頭職などを獲得している。

建治元年(1275)の京都六条西洞院の若宮八幡宮の造営注文には、武蔵国に「庄太郎・同三郎跡」とあり、美作国にも「庄四郎入道」の名が見られる。庄氏の一部はまず美作国広野庄に移住し、その後、備中国に移り大いに活躍する。

得宗被官となった一族に蛭河氏がおり、徳治２年(1307)５月に相模国円覚寺で行われた大斎結番では、毎月四日が北条時宗の忌日で、これは北条貞時が家人を動員して行った北条家個人の行事である。これに勤仕した武士は北条氏の被官と考えられ、この中に蛭河氏や浅羽氏など児玉党一族と丹党安保氏が見える。庄氏自体も建長元年(1249)の文書によれば、庄四郎が北条重時の代官として伯耆国北条郷の地頭代に任命されていて、北条家の被官となっていたようである。

２．鎌倉時代の庄氏の系譜と動向

庄氏一族は『吾妻鏡』の中に数度登場し、特に鎌倉期前半においては『七党系図』の記載で一族の様子を一部知り得る。しかし後期になると『吾妻鏡』には記載がなくなり、『七党系図』の武士との確認が困難となる。さらに備中国に西遷した一族の系譜はさらにわからなくなり、岡山県方面に伝わる各種の庄系図も、それぞれ異なった記載のため、庄氏の系譜は極めて混乱したものとなっている。残された系図類より庄氏の系譜について考えてみる。なお岡山県内に伝わる庄系図はいずれも庄太郎家長から引く系図のため、その流れについて触れておく。

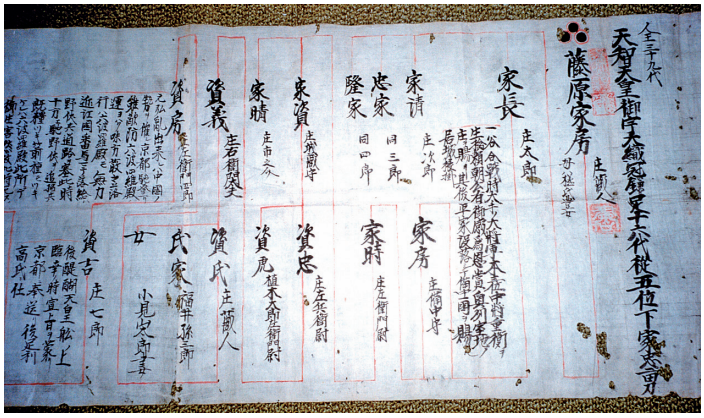
①児玉系図『七党系図』
○家長┬依家
　　└家次－朝次－時次－有次
②岡山県荘家所蔵『庄氏系譜』
○家長－頼家=家次－朝次－時次－有次－資房－資政－資氏
③岡山県『小田郡誌』所収系図
○家長－家定－信家－家重－家経－家房－資房－資経－資昭
④岡山県『矢掛町史・吉備郡誌』所収系図
○家長－頼家－頼房－頼澄－房時－頼資－資房－資氏－資政
⑤岡山県横谷庄氏系図
○家長－家房－家時－家資－資忠－資義－資氏－資房－資吉

①は『武蔵七党系図』である。『七党系図』自体も数種の写本があり、細部は異なるものの基本的には同じである。この系図は、後半部分については文書類や記録類と比較してある程度は信頼のおけるものである。特に庄家長の子供の記載の部分は家長と時家・朝次・国房が文書・記録にその名前が見られ、特に本庄国房の曾祖父時家という文書の記載はこの系図と一致しており、概ね信頼できる部分である。

『七党系図』では庄氏嫡流は頼家の代で記載が切れているが、頼家は一ノ谷合戦で討死にしたといい、子孫が断絶したとも考えられるが、七党系図には他の一族の多くに嫡流の流れが一代限りしか記載されていない例が多く見られる。早世した事以外に、早期に西遷したため、系図作成の段階で子孫の把握が出来なかったとも考えられる。頼家の子孫が早期に美作国や備中国に西遷したため、その子孫の状況がこの系図に反映されなかったともいえる。『七党系図』の庄氏の所には備中国との関係を示す記述は何も見られない。家次以下の流れについては、『吾妻鏡』には暦仁元年(1238)２月に将軍頼経が上洛した際に、本庄新左衛門尉朝次の名前が見られ、御家人として本庄姓を名乗り関東で活躍していたと推定されるので、この段階で既に備中国に西遷していた庄氏とは直接つながらない。そのため②の系図でいうような有次から資房へつなぐ系図は否定されよう。

②から⑤までの系図は岡山県に伝わるもので、いずれも庄太郎家長から引くことでは一致している。⑤の横谷庄系図では家長以前は全く児玉党との関係を記さないなど問題が多いが、家長が一ノ谷合戦で活躍して備中国草壁庄を拝領したことから始まる。この系図の中で注意を引くのが③と④の系図で、③では家長の後に家定・信家・家重・家経・家房・資房とつなぎ、庄一族が通字としている「家」の字を

多く用いていて、「家」から「資」へと通字が変化していることもさほど違和感はない。ただ家定については四郎兵衛との肩書があり、これは『七党系図』では家長の子ではなく、家長の叔父庄三郎忠家の子である。この家定の肩書は左兵衛尉であり、さらに『承久記』には後鳥羽上皇に仕えた武士に「児玉の庄四郎兵衛尉家定」があって、この者に比定できるであろうか。『七党系図』の家定の後は記載されていないため、この後の流れは不明であるが、③の系図の家定が同一人物とすれば、家長ではなく忠家の流れが備中の国に西遷したことになる。美作国広野庄や備中国小坂庄・草壁庄の地頭として活躍した庄一族に「四郎」を称する武士が多いのである。しかし④の系図では家長の後は、頼家・頼房・頼澄・房時・頼資・資房としてあり、こちらも通字的な面では違和感は見られない。頼房以降房時までは他の史料では一切名前を確認できず、この流れも正しいと言う確証は得られない。③・④・⑤の系図に出てくる武士名は何れの史料にも見られないのである。しかしながら鎌倉時代を通じて、庄余一頼資(文永10年『毛利家文書』)、庄四郎左衛門尉資兼(永仁５年『東寺百合文書』)、庄又太郎親資(嘉元３年『熊谷家文書』)と13世紀後半から14世紀初頭にかけて「資」の字を用いた者が多く見られるから、備中に移住した庄氏は「資」の字を通字としているのである。③・④の系図では資房のように14世紀前半になって「資」の字を使った武士が出てくるのと比較すると、実際には半世紀も早く「資」字を用いた一族がいたことになる。これを考えると③・④の系図も信憑性がおけなくなる。さらにこれらの系図では資房以降の歴代の当主についても、数人程度しか史料から名前を確認できず、逆に史料上に多く登場する庄氏一族の者がこれらの系図には当てはまらないのである。


岡山県の「庄系図」

庄氏の嫡流は『七党系図』では記載がなく、関東で活躍した庄氏は庶子家の中で蛭河氏や阿佐美氏の者が再び庄姓を称していたので、本流は早期に西遷したものと思われる。②～⑤の系図にしても、史料上に登場する一族の者と一致するものが極めて少ないため、その多くが創作されたものであろう。

３．史料・記録に見える鎌倉時代の庄氏

以上のように系譜史料では鎌倉時代後期の庄氏の動向はつかめない。文書史料では極めて断片的であるが鎌倉時代中期以降の庄氏について窺えるものがある。

既に触れたが、建長元年(1249)11月３日に、庄四郎は六波羅探題の北條重時より伯耆国北條郷の地頭代職に任命された。北条郷は現在の鳥取県東伯郡北条町付近にあった郷で、山田別宮(山田八幡宮)と深い関係があった郷である(北条郷の領家カ)。庄四郎がこの地頭代職に任命されたことは、北条郷の地頭が北条重時であったことから、北条重時の被官となっていたことを示すのではないかと思われる。

この庄四郎は『吾妻鏡』等の前半に数度名を見せている庄四郎高家とは別人と思われる。『七党系図』には庄四郎高家は承久２年(1220)に出家したとし、蛭河刑部丞と名乗っていた。さらにこの時期にはかなりの高齢と思われるためやはり別人であろう。翌年に起きた承久の乱に参加し手柄を立てた庄四郎が同一人かもしれない。また『承久記』によれば院の近臣に庄四郎兵衛尉家定の名が見えるがこれも別人であろう。『吾妻鏡』建長２年(1250)３月の条に、閑院殿内裏造営の雑掌分担目録が載っているが、この中に「蛭河刑部丞跡」と記載されており、この蛭河刑部丞は高家で、この時期には既に死去していた。

文応元年(1260)に、執権北条時頼が庄四郎の数年にわたる在京の労をねぎらった史料があるが、北條郷地頭代の庄四郎と同一人であろうか。

文永３年(1266)10月28日、鎌倉幕府は六波羅探題に対し、庄四郎入道信願の訴えにより狼ぜきを働く芥川馬允景信兄弟らの成敗を命じた。これは美作国広野庄の出来事と推定される。庄四郎入道信願については全くわからない。

文永10年(1273)12月17日に幕府は庄四郎太郎入道に対し、庄余一頼資の訴えにつき、美作国広野庄一件について対決することを命じた。これは美作国広野庄地頭の庄氏一族同志の争いに拘わるものである。

具体的な事は何もわからないが、文面に庄余一頼資と庄四郎太郎入道が名を見せており、後に備中国草壁庄・小坂庄で活動する庄氏一族の多くが「資」の通字を用いているので同族かと思われる。さらにこの事件の２年後の建治元年(1275)５月に作成された京六条西洞院の若宮八幡宮の造営注文に、美作国に庄四郎入道の名前が見られる。既にこの時期には美作国に西遷していたのである。なお、この史料を最後に美作国における庄氏の活動は不明となる。以後は備中国を中心として庄氏の活動が活発化してくる。

弘安４年(1281)８月12日に幕府は、六波羅探題に命じて高麗征伐兵船の準備を庄四郎太郎入道外に命じた(「六波羅探題施行状案」)。これは幕府が蒙古襲来の結果、逆にこちらから高麗を攻める事を計画したのであるが、８月にはこの命令を撤回している。ここに備中国浦々の兵船と水手の準備を命じられた庄四郎太郎入道は、美作国広野庄の一族争いを起こしていた人物と同一人と考えられる。これは庄氏が美作国と備中国に同時期に所領があったことを示している。

弘安６年(1283)８月14日には、六波羅探題は雅楽左衛門三郎入道を使者にたて、備中国三聖寺領の小坂庄雑掌が訴える事件で、小坂庄地頭の庄藤四郎入道行信(ぎょうしん)に六波羅にて対決するよう命じている。この一件は備中国小坂庄をめぐる事件で、京都三聖寺領であった小坂庄の雑掌が、庄務・年貢の件につき地頭の庄藤四郎入道行信の不法を六波羅探題に訴え出たもので、六波羅深題は雅楽左衛門三郎入道を使者とし、両者を対決させるために、この旨を庄行信に伝達させたものである。その４ヶ月後(ひほう)に、庄家(荘園領主)側の要求が満たされなかったようで、六波羅探題は使者二人に命じて庄行信に非法を止めるよう伝達している。

この事件はなかなか解決せず、さらに弘安８年(1285)４月11日に、六波羅探題は犬甘蔵人入道らをして備中国小坂庄一件につき沙汰(さた)するよう命じている。

このように庄氏は備中国小坂庄の地頭で小坂庄の侵略を行っている。侵略の内容は小坂庄の庄務・年貢の問題で、争論となってもなかなか解決しなかった。文面に「地頭代」とあることから地頭(庄藤四郎入道行信)自身は小坂庄以外の所にいて代官支配を行っていたのであろうか。また、「任関東延応御下知状」とあるから、この一件は46年も前の延応(えんおう)元年(1239)より争われていたことになる。庄氏が小坂庄地頭職を得たのもそれ以前であろう。

小坂庄は岡山県浅口郡鴨方町付近にあった荘園で、字名に小坂東の地名が残っている。庄氏が美作国広野庄の外に、この小坂庄の地頭職を得ていたことを示す史料である。尚、庄氏は備中国内にはこの小坂庄の外に草壁庄の地頭職を有しており、両庄は隣郡同士で極めて近い位置にある。

庄藤四郎入道行信については、広野庄の庄四郎太郎入道や庄四郎入道信願、さらに庄余一頼資とも、その繋がりは不明である。

永仁(えいにん)５年(1297)12月には東寺(とうじ)領の大和(やまと)国平野殿庄(奈良県平群郡)雑掌聖賢(せいけん)が、平野殿庄の農民達が年貢を抑留したことを六波羅探題に訴える事件が起きた。六波羅探題は深栖(ふかす)八郎蔵人と柘植(つげ)又二郎を使者として調(すけかね)べさせたが何等返答がないので、庄四郎左衛門尉資兼を使者として返答書を差し出すよう命じた。この庄四郎左衛門尉資兼は、備中国(岡山県)草壁庄の地頭として西遷した児玉党庄氏の一族と思われる。

翌年の４月11日に、平野殿庄雑掌聖賢は再び訴えたが、この時の六波羅の書状の文面にも使者として庄四郎左衛門尉資兼の名が見える。

六波羅下知状(熊谷家文書)

庄松王丸代国秀与伯父親資相論亡父敬願遺領之事

右、就訴陳状擬有其沙汰之処、去々年嘉元元八月十三日両方出和与状畢、如国秀・資兼等状者、敬願遺領等不漏壱所、以参分弐為松王丸分領、以参分壱可為、親資分領、次京都屋地事、子細同前、次自今以後、預在京御恩者、分限同前、次於池河狩倉等者、両方可令管領之、但遺領内摂津国久貞名御位田下司職並備中国草壁庄東方之地頭屋敷但就屋敷畠壱町余在之者、参分壱之外也、親資可令領知之分状並契状別紙在之、向後更不可有変改之儀、若背此状者相互可被申行罪科云々、如同日親資状者、子細同前者、捧和与状之上者、不及異儀歟、然則任彼状、向後無違乱可致沙汰也、仍下知如件、

嘉元三年六月十二日　　越後守平朝臣(花押)

遠江守平朝臣(花押)

嘉元(かげん)３年(1305)６月12日には、備中国草壁庄の庄氏一族で所領の相続争いが起きた。死去した庄敬願(けいがん)の遺領をめぐって、子息庄松王丸と伯父の又太郎親資が争ったものである。既に嘉元元年(1303)に双方より和与状が出され、同３年(1305)に六波羅探題より裁許が出されたのである。文面によれば敬願の所領は備中国草壁庄東方地頭屋敷・摂津国久貞名御位田下司職、その他があったらしい。裁許の結果、京都屋地や在京御恩をはじめ、遺領の三分の二を松王丸が、三分の一を親資が相続し、池河狩倉等は両方で管領することになった。

この庄氏一族は文面に、敬願・松王丸・国秀・資兼・又太郎親資の名が見られ、いずれも系譜等で確認できる者はいないが、永仁５年(1297)に大和国平野殿庄の事件に庄資兼が上御使として名を見せている。いずれにしてもこの庄氏はこの時期には西遷していたと思われ、京都屋地・在京御恩の記載からも、六波羅探題に出仕していたものと考えられるだろう。また庄氏が備中国や美作国以外に、摂津国久貞名御位田下司職も有していた。

４．鎌倉幕府の滅亡と庄氏

鎌倉幕府の滅亡にあたって庄氏一族がどの様な行動をとったか不明である。わずかに六波羅探題が滅亡する際に、探題の北条仲時に従って近江国番場宿の蓮華寺で自害した者の中に庄左衛門四郎俊充がいたことが『六波羅蓮華寺過去帳』や『太平記』に見える。この庄俊充については岡山県に伝わる各種の系図では、いずれも左衛門四郎資房として書かれており、名前が一致せず同一人物かはわからない。既に備中国に西遷した庄氏一族は後醍醐天皇に従って行動を起こしていて、岡山県に伝わる庄系図の内『庄氏系譜』には六波羅番場蓮華寺で自害した資房の子の資氏・資政兄弟は南朝方にあって活躍したという。資政の子の資昭は北朝に仕えたことが注記されており、この間の事情がこの系図ではよく説明されていない。

庄氏は北条氏の被官となった者もおり、北条氏の滅亡とともに大きな打撃を受けたに相違ない。しかしそれを示す記録はほとんど見られず、『太平記』には備中国住人の庄三郎高為が幕府軍にあって行動したことが見えている。また武蔵国住人の庄三郎為久は新田軍にあって鎌倉攻めに参加している。この鎌倉幕府滅亡にあたって庄氏一族も新田・北条両方に分れて戦ったようで、幕府滅亡後に起きた中先代の乱では、蛭河彦太郎入道が北条時行に従っている。

建武の新政権が誕生し機構が整えられて行くと、倒幕に功のあった庄氏一族も新政権の一端を担うことになる。建武元年(1334)に雑訴決断所の交名が作成され、東海道地域の雑訴(所領関係の訴訟)を取り扱う担当に庄左衛門尉長家の名があり、建武３年(1336)には武者所が結番されたが、これの四番に庄四郎左衛門尉宗家の名がある。長家と宗家は『七党系図』によれば親子の関係で、庄四郎高家の子孫にあたり庄氏流蛭河氏の一族である。蛭河氏は北条氏に被官化し北条氏とかなり密接な関係を持っていた。しかしこの庶子家の場合は北条氏に必ずしも従わなかったようで、蛭河姓ではなく元の庄姓を名乗っている。この一族と備中国に根付いた庄一族とのつながりは見られず、長家父子は関東にあって活躍した庄一族であった。

草壁庄(岡山県)

５．西国で活躍する庄氏

庄氏は本補地頭として鎌倉時代初期には備中国草壁庄に西遷した。既に述べたが隣国美作国広野庄にも地頭職を持ち、備中国内にも小坂庄の地頭職も有していた。

鎌倉幕府の滅亡に伴い庄氏もこの動乱で大きな転機に立たされ、この間の事情は明らかではないが、残された史料から庄氏の動向を見ていく。

建武４年(1337)８月11日、讃岐国守護の細川顕氏は、庄十郎四郎資方らの訴える讃岐国造田庄における造田長守らの違乱を、桑原常重を使者として処理させた。庄十郎四郎資方は名前に資の通字を用いていることからも備中囲草壁庄地頭の庄氏一族と考えられる。讃岐国造田庄の地頭であったのであろうか。

建武５年(1338)５月に陸奥国司北畠顕家が奥州勢を率いて和泉国堺付近で足利勢と合戦したが、田代顕綱・田代了賢(基綱)は足利方に属し合戦の軍忠状を提出した。この軍忠状には庄氏が一緒に参加したことを記録している。庄十郎・庄十郎四郎と載せていて、讃岐国造田庄一件の庄資方のことであろう。庄十郎四郎資方はこの後、康永３年(1344)にも造田庄で争いを起こしている。

康永４年(1345)正月22日、足利尊氏が山城国遍照院に同国中村の地頭職を寄進し、庄四郎左衛門尉(実名不詳)は武蔵守(高師直)より遵行使に任じられ、下地を同院雑掌に沙汰するよう命じられた。この庄四郎左衛門尉については不明であるが、40数年前の永仁５年(1297)に六波羅探題は、庄四郎左衛門尉資兼を東寺領大和国平野殿庄の争いの使者に命じているが、40数年の時間差があるので同一人かどうか

わからない。『建武記』の延元元年(1336)４月の「武者所結番事」に四番に荘(庄)四郎左衛門尉宗家が見えるが、この宗家のことであろうか。

正平６年(1351)10月22日、備後国守護岩松頼宥は長井出羽守貞頼に書を送り、備中国の不穏を伝え、備中国の庄四郎左衛門等が協力する旨を伝えている。

文和元年(1352)10月７日、室町幕府が庄駿河権守に対し、土師尾張権守と共に備中国河辺郷内の一分地頭職を雅楽以秀に沙汰させるように命じた。庄駿河権守は実名も不詳であるが、草壁庄の庄氏の一族と思われ、同じく備中国内に所領を持っていたと思われる土師氏とともに使者を命じられたのであろう。

庄氏館跡(岡山県)

正平９年(1354)12月21日、後村上天皇は備中国草壁庄西方地頭庄兵衛四郎並びに一族跡を金剛寺に寄進した。これは南朝の後村上天皇が金剛寺に備中国事壁庄西方の庄兵衛四郎並びに一族等跡の地頭職を寄進したものである。この時期中国・九州方面で足利直冬の勢力が盛んであり、直冬も南朝より惣追捕使に任命されたりしていた。恐らくはそんな状況からか北朝方の庄氏が草壁庄の地頭職を一時失ったものと思われる。金剛寺は後村上天皇の行宮所となるなど極めて緊密な関係があり、そのため所領の寄進を得たものと思われる。

草壁庄が庄氏の所領となったのは鎌倉時代の初期に遡ると考えられるが、嘉元３年の時の一族内の所領争いの際に、「草壁庄東方屋敷」と見え、後村上天皇が寄進した所が「草壁庄西方」とあることから、草壁庄は鎌倉時代において東西に分かれ、それぞれ庄氏一族が分割支配していたものと思われる。

正平18年(1363)10月14日、足利直冬は勲功の賞として吉河山城守に備中国草壁郷地頭職庄駿河守跡を宛てがっている。足利直冬が勲功の賞として備中国草壁荘庄駿河守跡を吉河山城守に宛てがったが、中国方面では以前南朝方の勢力が強く、草壁庄西方の地頭庄兵衛四郎一族も一時地頭職を失った。庄駿河守は先に見た庄駿河権守と同一人と思われるが、草壁庄東方の地頭であろうか。庄氏は後に北朝方の勢力が盛り返すにいたって、再び地頭職を回復している。

正平21年(1366)12月８日、足利直冬は吉河讃岐守に備後国河立庄・備中国庄駿河入道跡・石見国内田肥前守跡の地頭職を宛てがう。吉河氏は正平18年の段階で吉河山城守が草壁庄庄駿河守跡を直冬から宛てがわれているが、ここで言う庄駿河入道跡は草壁庄以外の所領を指しているのであろうか。それとも同一所領を吉河氏の別人に宛ったのであろうか。

応安元年(1368)４月、伊勢国茂永小泉御厨を押領したとして庄十郎が訴えられている。庄十郎(実名不詳)は貞治４年(1365)以来、守護の被官と称して武威を募り、押領を行って来たと言う。伊勢国内における庄氏の所領の有無や、動静は不明であるが、伊勢国の守護は応安元年当時は細川頼之である。

庄伊豆守元資の墓

この時期、他の史料で庄駿河入道・庄近江入道等の名が見えるが、庄十郎を含めそれぞれの関係は分からない。

応安４年(1371)６月６日、武蔵守細川頼之は、庄駿河入道・小串次郎右衛門尉に命じて、仁和寺雑掌宗尋の訴える同寺領山城国円城寺敷地・山林等を押領する竹鼻新左衛門尉入道覚智の知行を退け、下地を雑掌に渡させたものである。管領細川武蔵守頼之が庄駿河守に将軍の命を奉じて出したものである。

正平18年(1363)と同21年(1366)の『吉川家文書』に、備中国草壁庄庄駿河守・庄駿河入道跡の記載が見られるから、同一人であろう。管領細川頼氏から直接文書が出されていることから、幕府の奉行衆の一員であろうか。おそらくはこの段階で庄氏は草壁庄を回復していたものと思われる。

文中２年(1373)９月８日には、南朝方(北畠顕泰か)は伊勢国古和一族に、同国飯高郡深田御園地頭職志村方半分の庄近江入道知行分を、兵糧料所として知行させる。これは伊勢国飯高郡深田御園地頭職(志村方半分)を庄近江入道(実名不詳)が知行していたことがわかるが、庄近江入道については全く分からない。

応安８年(1375)２月９日には、石清水八幡宮領である備中国水内北庄の雑掌が、弘石大和入道らの押妨を受けている旨を室町幕府に訴え、幕府は庄四郎・松田左近将監入道らを使者として事に当たらせている。庄氏一族は度々庄四郎が登場する。

永徳元年(1381)12月15日、摂津国守護細川頼元は奈良又四郎と庄十郎三郎に命じて、高野山安養院雑掌の訴える同国崑陽寺庄西方内の地を御教書の旨に任せ沙汰させる。また至徳２年(1385)２月23日、細川頼元は再び遵行状を発給し、庄十郎三郎等を命じて大和入道蔵周の横妨を退け、下地を安養院雑掌に沙汰させた。

庄十郎三郎についても備中国の庄氏一族と思われる。室町幕府に仕えていたもので、この一件については管領斯波義重(義将カ)の施行状(『伊丹中世史料』122号文書)も知られる。

庄氏と摂津国の関係については、草壁庄地頭の庄氏が摂津国内に所領を有していたことが嘉元３年(1305)の六渡羅下知状(熊谷家文書)に見え、庄敬願の遺領の中に摂津国久貞名御位田下司職とある。庄十郎三郎とこの久貞名との関係は不明であるが、摂津国守護が庄十郎三郎を使者に命じていることから、この庄氏が同国に所領を持っていたと考えられよう。

応永６年(1399)７月23日には、備中国守護細川満之が同国守護代である庄六郎左衛門尉と石川氏に命じて、梅津寺領備中国薗東庄の下地を庄主へ打渡させている。このように児玉党流の庄氏は備中国の守護代にまで成長していた。

15世紀以降の中国地方における庄氏の活動はまだまだ続き、備中国守護代として活躍した猿掛城主の庄伊豆守元資の活躍がよく知られている。しかしながら武蔵国とのつながりはまったく見られないため、これ以上は触れない。戦国時代になると宇喜多家の成長と共にそれに敵対した庄氏の没落が始まり、やがて歴史の舞台から消えていくこととなった。

⑶　庄氏のその後と一族の動向

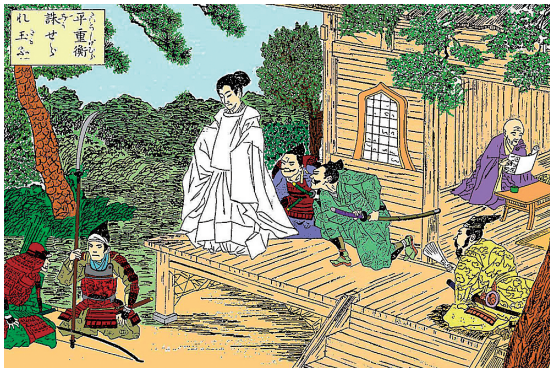
１．関東の庄氏

文安６年(1449)３月９日、幕府は京都嵯峨の鹿王院雑掌の訴えにより武蔵国豊島郡赤塚郷用水を違乱する庄加賀入道善寿の押妨を停止させている。これは鹿王院の雑掌が庄加賀入道善寿の違乱を訴え出たもので、細川勝元が上杉憲忠に命じて庄善寿の妨げを停止させたものである。庄加賀入道善寿は児玉党庄氏の系譜を引く者と思われ、萩原龍夫氏は「中世の赤塚郷と庄氏の活動」『板橋史談』100号で、『七党系図』に見える児玉党庄氏流阿佐美氏の一族、庄景実の弟善養ではないかと考えられている。

庄氏は恐らくはこの赤塚郷及び新座郡白子郷(和光市白子)付近に所領を得て(『武蔵国旦那書立写』『米良文書』に、しらこ庄賀伝助・庄中務丞が見える)おり、庄善寿にしても自領に引く用水の確保のため赤塚郷用水との確執が生まれたものかも知れない。庄氏は関東においても武蔵国を中心に活躍した一族がおり、戦国期には後北条氏や越後の上杉氏の家臣となった者がいた。

２．蛭河氏(得宗被官蛭河氏)と今井氏

蛭河氏は庄権頭弘高の弟庄四郎高家が本庄市児玉町蛭川の地を領して蛭河氏を名乗った。庄高家は源平合戦で活躍しており、『平家物語』では高家は一の谷の合戦で平重衡を生け捕ったとしている。しかしながら『七党系図』の注記には平経正を討ち取ったとしている。



平重衡の処刑(『源平盛衰記図画』)

蛭河氏については史料が極めて少なく、鎌倉時代以降の動静は断片的にしかわからない。庄高家が治承・寿永の合戦で活躍したことは既に述べたが、獲得した所領等不明な点が多い。庄高家は始め木曽義仲に従い、義仲滅亡後は源義経に従ったという。『吾妻鏡』によれば、元暦元年(1184)２月、摂津国に出陣した源氏勢の内、源範頼の配下に兄弟で兄の三郎忠家、弟の五郎弘方、甥の太郎家長の名前は見えるが高家の名前は見られない。ただし義経の配下にも見えないことから、実際は兄弟ともども範頼に従ったと考えるのが自然である。そうであれば平重衡を生け捕ったのは家長・忠家・高家のいずれでも可能だったこととなる。

高家は翌年の文治元年(1185)11月に、鎌倉において義経の家人藤原友実を討ち取っている。『吾妻

鏡』では高家は元義経の家人であったが、当時は従っていなかったとする。頼朝と義経の仲が決定的となり、一か月前に頼朝は京都に入る義経の暗殺を命じていたのである。文治５年７月に頼朝は奥州藤原氏討伐の軍を起こすが、その軍勢の中に高家の名前は見られない。兄忠家の名前があり、弟弘方の子の浅見実高や甥の四方田弘長の名前は載っている。庄四郎の名前が現れるのは建久元年(1190)の頼朝上洛の随兵にその名が見える。次に登場するのは承久３年(1221)に起きた承久の乱の交名である。庄四郎は敵一人を生け捕ったという。しかしながらこの段階で、この交名には蛭河刑部三郎と蛭河三郎太郎の名前があり、蛭河刑部丞が高家であれば、その子たちが登場しているので、世代が交代したと考えられ、ここで言う庄四郎は高家ではなくその子か、甥の庄太郎家長の兄弟か子供、或いは兄庄三郎忠家の子供であろう。ちなみに『七党系図』の高家の注記には「承久二年十月十七日出家」とあり、また「従五位下刑部丞」とあって、おそらくは高齢のため参戦していなかったのではないかと思われる。

暦仁元年(1238)２月に、将軍頼経が上洛し、その随兵の中に蛭河四郎左衛門尉がいる。建長２年(1250)３月の京都閑院殿造営のために武士達に賦課がなされ、この中に「蛭河刑部丞跡」とあり、高家は既に没していた。弘安８年(1285)に但馬国大田文が作成されるが、但馬国相博保の地頭に蛭河左衛門尉の名が見える。これは蛭河氏としては獲得した新所領の一つであるが、史料上確認できる唯一の例である。徳治２年(1307)５月には執権北条時頼が父の時宗の法要を鎌倉円覚寺で開催し、その結番交名が作成された。この中の六番に蛭河四郎左衛門尉がおり、北条氏の私的な法要に従事したこの者は北条氏の被官となっていたのである。

蛭川の駒形神社

鎌倉幕府滅亡後、建武２年(1335)８月、遠州の所々において合戦があり、北条時行に属した児玉党の蛭河彦太郎入道が足利方に捕らえられた(「実廉軍忠状」)。この彦太郎入道の実名は不明だが、『七党系図』の彦太郎入道某と思われる。

以上のように蛭河氏については承久の乱頃より蛭河姓を称していた。蛭河氏の祖庄四郎高家の直系は蛭河氏を称したが、分流は庄氏をそのまま名乗ったようで、高家の第４子四郎左衛門尉家国の子孫は庄氏を称している。『七党系図』の一本(『埼玉叢書』所収)には、家国の注記に「東国」とある。

３．四方田氏

四方田氏は庄氏中でも最も早期に分出した一族で、源平争乱時には児玉党の主力として活躍した。

『七党系図』では、庄権守弘高の次男次郎弘定、三男の三郎弘長、四男の四郎弘季、五男の五郎弘綱、七男の七郎高綱が四方田を称している。四方田氏の名字の地は本庄市四方田で、現在堀の内と呼ばれる周堀に囲まれた地が残っている。

四方田館跡

四方田氏の行動は必ずしも明らかではないが、治承寿永の内乱から合戦に参加したものと思われる。世代的には一世代前の庄三郎忠家・四郎高家・五郎弘方の名前が『吾妻鏡』に見え、それと並んで、四方田兄弟の兄にあたる庄太郎家長も名が見える。『吾妻鏡』の文治３年(1187)４月29日の記事に、伊勢国地頭御家人の対捍目録が載っており、同国多々利庄と丹生山公田が「四方田五郎弘綱知行」とあるので、この段階で伊勢国の所領を獲得していた。治承寿永の乱の勲功の賞として獲得したのであろう。また同年７月には源頼朝は奥州藤原泰衡攻めの軍を起こすが、その軍勢の中に四方田三郎弘長の名がある。伯父の庄三郎忠家の名があるが、五郎弘方に代わってその子で従兄にあたる浅見太郎実高の名もあって、徐々に世代交代が進んでいる。四方田弘長はその後、建久元年(1190)の上洛と同６年(1195)の東大寺供養の際にも他の一族のものと一緒に参加している。恐らくは三郎弘長が四方田氏の惣領的立場にあったのであろう。藤原定家の日記『明月記』の元久２年４月の除目で、有道弘光が賀茂祭の功により左近将監に任官しているが、この

弘光は弘長の事と思われる。その後、鎌倉時代になって比企能員の変、畠山重忠の乱、和田義盛の乱と内乱が続き、さらに承久の乱へと続いていくが、この間における四方田氏の動向はよくわからない。弘長については『曽我物語』の一本にもその名が見られ、それには弘長の末子閉房丸が伊豆箱根の走湯山に預けられていたが、筥王丸(後の曽我五郎時致)に殺された逸話が載っている。なお、年代は不詳ながら鎌倉時代中期頃に出羽国柏崎地頭の四方田三郎左衛門尉景綱父子が、同国平泉寺供僧より横領を訴えられている。またそれよりも先に四方田左衛門尉と摂津国守護野本四郎左衛門尉が争いを起こし、野本左衛門尉は科により摂津国守護職を召し上げられている。文永９年(1272)におきた二月騒動では、四方田滝口左衛門尉時綱が殺されたことは既に述べた。

南北朝時代、四方田氏の動向は不明だが、足利尊氏に従っていたようである。康安２年(1343)の『八坂神社記録』には丹党の安保肥前守直実と一緒に四方田禅門(四方田入道)が度々登場するが、足利直義に従っていたものと思われる。観応２年(1351)に起きた観応の擾乱で足利直義が失脚し、再起を図って北国に向かった直義の部下に四方田入道の名が見える(『観応二年日次記』)。

４．阿佐美氏

阿佐美氏はアサミと発音し、漢字では阿佐美・浅見・阿左美・朝見などと表記した記録も見られる。阿佐美氏の名字の地は武蔵国児玉郡阿佐美郷(現在の入浅見・下浅見地区)で、この阿佐美郷に関する史料は極めて乏しいが、戦国期初頭期頃と推定される文書(鈴木文書)に「阿佐美之村」・「両阿佐美村」、天正４年の北条氏邦朱印状(『武州文書』)に入浅見と見える。戦国時代末頃に阿佐美郷又は阿佐美村が一村から二村に分村した事を窺わせる。

下浅見地区の景観

阿佐美氏も庄氏の分派ながら、或いはその母体は在地の領主層であり、開発領主として入浅見の生野山の複数の尾根間の谷戸田開発を行い、そこを基盤として児玉庄の開発に関与したものと思われる。阿佐美氏からは薦田氏が分派するが、薦田郷(美里町小茂田)は阿佐美郷の南部(現在では小山川を隔てた南側)に位置し、古代末期頃は身馴川(現小山川)がもう少し南部を流れていた痕跡があり、この川の北部が阿佐美氏の支配領域だったと考えられる。

阿佐美氏の祖庄弘方は児玉庄太夫家弘の五男で、庄弘方は父家弘の所領を分割相続した。『七党系図』の弘方の子実高の注記に「武蔵国児玉庄、上野国高山庄その他の所領を領し、それを子ども達にそれぞれ譲った」とある。これが事実なら児玉庄は庄弘方に渡ったことになり、児玉党の主体が本庄氏ではなく阿佐美氏に移ったこととなる。しかし鎌倉時代以降、児玉庄が記録に見えなくなる。

庄氏より阿佐美氏が分派したのは鎌倉時代に入ってからと考えられる。阿佐美氏が史料や記録上に名を見せるのは鎌倉幕府の成立以後で、『吾妻鏡』に何度か登場する。次に史料や記録に見える阿佐美氏の動向について触れる。

滋賀県の浅見家に伝来した文書の写しと云われるものと、『浅見家累代記録』『新旭町誌』所収の資料がある。これには文治元年の「源頼朝所領宛行状写」を載せ、浅見太郎に江州朝日郷を宛行っている。『江北記』には佐々木秀綱の家臣に浅見氏がおり朝日殿と呼ばれたとあり、近江国内ではこの後、戦国時代初期に浅井亮政から感状を与えられた浅見対馬守が登場する。近江国内に所領を得て一族が西遷し、佐々木氏や浅井氏に従って活躍した一族がいたのである。

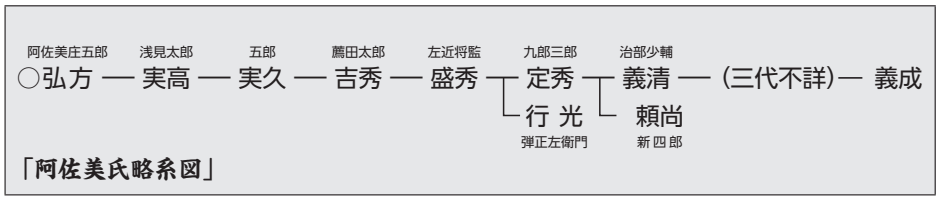
関東で活躍した阿佐美氏については、応安７年(1374)10月に武蔵国比企郡竹沢郷の紛争の使者となった阿佐美弥四郎左衛門入道がいた。この頃の関東にいた阿佐美氏は鎌倉府に仕えていた。応永28年(1421)には鑁阿寺の僧の訴状(「栄範目安案」鑁阿寺文書)に、「武州鳥形中務入道並阿佐美次郎右衛門跡」と見える。以後、阿佐美氏は戦国時代まで関東にあって活動し、上野国内や秩父郡内に子孫は散らばっていったようである。なお、前述した庄加賀入道善寿のように、本姓の庄姓に戻り活動した一族もいた。

阿佐美氏は『七党系図』の児玉系図を見ると、最も記載が豊富である。これは関東にあった阿佐美氏の後裔が『七党系図』作成に深く関与していた事を匂わせている。概ね他氏の記載の最後が南北朝期頃で途絶えているのに対して、阿佐美氏は戦国時代初期頃近くまで記載され、一族の人名も多い。

５．薦田氏

薦田氏は児玉党の庄氏一族の阿佐美氏から分派した一族という。本貫地は現在の美里町小茂田地区である。現在は入浅見地区とは小山川（身馴川）で隔たっているが、鎌倉時代頃には身馴川は薦田郷（小茂田郷）の南を流れていたと推定され、阿佐美郷と隣接していたと考えられる。おそらくは薦田郷が旧児玉郡の最南端で那賀郡と身馴川を境にしていたものと思われ、庄氏一族の領域であったのであろう。

薦田氏は阿佐美氏の分かれというが、残念ながら分派の状況ははっきりとしない。薦田錦一編『薦田氏出自物語』によれば、阿佐美実高の五男阿佐美五郎兵衛尉実久の嫡男太郎吉秀が薦田郷に住んで薦田氏を称したという。吉秀は承久元年に惣地頭として伊予国土居の地に西遷したが、吉秀の弟五郎光久はこの地に残り阿佐美姓を称したという。薦田氏の系譜を同書より引用すると次のようである。



「阿佐美氏略系図」

この系図は、その伝来がはっきりとせず、一つの系図と言うよりは『七党系図』に各種史料や記録に見える人名を組み合わせて作成した系図ではないかと考えられる。阿佐美実久までは『七党系図』の記載で、盛秀と定秀父子は建武２年（1335）６月の『東妙寺文書』に見える。行光はおそらくは『太平記』に登場する薦田弾正左衛門尉のことで、頼尚は『相国寺供養記』に見える薦田新四郎頼尚である。

実久と吉秀、定秀と義清、さらに行光や頼尚と当時武士社会で一般的に用いられた通字があまり見られないことからも、全体的にこの薦田氏の系図は疑わしいといえる。

いずれにせよ薦田氏は西国に所領を得て西遷し、四国の伊予及び九州の肥前あたりに所領を獲得し活躍した。なお、美里町の「小茂田勝輪寺文書」によると、本庄次郎左衛門尉朝次の子が薦田姓を称して、薦田二郎時次といったという。

６．本庄氏

本庄氏は庄太郎家長が武蔵国本庄に拠って本庄氏を称したとする系図もあるが、自ら本庄姓を称したという史料はない。家長だけでなく嫡男頼家にしても庄小太郎を称している。『七党系図』では次男家次以降が本庄氏を称しているので、それ以降称するようになったのであろう。おそらくは嫡男頼家の子孫が備中国草壁庄へ移住し、武蔵国本庄を領した本庄氏が地元に残ったとも言えるかもしれない。

本庄市栗崎から北堀地区空撮（昭和50年頃）

武蔵国本庄は、現在の本庄市栗崎近辺かと考えられる。ここは児玉郡の北東端で、榛沢郡と接している地域である。児玉党庄氏が九郷用水流域に多く分布するが、その流末地域に当たる。系譜上で見ると庄氏最後の分派ともいえる。おそらくは児玉庄の東端にあたるものと思われる。本庄氏の分派は鎌倉時代初期に行われた。

承久３年（1221）に起きた承久の乱には本庄姓を名乗る者はいない。記録上最初に見えるのは寛喜元年（1229）正月３日の埦飯の儀式に参加した本庄四郎左衛門尉（時家）が初見である（『吾妻鏡』）。

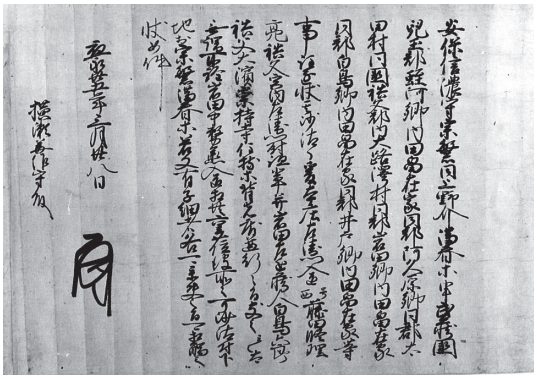
その後、暦仁元年（1238）２月の将軍頼経上洛にも本庄四郎左衛門尉と本庄新左衛門尉朝次（本庄時家の兄本庄次郎左衛門尉家次の子）が参加している。

仁治２年（1241）５月には、幕府の評定で小林小次郎時景が本庄四郎左衛門尉時家の狼藉を訴え、時家の所帯が収公された。これは時景の所従の藤平太妻が通行している時に時家が馬２匹を押し取る狼藉を働いたためという。

これ以後では建長２年（1250）３月、京都閑院殿造営の目録が作成されたが、これに載る分担の武士名に本庄四郎左衛門尉のほか本庄三郎左衛門入道が見られる程度である。しかしこの頃から『吾妻鏡』の記事に児玉党武士の名が段々と見られなくなっていき、弘長３年（1263）正月の椀飯の儀式に四方田新三郎左衛門尉が参加して以後は記載されなくなる。

本庄氏が『吾妻鏡』に登場した頃には庄姓の武士の名が見られず、児玉党は本庄・四方田・蛭河・阿佐美・塩谷・倉賀野・秩父・真下・富田・浅羽・小代・越生氏のみ記載が見られる。このことは庄氏惣領家が西国に西遷し、本庄氏が武蔵国に残ったからなのであろうか。

正和３年(1314)７月、本庄太郎国房は武蔵国本庄内の地をめぐって由利八郎頼尚と争論を起こしている。この結果、国房は曾祖父時家以来相伝してきた筑前国小中庄の地頭職を失った。これ以後、南北朝期を通じて本庄氏の活動は史料にみえず不明となる。


応永25年の安保文書

明徳元年(1390)年に藤原泰次が鎌倉円覚寺の伝宗庵主に児玉郡下児玉郷内の地を寄進した「藤原泰次寄進状」(『黒田氏所蔵文書』)がある。この藤原泰次は姓を欠いているためその系譜は不明であるが本庄氏の一族ではないかと思われる。藤原泰次が児玉郡下児玉郷を重代相伝の私領といっており、下児玉郷周辺には児玉党阿佐美氏の所領に近く、阿佐美氏の一族かとも思われるが、既にこの時期には共和地区に分布した庄・蛭河・阿佐美・四方田氏などはいずれもこの地域での活動状況が不明で、本貫地を継続支配できたか大いに疑問のあるところである。泰次も阿佐美氏よりはこの後に目立った活動を見せる本庄氏の一族と考えるほうが自然である。

６年後の応永３年(1396)に武蔵北部一帯各地で大般若経の一日頓写が行われた。これは日光輪王寺に伝えられた大般若経で、その奥書に武蔵国各地で一日頓写した状況が知り得る。これに「武州本庄郷藤原栄次」とあり、この栄次と泰次とは「次」の通字を用いていて同族ではないかと思われる。本庄氏は本庄郷にあって戦国時代中期頃まで活躍している。『七党系図』には庄太郎家長の子の本庄家次以降歴代の者が「次」の字を通字として使用しており、この一族かとも思われる。

室町時代に入って本庄氏が次第に庄一族の阿佐美氏や蛭河氏等の所領のあった共和地区に進出していったようである。安保氏が蛭河郷の所領を得ていたことと、この所領が西本庄左衛門尉らによって横領されていることが応永25年の『安保文書』に見えるが、これは本庄氏の勢力が共和地区に延びていたことを示している。この本庄氏は、「本庄左衛門尉号西」とか「西本庄左衛門尉」と史料上に見える。おそらくは本庄郷にあった児玉党流の本庄氏の一族と思われ、この一族は戦国期には本庄城主として山内上杉氏の重臣として活躍している(『本庄市史』通史編)。

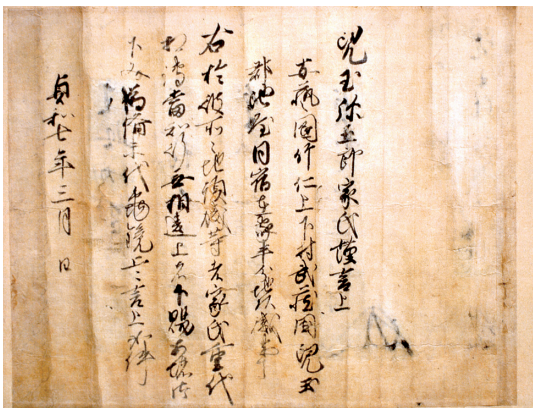
戦国時代になると共和地区や周辺地域で活動していた児玉党流の一族も、度重なる争乱のためこの地を離れて行くケースが多くなっていく。戦国期初期の段階では鎌倉公方家や関東管領上杉氏の勢力下にあり、上杉氏の家老長尾一族も児玉郡内に所領を拡大している。さらに鎌倉の寺院領となった場合も多く考えられる。この時期まで生き残った児玉党の系譜を引く一族は本庄・真下氏程度しか史料上に名を見せなくなるが、阿佐美氏は上野国に活動の拠点を移したようで、永禄４年(1561)に作られたといわれる「関東幕注文」(長尾景虎＝上杉謙信が関東に進出した際に上杉氏の幕下に入る武将を衆別に列挙したもの)には、児玉党系の武士は上州総社衆に小幡三河守・大類弥六郎、箕輪衆に倉賀野左衛門五郎、沼田衆に阿佐美小三郎、下野国足利衆に小幡次郎・小幡道佐・本庄左衛門三郎、武州の衆として忍城主の成田氏配下に本庄左衛門佐などがあり、大半の児玉党一族は上野・下野国に基盤を移していたといえる。本庄にあって活動していた本庄氏も成田氏の被官となっていた一族があった。

７．河内氏と金沢氏

『七党系図』には児玉庄太夫家弘の三男庄三郎忠家に「河内」の肩書が見える。この河内は市内児玉町河内のことと思われ、児玉郡から秩父郡へと続く途中に位置する。児玉郡内の小山川筋上流部から秩父郡の皆野町から秩父市へ続く谷筋には児玉党一族が多く分布する。河内・金澤・大淵・大浜・吉田・鳥方・秩父といった地域はまさに秩父郡から児玉郡への交通上の要所であり、秩父郡内の平姓秩父氏と婚姻関係のあった児玉党一族と重要な繋がりを持っていたのである。

第２節　児玉氏について

⑴　児玉氏出自の疑問



貞和７年の児玉家氏申状（児玉文書）

児玉氏は児玉党草創期の一族全体の称だったものと思われ、児玉郡名より起こった名称と思われるが一般には党の名称となった。児玉氏が児玉党草創期の一族の姓であり、やがて嫡流の流れは庄氏を称し、分流はそれぞれ所領の地名を名乗っていく。鎌倉時代中期以降に登場する児玉氏は児玉郷或いは児玉村という所領の地名を名乗った一族である。

ここで述べる児玉氏は鎌倉時代中期以降に登場する児玉氏である。歴史上にこの児玉氏が現れるのは承久の乱頃からである。『承久記』(慈光寺本)の「小玉党・小玉与一」や『吾妻鏡』にみえる「児玉刑部四郎」が最初と思われる。児玉氏は承久の乱の勲功により安芸国竹仁上下村(広島県東広島市福富町)を獲得する。貞和７年(1351)の「児玉家氏申状」『児玉文書』によれば、前記の竹仁村と武蔵国児玉郡池屋宿在家半分の地頭職を有していたことがわかる。池屋は『新編武蔵風土記稿』児玉郡金屋村(本庄市児玉町金屋)の条の小名に池谷がある(石井進「武蔵国古尾屋荘と児玉郡池屋のことなど」『埼玉県史だより』第18回)。現在、この地名は失われており金屋地内には池内という地名があるがこれが池屋と同じかどうかは不明である。

文永・弘安の二度の蒙古来襲を契機に児玉氏は西国の所領へ移住していくが、元応２年の「六波羅御教書」(『児玉文書』)に安芸国亀頸の警護を六波羅探題より命じられており、このなかで児玉氏が塩谷左衛門入道と共に警護を命じられている。

倉橋島の亀ヶ首（広島県）

児玉氏の出自については『七党系図』では塩谷氏より分出しており同じ児玉党の中でもかなり近い一族である。本貫地を考えても池屋のある金屋は塩谷氏の本貫地の塩谷郷の隣である。長茎郷を今の長沖と比定するとここも塩谷氏の所領と考えられる(長茎郷は『安保文書』に見える。また『米良文書』に塩谷の住人彦五郎入道行印が別名をなかくきといった事が見える)ことから児玉氏と塩谷氏は密接なつながりが有ることが考えられる。『七党系図』の頭書にも「長岫」とあり、長岫氏がいた可能性がある。記録等に児玉氏の名が遅く登場するのは塩谷氏の陰に隠れていたせいだろうか。しかし、『萩藩譜録』の児玉系図や他の関西に多く伝わる児玉系図では児玉氏と塩谷氏のつながりは全く見いだせない。そればかりか『七党系図』とはかなり異なっている。しかしながらどちらの系図も当然ながら多くの作為が加えてあるため信頼は出来ない。

⑵　児玉氏の系図の謎

児玉氏の系図は大きく分けて三種類に分けられると思う。

①　武蔵七党系図に見える塩谷氏流児玉氏
②　萩藩家臣児玉家の系図
③　その他各地に伝わる児玉家の系図

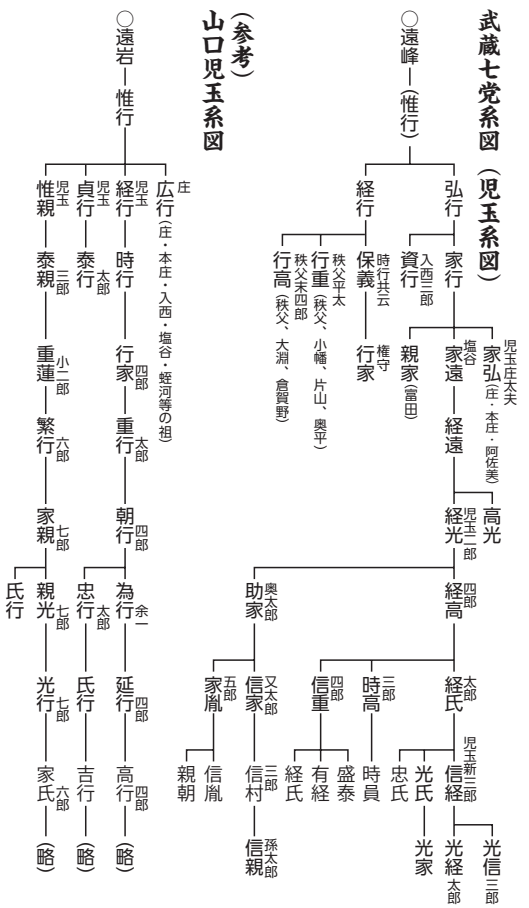
①の系図は既に簡単に触れたが、塩谷太郎経遠の次男の流れの経光を初代とする。塩谷嫡流家に近い系統であり、児玉郷(村)が塩谷郷に隣接している事、庄氏と異なり九郷用水系統に属さない事など、児玉・塩谷両氏の共通点は多い。児玉氏と塩谷氏ともに安芸国に所領があったことからやはり両者の関係は深いと考えるべきだろう。

②の系図は毛利家家臣児玉家の系図で、基本的なものが数種類あり、『系図纂要』の児玉系図と類似する。基本となるものは三つあり児玉三家の系図とする。初代を児玉弘行の弟に経行以外に、貞行と維親の二人を載せ、経行の嫡男保義(児玉系図では時行)の流れの３家より系譜を引いている。

③はそれほど種類は確認していないが、鹿児島県の児玉家や長野県の児玉家などの系図で、児玉党一族の子孫としない系図である。また小幡氏系図との関係、『系図纂要』の児玉系図の一本に、こんな注記がある。

氏行「〇一本作実赤松播磨守則景男改源氏称児玉又小幡之也」。

児玉氏行は『萩藩譜録』では児玉広高略系伝書に載る武士で、その注記は「母源氏教女」とあるのみである。しかしながら各種の『小幡系図』では赤松播磨守則景の関係を載せている。これは播磨国の豪族赤松則景が、源頼朝の旗揚げの時に同心し、その後も関東にとどまった。その後、則景は児玉朝行の婿となり嫡男範家と次男氏行をもうけた。児玉朝行の嫡男忠行に子がなかったので氏行が養子となりその跡を継いだとする。『小幡系図』の一本は最後に奥平系図を以て補正したとし、『奥平系図』もほぼ同じ内容の注記をもっている。この注記については白石元昭氏が『関東武士上野国小幡氏の研究』詳しく述べているが、赤松則景自身が播磨国の小武士であり、播磨守に任官していた事実は考えられず、まして関東にあって頼朝に属したことはない。当然児玉氏の婿入りなどあり得ない。これは奥平氏が近世に大名家となり、徳川家に従う上で源姓を名乗る事は好都合であった事、江戸幕府が『寛永諸家系図伝』を編さんする際に、奥平家は上州児玉党出身という伝承に源姓を名乗る根拠として赤松氏を利用したと考えられる。奥平家も児玉家の系図(『系図纂要』本)を参照したはずである。小幡家も同様に奥平家の製作した系譜を利用したものと考えられる。おそらくは江戸で行われたのであろう。



長州の児玉家にとっても同様で、『萩藩閥閲録』の編さんにあたって系譜を差し出すときに、小幡家の系譜を参照したと考えられる。児玉・小幡両氏とも安芸国に西遷し、共に毛利家家臣となった関係から、近世期に両家で系図作成の際に調整が行われた結果が反映されたものと思われる。江戸時代、幕臣・各藩の同姓の武士が互いの系譜について連絡を取り合った痕跡が残されている。

⑶　児玉氏の活躍

児玉氏は蒙古襲来を契機に安芸国の所領へと西遷した。安芸国内には東国御家人として毛利・熊谷氏も西遷し、児玉党系の一族でも塩谷・小幡氏なども一族が移住していったようである。児玉氏は西遷後、門司からの侵入が考慮され、瀬戸内海の海上警護を命ぜられたようで、倉橋島の亀ヶ首の警護を行った。それが契機となったかは不明であるが、児玉氏は瀬戸内海の水軍との関わりが深まっていった。児玉氏は下竹仁村の知行を基盤として、同所に阿良井城を築き活躍したが、一時期、九州大宰府にあった足利直冬の元に参陣している。その後は安芸国で勢力を高めた毛利氏の配下に入り、戦国時代以降は毛利氏の重臣として活躍している。

昭和60年代頃の竹仁

⑷　各地に広がる児玉氏

現在、児玉姓を称する子孫の方々は日本全国に広く分布し、東北地方では秋田県・宮城県・福島県、中部・東海地方では長野県・静岡県、近畿では和歌山県、中国四国地方では広島県・山口県・島根県・

愛媛県、九州では宮崎県・鹿児島県・長崎県等に多い。以上のいずれの県でも近世初期までさかのぼれる旧家が存在し、かつ同姓の家が多い集落があるのである。この中で児玉氏の移住の経緯がわかるのが、広島・山口・島根の三県と、宮城県周辺地域で、児玉氏の所領があった事がわかっている。これ以外の地域については残念ながら児玉氏の所領があった史料・記録は残されていない。その地の子孫の家に伝わる由緒等でも、先祖は武蔵国出身と伝えるのみで、詳細は不明である。わずかに宮崎県の場合、日向国内に所領を得た伊豆国出身の御家人伊東氏の被官に児玉氏があり、伊東氏に従って日向国に下向したものと推定される。

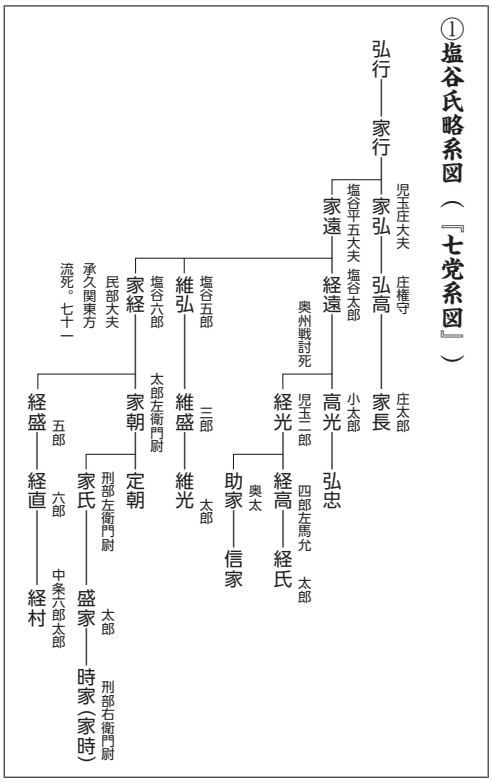
第３節　塩谷氏について

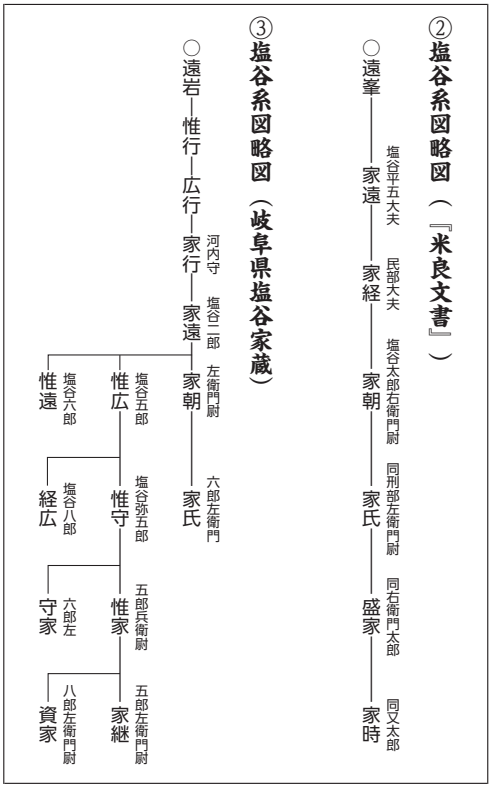
⑴　塩谷氏の出自と系図

児玉党の出自は既に述べたが塩谷氏の流れについて系図についてもう少し述べて見よう。現在三種の系図を入手したのでこれについて述べる。

①は既に述べてきた『七党系図』の塩谷系図で、②は『米良文書』中の塩谷系図、③は岐阜県塩谷家所蔵の塩谷系図、④は熊本県の荒尾家に伝わる荒尾系図（P39参照）である。

この内、①と②は極めてよく似ている系図である。②は有道家時が熊野参詣の際に系図を差し出したもので、中世成立の系図であり最初の数代はともかく、全体的には信頼し得るものと思われる。③は①と②が塩谷家経の流れを中心にしているのに対し、惟広の流れを中心とした系図で、惟広－惟守は『吾妻鏡』にもその名が見えるものである。特にこの父子は栃木県塩谷郡出身の宇都宮流塩谷氏にも同名の者がおり、『吾妻鏡』に登場するこの父子は、児玉党塩谷氏かどうか決め手がなかった。③の系図は岐阜県岐阜市在住の塩谷久雄家に所蔵されるもので、文政11年(1828)に本家の系図より写されたとの注記がある。当家は分家ではあるが家紋は児玉党諸家が多く用いている軍配団扇紋を使用しており、現在は「えんや」と発音されているが古くは「しおのや」と呼ばれていたと言う。④は熊本県荒尾氏の荒尾家に伝わる系図で、塩谷氏の系図である。荒尾家の伝承で塩谷家盈が小代氏の代官として移住してきたと伝えている。系図の詳細は不明であるが前半部分は『七党系図』と類似する。おそらくは小代系図と関係があるものと思われる。





１．系図にみえる塩谷氏の疑問点

四種の塩谷系図を概説してきたが当然多くの疑問点がある。まずいくつか見ていくことにする。『七党系図』の塩谷氏の家祖と言える家遠の注記に「塩谷平五太夫」、米良文書の『塩谷系図』には「塩谷平五大夫　平家以往死去」とあるその中で「平五」とは何を意味するものであろうか。一般的に考えれば平氏の五男と言う意味に採れなくもないが、これだけでは説明がつかない。系図上有道姓塩谷氏と平氏との繋がりを示す記事や他の史料もないためその関係は不明である塩谷氏の本貫地である児玉町塩谷の字名に「平氏の宮」という地名が残るが、何等かの関係を示す名のこりであろうか。

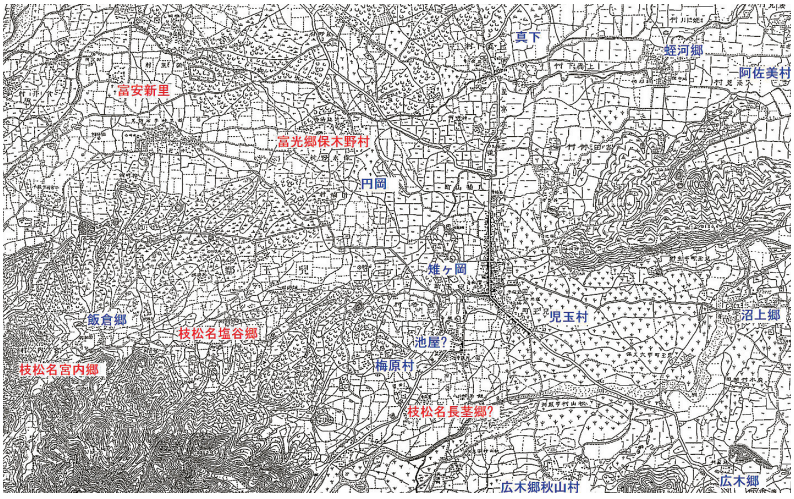
さらに「以往」とは、あるときより以後を示す用語であるから平家が政権取った後死去ともとれる。この辺は解釈が難しいが平氏との繋がりを臭わせている。

2．塩谷氏と児玉氏の関係

児玉文書

安芸国に西遷した児玉氏はよく知られているが、この児玉氏の系譜は児玉経行及びその弟の貞行・惟親より引き、塩谷氏との関係は全く見いだせない。しかしながら安芸国能美島の地頭に塩谷孫太郎入道がいたことが知られるし、児玉文書の中に塩谷左衛門入道の名があり、近世期には萩藩の家臣に塩谷氏がいたことも『萩藩閥閲録』で知られる。塩谷氏と児玉氏が同一の行動をとっていたことが考えられ、塩谷氏と児玉氏が同じ児玉党の一族以上の近い関係ではなかったかと考えられる。塩谷氏は鎌倉期以降の動静が知られないのに対し、児玉氏は鎌倉期にはほとんど名を見せず、南北朝以降『児玉文書』によってある程度動静を知ることができる。さらに戦国期には毛利氏に仕え、毛利家の重臣として活躍したため、戦国期以降の資料は極めて豊富である。児玉氏の系図も近世期の編さんで中世以前の状況は不明のため、塩谷氏との関係も希薄になり系図になんら関係を見いださないのであろう。塩谷氏とて安芸国に西遷した一族が塩谷惣領家かどうかも分からないため、両家の関係は深まらなかったのだろう。安芸国における塩谷氏の動静は全く知られない。

塩谷氏と児玉氏の関係を示す史料は乏しいが、『七党系図』が一つの根拠となる。『七党系図』はその成立を南北朝頃とされ、児玉党をはじめ丹・猪俣党など党の構成を見る上で貴重なものである。系図であるから当然多くの問題を含むが、現在残された文書や記録により対照すると七党系図と一致する箇所も多く見られる。当然世代がさかのぼる程疑問が増えるが、児玉氏の部分をみると面白い点がある。児玉・塩谷・庄・真下氏等系図上嫡流の流れが数代で途切れていることである。塩谷氏も祖家遠から三代後の弘忠で途切れているし、児玉氏も行家の後が途切れている。ほかにも類例は多くある。『七党系図』は関東で作成されたと思われることから、早くに西遷した一族はその名が記載されなかったと思われる。庄氏は備中国草壁庄を得て本補地頭として西遷したため庄小太郎頼家の後の記載が見えないことや、塩谷高光が奥州合戦の勲功で得た伊勢国の所領に西遷した可能性があり、高光の後弘忠で記載が切れている。問題点は多くあるものの考慮すべき点である。『七党系図』上では児玉氏は塩谷氏の嫡流塩谷経遠の第二子経光から児玉を称している。両氏の関係は所領の分布が極めて近くにあること(或は重複している)である。塩谷氏の塩谷郷と児玉氏の所領池屋(金屋地内か)は極めて近い位置にある。児玉氏は文書・記録上で初めて名を見せるのは『吾妻鏡』で、承久の乱の宇治川の交名で児玉刑部四郎が最初と思われる。塩谷氏は既に治承の頃から名を度々見せていることからも、児玉氏は塩谷氏より分かれた一族と思われるのである。しかしながら、七党系図中の児玉氏の系図にみえる名と、安芸国に西遷した児玉一族の名が一致しない点は大きな問題点である。『児玉文書』にみえる児玉氏の名は『七党系図』では確認出来ない。早くに西遷したため名が漏れたのか、それとも安芸国の児玉系図の通り塩谷氏とは直接関係しないのか研究すべき点が多い。



中世の名・郷・村（明治18年「陸軍測地部迅速図」）

⑵ 塩谷氏と塩谷郷

１．枝松名ついて

塩谷氏の本貫地と推定される塩谷郷が初めて史料に現れるのは、暦応３年(1340)の安保光泰譲状(『安保文書』)である。譲状は正月と12月の２点あり、安保光泰が子息泰規・直実・光経にそれぞれ所領を譲渡したものであるが、その中に児玉郡枝松名内塩谷郷・児玉郡枝松名内宮内郷・児玉郡枝松名内長茎郷・児玉郡太田郷の記載がある。塩谷郷は本庄市児玉町塩谷、宮内郷は本庄市児玉町宮内、長茎郷は不明(本庄市児玉町長沖か)、太田郷は本庄市児玉町太駄に比定出来る。いずれも旧児玉郡南西部に位置しそれぞれ隣接している。この中で塩谷・宮内・長茎郷はいずれも枝松名に含まれる郷であるが、枝松名については文永11年(1274)の『金沢文庫文書』に史料が１点あり、枝松・同久恒名と見える。既に枝松名について峰岸純夫氏が論考されているが、それによれば、児玉郡内に枝松・枝松久恒・富光・富安・近吉の５つの名があり、文永11年正月に即位した後宇多天皇が11月の大嘗会を行うにあたって、国衙に人馬・米・衣等の徴発を行ったものとしている。また金鑽神社周辺を流れる水系(赤根川・身馴川)とこれらの名の位置関係を考えられ、金鑽神社の所領ではないかと推定され、枝松名も金鑽神社の神官の名に由来するとされる。近世の史料ではあるが児玉・榛沢郡の伝承を記した『武乾記』(『埼玉叢書』第１巻所収)に金鑽村の項に金鑽神社の神領は金鑽・塩の谷・飯倉の三ケ村としている。この内飯倉は、永徳３年(1383)『止観伊賀抄第二下奥書』(叡山文庫)に“武州児玉郡飯倉郷”と見え郷名を称している。『神鳳抄』・『吾妻鏡』に伊勢神宮領として飯倉厨の記載が見られ、この飯倉厨が児玉郡か豊島郡か不明である点も興味がもたれる。 近世期には飯倉村を称し、宮内村と塩谷村の中間に位置しており、中世の安保氏の譲状にこの飯倉郷が含まれていないのも不思議である。

『金沢文庫文書』に見える枝松久恒名と近吉は位置が不明であるが、あとはすべて旧児玉郡内に分布している。児玉郡でも南部から南西部にかけて分布し、北東部の分布は見られない。これは『玉葉』安元元年の条に見える“児玉庄”との兼合いだろうか。児玉庄の実態や庄域は不明であるが、児玉郡北東部の中世期の地名は、蛭川郷・真下・下児玉郷・沼上郷・今井・阿佐美村・四方田村・本庄・栗崎等が資料に見られ、概ね九郷用水流域の地域が児玉庄域と考えられる(この地域は児玉条里の分布する地域で古代においては公田と考えられるが古代末期から中世初期にかけて児玉庄の庄域に含まれたいたかも知れない)。この地域が前記の枝松名等の分布と一致せず(近吉の位置が不明ではあるが)、あきらかに古代から中世初期にかけて児玉郡内において名・庄の領域に区別がなされていたことが想定されよう。

２．塩谷郷と塩谷氏

真鏡寺遠景

塩谷郷の領主を児玉党の塩谷氏と考えることに無理はないが、それを具体的に示す史料が極めて少ない。先に見た暦応３年(1340)の段階で『安保文書』に見えるように、このころの塩谷郷は安保氏の知行となっており塩谷氏とのつながりは見いだせない。 享徳27年(1478)の『安保文書』に“塩谷郷塩谷源四郎跡”とあり、これが塩谷氏の所領だったことがわかる具体的な限られた史料である。また延文４年(1359)の『米良文書』に“しをのやの住人ひこ五郎入道行印、又ハなかくきとも申候”とあり、越生町の『法恩寺年譜』に“武蔵国塩谷九郎四郎跡”とある。前者は塩谷の住人としていて塩谷姓とはいっていないが、他の史料(塩谷系図がある)により彦五郎入道行印は塩谷氏の者と考えられよう。又“なかくき”は長茎で長沖の事と考えると、ここも塩谷氏の所領と考えられる。後者は武蔵国の所領とあるだけで塩谷郷を直接示していない。ただこの史料が応永期のものと思われるので、先の享徳期の史料とともに塩谷氏が中世後期まで塩谷郷を支配していたことが考えられよう。暦応の史料では安保光泰が支配していたことを窺わせるが、これは名目上のことで実際は塩谷氏が支配していたのだろう。安保光泰は所領を子息３人に譲っているが、この塩谷郷は次男の直実に譲っている。直実は父の光泰より“不幸の子”とされ所領の分配も高師直の関係で譲ったものである。ここで疑ってみれば光泰は実際に

支配している所領を嫡子の泰規と三男の光経に譲ったが、新恩で得た所領の内旧領主によって押領されていて実際には支配していない土地を直実に譲ったのではないだろうか。この譲状の作成された年より19年もたっているのに塩谷彦五郎入道行印は塩谷に住んでいるのである。それよりさらに119年もあとの享徳27年まで塩谷郷の元の支配者の名(塩谷源四郎)が史料に記録されていることからも、塩谷氏の塩谷郷支配は後年まで続いたと思われる。余談ではあるが宮内郷も安保氏の所領となっているが、『安保文書』中建武４年の高師重奉書に宮内郷は“中院宰相中将家跡”となっている。

塩谷に隣接する田端の田中供養地の板碑

塩谷郷の領域は現在の塩谷地区より範囲はやや広がるかもしれない。隣郷の金屋が中世後期にならないと史料上に現れないため当時の塩谷と金屋の関係がつかめない。あるいは中世初期頃までは塩谷と金屋は同一の郷だったかも知れない。塩谷氏と児玉氏の関係は既に述べたが、児玉氏の所領が金屋の内にあったことは、“池屋”が『新編武蔵風土記稿』金屋村の項にある“池谷”に比定出来そうなので、金屋地内にあったといえる。児玉氏を塩谷氏の分流と考えれば、この金屋も塩谷氏の所領であったわけで、さらに児玉氏の名字の地児玉村を加えれば、塩谷・金屋・長茎(沖)・児玉とかなりの広範囲の所領を有していたことになる。近世期には児玉村と隣村の沼上村は互いに入会の関係が見られ、身馴川添いの地の新田開発等でも深いつながりを持っていた。これらのことは根拠は薄いが中世後期には沼上郷と史料に見えるこの地が児玉村との拘わりからも塩谷氏と何等かの関係のある地といえなくもない。又行田市長久寺所蔵の大般若経奥書に見える“児玉郡塩谷郷阿奈志村”の記載も意味のあるものと思える。中世後期にはもう児玉郡内での塩谷氏の活躍はあまり見られなくなり、阿奈志村周辺には猪俣党流の桜沢氏がこの地を支配していたが“塩谷郷阿奈志村”の記載は中世中期頃までの名残りであろうか。

⑶　塩谷氏の活躍とその後

１．鎌倉期における児玉党塩谷氏の活躍

塩谷氏は祖家遠(いえとお)の通称が平五大夫と言うことから、古くから児玉郡塩谷郷にあって開発領主であったことを窺わせ、平氏との婚姻関係があったことが考えられる。坂東八平氏の一つ秩父氏との関係があったのかも知れない。児玉党の中でも児玉弘行の弟の児玉経行は秩父氏と婚姻関係にあり、子孫は有道姓ではなく平姓を称し、平児玉とも呼ばれているものがある。

塩谷氏は古代も末期に既に存在していたと考えられるが、史料上にその名を見せるのは源平合戦の時で、『吾妻鏡』元暦元年(1184)２月の条に塩谷五郎惟広が最初に登場し、同じ児玉党の庄忠家・広方兄弟や庄家長らと一緒に記載されている。この塩谷五郎惟広と後に名を見せる塩谷三郎惟守については、既に述べてきた通り下野国塩谷郡出身の源姓塩谷氏との問題が残されているが(『七党系図』では維弘－維盛と記載されている)、『吾妻鏡』の記載が同じ児玉党の一族と一緒に記載されていることから、ここでは児玉党の塩谷氏としておく。塩谷惟広は源頼朝に従い源範頼の軍に属し一谷合戦に参加したものと思われる。『平家物語』等の軍記物には一谷合戦において児玉党が団扇(軍配団扇)旗を指して活躍した様が記されており、庄高家らの名が見られるが塩谷氏は登場しない。児玉党として取り扱われたものと思われる。しかし『吾妻鏡』には塩谷五郎(惟広)が鎮西(ちんぜい)(九州)より帰参(きさん)した旨の記事が見られ、壇の浦の合戦等にも従軍したものと思われる。この後の文治５年(1189)の奥州の藤原泰衡追討の軍勢の中に塩屋(塩谷)太郎家光の名が見える。この塩谷家光は『七党系図』には見えないが、熊本県の『肥後古記集覧』に収録されている「鎌倉将軍家御教書案』には、塩谷太郎高光がこの奥州征伐に参加し討死にしたという。『七党系図』には塩谷小太郎高光とあり、家光とは同一人かと思われる。また高光は一谷合戦でも先懸の働きをしたという。それらの勲功により伊勢国に所領を獲得したらしく、この史料は将軍頼朝より伊勢国の所領における加藤光員の押領を停止させたものである。塩谷高光の所領は高光の討死に以後、子息に伝えられたが、その後の系譜は不明で、『七党系図』でも高光の子弘忠で切れている。恐らくは弘忠以降も続いたものと思われるが、伊勢国の所領に西遷したものと思われる。

建久元年(1190)の源頼朝上洛の際には、随兵の中に14番目に塩谷六郎(家経か)が、36番目に塩屋(塩谷)三郎(惟守)がいた。後陣の随兵の33番目に塩谷太郎(家光？) がいた (『吾妻鏡』)。

建保元年(1213) 5 月には、鎌倉を騒然とさせた和田義盛の乱が起きたが、これに塩谷三郎惟守とその子太郎が和田方に与し討死にしている。鎌倉初期に比企氏の乱・畠山重忠謀殺事件・それにこの和田義盛の乱と事件が続いて起き、北条氏によって幕府の有力御家人が滅ぼされているが、児玉党もこれらの事件に何等かの形で関与したものと思われる。比企氏の乱には比企氏の婿に児玉党がいたことが『愚管抄』に見え、畠山重忠が相模国二俣河で滅ぼされた時に児玉党は幕府軍に参加していたことが『吾妻鏡』に見える。しかしいずれも党として記録されているだけで、具体的に塩谷氏の行動はわからない。侍所別当の要職にあった和田義盛が乱を起こした時には、同じ武蔵七党の横山党が加担しており、児玉党も塩谷父子の外に稲島五郎友行・同三郎友重父子が和田方として討死にしている(『七党系図』)。また富田三郎親家も和田方として参加し生け捕られている。塩谷氏や稲島氏がどうして和田方として参加したのか理由はわからないが、『吾妻鏡』では親戚・朋友といった関係を記している。この乱で塩谷惟守と太郎父子(『七党系図』では三郎維盛とその子太郎維光が和田方に与し討死にしたと記している)が凶徒・賊軍として討死にしたため、その所領も没収されたものと思われる。前述したように後のことではあるが、安保光泰の所領となった児玉郡塩谷郷の田畠在家(『安保文書』)もこのような経緯があるのかも知れない。しかしこの乱に塩谷一族をあげて和田方に参加したものとは思われない。それは後の承久の乱に塩谷家経の一族が幕府軍に参加して活躍しているからである。また先に述べた塩谷高光の一族も別にいたはずである。

和田氏の乱によって塩谷氏は一部打撃を受けたと思われるが、塩谷氏は承久３年(1221)に起きた承久の乱では大いに活躍し汚名の挽回をはかっている。その活躍については『承久記』や『承久軍物語』等に詳しいが、特に『承久記』に塩谷民部丞家経と丹党安保刑部丞実光との会話が記されており、“同国の者として、所領の境も並べて、朝夕申し通ずる中にて・・・”とあって塩谷郷(児玉町塩谷)と安保郷(神川町元安保)は極めて近い位置にあって両者が一緒に討死にした様子が記されている。『吾妻鏡』にもこの乱に塩谷氏一族が多く参加したことが記載されている。それは宇治川合戦の勲功の賞を行うため、その交名が作成されたが、その中に宇治橋合戦での渡河で流死した塩谷家経の外に、負傷した者として塩谷左衛門尉家友・同太郎・同六郎(家氏か)・同弥四郎・同奥太・同小三郎・同五郎(経盛か)を載せている。また『承久記』には家経と共に討死にした者に塩谷四郎・同権次郎太郎を載せている。承久の乱は鎌倉幕府存亡の危機であり幕府は全力をあげてこの乱に対処したが、塩谷氏も一族を挙げてこれに参加したものと思われる。

塩谷氏の館跡という真鏡寺

承久の乱の後の塩谷氏の行動については良くわからない。暦仁元年(1238) 2 月の将軍藤原頼経の上洛に塩谷民部六郎(家友か)と同六郎左衛門尉(家氏か)が参加している。建長２年(1250) 3 月に京都の閑院内裏の造営が行われ、その造営の雑掌の分担目録が作成されたが、塩谷氏もこれを分担し塩谷民部大夫(家経)跡として木材３本が割り当てられている。この後は『吾妻鏡』には下野国の宇都宮氏流塩谷氏(塩谷兵衛尉朝業(ともなり)一族)が周防守(すおうのかみ)として幕府の要職に登場するが、児玉党塩谷氏の記載は見られなくなる。

建治２年(1276) 6 月に紀伊国阿氏河庄(あてがわのしょう)の雑掌が湯浅宗親(ゆあさむねちか)(紀伊国湯浅党の一族と思われる)らの乱暴を訴えでている(『高野山文書』)が、その中に塩谷入道・塩谷新三郎入道の名がある。この塩谷入道については外に知り得る史料がないため詳細がわからないが、伊勢国に所領を得た塩谷高光の一族か、或は紀伊国内にも塩谷氏が所領を獲得しここに西遷していた者かいずれかであろう。紀伊国内で武力を行使していた塩谷氏がいた。

元応２年(1320) 8 月に六波羅探題が瀬戸内海における海賊等を取り締まるため安芸国(広島県)に上下竹仁村に所領を得て西遷した児玉一族に警護を命じている(『児玉文書』)が、その文面に児玉氏は塩谷左衛門入道と一緒に警護するよう記されている。この塩谷左衛門入道については実名も系譜も不明であるが、児玉党塩谷氏の武士と思われ、安芸国能美島(のうみじま)の地頭(『吉川家文書』)であった塩谷氏一族と思われる。幕府は蒙古襲来に際し、再度の来襲に備えて防衛のために西国に所領を持つ武士に対し、西国に

下向して防備にあたらせているが、幕府は弘安４年(1281)７月に安芸国に所領を持つ児玉氏に安芸国に行き防衛に当たるよう命じている(『児玉文書』)。恐らくは同様に安芸国能美島に所領を持つ塩谷氏にも同様の命令が幕府より塩谷氏に伝えられたと思われ、塩谷氏も児玉氏と一緒に安芸国に下向したのであろう。『武蔵七党系図』に見られるように塩谷氏と児玉氏は極めて近い関係にあったものと思われる。また同じ年の12月に六波羅探題の大仏(北条)維貞は塩谷又二郎入道定仏を奉行に命じ、美濃国の地頭・御家人に対し天皇の即位に必要な費用の差し出すよう指示している(『東南院文書』)。このことは塩谷氏が六波羅探題に仕えていたことを示し、塩谷氏で関西を中心に活動していた一族がいたことがわかる。或は美濃国周辺にも所領があったのかも知れない。伊勢・安芸・紀伊国で塩谷氏が活動していたことが知られるが、それとともにこの時期における塩谷氏の活動状況を知りえるものである。なお塩谷氏は九州の肥後国でも活動した痕跡がある。

２．南北朝の動乱とその後の塩谷氏

元弘３年(1333)５月に足利尊氏が鎌倉幕府に反旗を翻し六波羅探題を攻めた際に、探題北条仲時主従は敗北し鎌倉目指して落ちのびようとして近江国番場宿米山付近の合戦で自害しているが、その中に塩屋右馬允演恒(31歳)と塩谷弥三郎家弘(42歳)がいた(『六波羅連華寺過古帳』)。この塩谷氏は六波羅探題に勤仕していた者で鎌倉幕府の滅亡とともに北条氏に殉じた。しかし幕府攻めでは新田義貞に従い鎌倉を攻めた者に児玉党が参加しているが、恐らくは関東にいた塩谷一族は新田氏に従い鎌倉攻めに参加したものと思われる。この時期には関東に居住していた一族と関西地方や外の地域へ移住していた一族があり、それぞれ独自の行動をとっていたものと思われる。鎌倉幕府が滅亡し建武の新政府が誕生するが、足利尊氏の独立によって南北朝の動乱期を迎える。塩谷氏の中で足利尊氏に従っていた者がおり、文和３年(1315)正月の室町幕府の的始めの儀式に射手をつとめた者に塩屋勘解由左衛門尉がいた。関東でも永徳３年(1383)の南北朝末期には武州北白旗一揆の塩谷九郎入道行蓮が、鎌倉府の命で小山氏討伐に参加していたことが知られている(『中村直勝博士収集文書』)。この頃まで塩谷氏は本領の塩谷郷にあって関東で鎌倉府に属し活躍していたものと思われるが、この後塩谷氏の活動は全く不明となる。年欠の史料(『報恩寺年譜』二)ではあるが恐らく応永期前半(1400年前後)頃と思われるものに、“武蔵国塩谷九郎四郎跡”とあり場所は不明であるが塩谷氏は武蔵国内の所領を失っており、また享徳27年(1478)の『安保文書』には“安保氏泰申、武州児玉郡塩谷郷塩谷源四郎跡”とありここでも塩谷源四郎は塩谷郷を失い安保氏の知行となっていた。中世後期には塩谷氏に関する史料が見られなくなり、塩谷氏の行動もまた不明となっている。南北朝以降の動乱に生き残れず多くが滅亡し、或は帰農していったものと思われる。近世期に長州毛利氏の家臣に塩谷氏があったことが『萩藩譜録』に見えるが、これは安芸国能美島の地頭であった塩谷一族の子孫ではないかと思われ、児玉氏とともに毛利氏の被官となり、関ヶ原の合戦後主家の長門国への移動に従い安芸国より長門国へ移ったのであろう。また岐阜県岐阜市にも児玉党塩谷氏の子孫と伝える旧家があり、この外各地に塩谷家が存在するが系譜的には不明の場合が多く、児玉町高柳にも塩谷家が数件あるがその系譜もまた不明である。

３．塩谷氏と熊野信仰

紀州熊野三山を中心とする信仰で、11世紀後半より盛んとなった。歴代法皇・上皇の保護を受け、特に白河上皇や後白河上皇より土地の寄進や別当職の位階の向上、皇族・貴族の行幸にともなって、熊野の三山を中心に急激に熊野信仰が隆盛を極めるようになった。それに伴い鎌倉時代の武士層にも広く信仰が浸透したようで、児玉党武士達も広く信仰した。塩谷氏一族も同様で、正応２年(1289)と嘉元元年(1303)に有道家時(塩谷又太郎)が熊野大社に納めた系図が２本残されている(米良文書)。これによれば承久の乱で宇治川で流死した塩谷民部丞家経の子家朝以後、歴代の当主が熊野を訪れている。

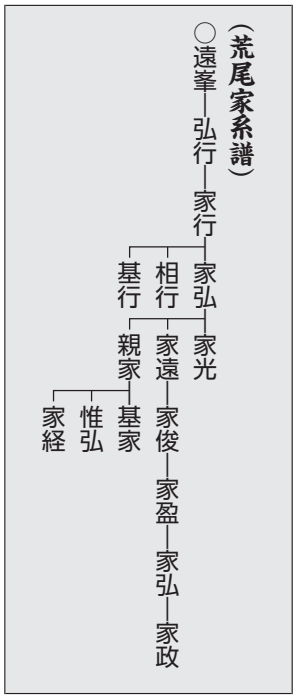
○塩谷太郎右衛門尉家朝　参詣二度、寛弘年中、寛喜年中死去

○塩谷刑部左衛門尉家氏　参詣二度(参詣三度)、文永元年死去

○塩谷右衛門太郎盛家　参詣二度、弘安三年死去

○塩谷又太郎家時　参詣三度、文永五年初度・弘安八年二度・正応二年三度

４．塩谷氏の伝説　―肥後国に下向した塩谷左近将監家盈―



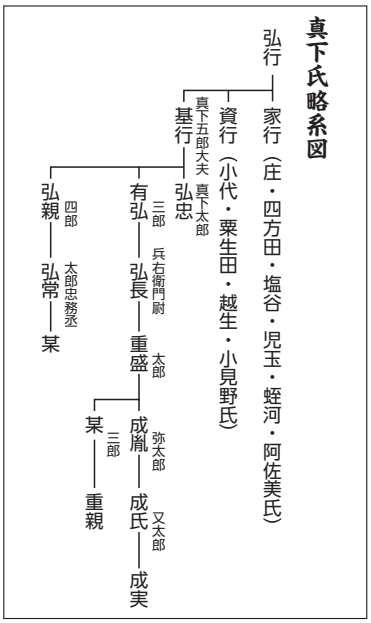
宝治合戦の勲功で小代重俊が肥後国野原荘地頭職を拝領し、子息達が下向し移住したことはよく知られている。野原庄は現在の熊本県荒尾市に存在した荘園で、小代氏はここを根拠に九州で活躍する。

その荒尾の旧家に塩谷氏の系譜を引くという旧家の荒尾家がある。國武慶旭氏著『よみがえれ小代武士団』（平成８年刊）によれば、荒尾家の由緒書が存在し、それによれば右のような系譜が記されている。

この系図では家盈（いえみつ）を塩谷左近将監、或いは荒尾山城守と称し、荒尾家の初代としている。國武氏は塩谷家盈を小代氏の代官として小代一族下向前にこの地に派遣されたものと推定されている。

この系図は『七党系図』の児玉系図とよく似ているが、おそらくは肥後の地に伝えられた『小代系図』（小代文書）が基になっているのであろう。関西方面に伝えられた『児玉系図』は遠峰を遠岩と記したものが圧倒的に多く、『七党系図』の『児玉系図』と類似するのは興味深い。

なお、塩谷家盈が小代重俊の代官として派遣されたとすると、前記した系図では年代的にあわないと思われる。家盈は家俊の子であり、承久の乱の宇治川で流死した家経の甥に当たる。家経は承久３年に72才か74才で流死した（承久記・塩谷系図等）。小代氏が肥後国野原荘を獲得したのが宝治元年（宝治合戦の勲功）である。承久３年から26年経っている。塩谷家経が生きていれば98から100才になる。家盈の父の家俊も家経と同世代（家経より年上）考えれば家盈もこの頃には80歳前後にはになっていると思われる。家経の子で従兄の家朝も塩谷系図には寛喜年中の死去とあり、寛喜は1230年前後だから、家経と従兄弟関係の家俊はより高齢と思われその子家盈も家朝と同様にこの頃没していた可能性が高く、小代氏が野原荘獲得後、その代官として下向したとすれば宝治元年（1247）は17年後だから家盈はむりであろう。仮に生存したとしてもかなりの高齢で小代重俊も高齢で下向しなかったと思われるから、家盈代官説は無理があろう。家盈の子か、或いは家俊と家盈の間に一代抜けているのかも知れない。



いずれにしても塩谷家盈が小代氏の代官として派遣されたとする根拠は不明だが、江戸時代に編さんされた『肥後古記収覧』の中に塩谷氏の古文書が収録されている。源頼朝が伊勢国の塩谷氏の所領が加藤光員に押領されている件を停止させたもので、塩谷高光の勲功を誉めた内容のものである。この史料がなぜ肥後国に伝えられたのか疑問であったが、肥後国に塩谷氏が西遷していたとすれば写しを伝えた可能性があるだろう。『七党系図』では塩谷氏の嫡流塩谷太郎高光の弟次郎経光が児玉姓を称している。児玉氏と塩谷氏が系譜的に極めて近い関係であれば、長崎県周辺と宮崎・鹿児島県にも児玉氏の分布（西遷）が見られるので、小代氏との関係だけでなくても、塩谷氏も九州への西遷の可能性が考えられる。

第４節　真下氏・富田氏について

⑴　児玉党真下氏と富田氏の分派

児玉町の共和地区から本庄市にかけては児玉党庄氏一族が広く分布していたが、同じ児玉党の一族でも真下氏と富田氏が九郷用水流域に分派していることは重要である。

真下氏及び富田氏と庄氏は系譜上同じ児玉党の一族であるが、『七党系図』上でも早期に分かれておりかなり離れた位置付けとなっている。真下・富田氏と庄氏は所領が隣接して所在し、用水系も同じものを利用している。地縁関係を考えると協力関係がそこに存在したものと思われるが、これを示す史料はない。近世にあって九郷用水は22か村の用水組合で管理されるが、その中心的役割を果たした村が上

真下村と蛭川村であり、用水割元村として明治期まで継続して勤めた。直接中世における児玉党との関係は指摘できないが、地理的に見た場合に九郷用水における真下と蛭川の重要性が近世になっても維持されたものであろう。

真下氏は祖を真下五郎大夫基行(もとゆき)といい、この基行が児玉郡真下郷一帯(上真下・下真下付近)を開発したと考えられる。真下基行は『七党系図』によれば児玉弘行の五男にあたる。

真下氏は前述したとおり児玉条里地帯の重要地域にあたる九郷用水の上流域に住み、この地域に分布する児玉党の中でも真下氏は重要な構成員であったと思われる。

富田氏は真下氏より一世代下の分派で、家祖は富田三郎親家である。系譜上で親家は弘行の孫にあたり、弘行の嫡子家行の三男にあたる。兄に塩谷氏の祖である家遠がいる。

⑵ 石橋山合戦と真下四郎重直

真下氏の動静を伝える史料は乏しく、わずかに源頼朝が石橋山で平家方と戦った際に真下四郎重直(しげなお)が平家方にあり、後に平家方として北陸道での木曽義仲との戦いで長井斎藤別当実盛らと共に討死にしたことが『平家物語』に見えるが、これが真下氏が記録等に現れる初見である。治承４年(1180)に源頼朝が伊豆で平家討伐の兵をあげ、続いて石橋山の合戦で平家方の軍勢と戦った時に、平家方の武士の一人に真下四郎重直がいた。源頼朝は石橋山合戦で敗北して、海路安房国(千葉県)に逃れて再挙を図ったが、その後、急速に坂東武者は源頼朝に従うようになり、武蔵国の武士の多くも頼朝に従うことになった。しかし中には平家方に恩を感じて頼朝に従わなかった者もおり、長井の斎藤別当実盛を初めとして真下重直もその一人で、頼朝が関東を平定したため真下重直らは京都に戻っている。

重直はこの後、平家方の武士として北陸に従軍し、木曽義仲の手勢と激しく戦い、斎藤実盛らと共に討死している。この時の斎藤実盛の故郷へ錦を飾る逸話(敵に老身と侮られない様に白髪を黒く染めた話など)は特に有名である。

⑶ 足利氏に仕えた真下氏

真下重直は最後まで平家に従い討死にしたが、真下氏一族全てが平家方であった訳ではない。真下重直が平家方として討死にしても真下氏自体は御家人として『吾妻鏡』や外の史料に散見されるので、鎌倉期を通じて御家人として存続していた。鎌倉幕府に奉公した児玉党武士の中に真下太郎や真下右衛門三郎の名が見られる。さらに大名の足利氏に仕えた一族もいた。真下氏の中で鎌倉期に足利氏の被官となった者が現われ、後に足利尊氏に従って室町幕府の奉行人となった一族がいた。足利庄にある鑁阿寺(ばんなじ)の棟札(むなふだ)に、「中務丞有道広経私云真下」と書かれている。これは天福２年(1234)に足利義氏が鑁阿寺大御堂建立に際して作られた棟札で、真下広経は雑掌として勤仕(きんじ)したものと考えられる。これは既にこの段階で真下氏が足利氏の被官となっていたことを示している。真下氏の中で足利氏に被官化した一族が、どういう理由で足利氏に庇護(ひご)されたのかは不明で、一つの理由には平家方にあって没落した真下重直の一族か、あるいは鎌倉初期の内乱で没落した一族か不明である。いずれにせよ初期の段階で没落した一族が足利氏に被官化したものと思われる。勿論鎌倉期を通じて全ての真下一族が足利氏の被官となったわけではない。足利氏の被官となった一族は、足利氏の発展と共に関西にあって活躍し、摂津・尾張・安房・加賀国などに所領を獲得していたことが各種史料に見える。それには南北朝時代から室町時代にかけて「真下中務丞広仲・真下左衛門太郎・真下勘解由左衛門尉・真下新左衛門尉詮広・真下弥太郎広仲・真下太郎左衛門尉重広」といった「広」の通字を用いた武士が見える。いずれも真下広経の子孫と思われ、この真下氏は関西を中心に室町幕府の一員として活躍している。

真下氏は『七党系図』では主に重・成(しげと読む)の通字を多く使用しており、関東で活躍した一族に真下重氏などが見えるので、足利氏の被官となった一族は真下氏の庶子家であったものと思われる。真下氏もかなり早期の段階で惣領・庶子家が別個の行動をとっていたのだろう。

なお、鑁阿寺のこの棟札史料は真下氏が有道姓を称しており、他の児玉党一族と同様に児玉党が有道姓を称していたことと符合する。後にこの真下一族は源姓を自称していくが、その経緯は不明で、源姓足利氏との関係からだろうか。

中世後期、関東においても上野国にあって活躍した真下一族があり、真下重氏などは足利尊氏に仕え

て所領を充てがわれているがその動静は不明である。戦国末期頃には児玉郡真下郷にあって、用水にかかわった真下左京亮や下真下新六郎の名前が史料(今井鈴木家文書)に見られ、群馬県鬼石町には真下氏の子孫と伝える旧家があり系図や伝書を伝えている。

⑷ 富田氏について

真下氏と同様に早期に分派したとする富田氏については史料が乏しくその動静はつかみにくい。富田氏は児玉家弘の末弟、富田五郎親家が家祖である。富田氏の名字の地は、今井・四方田の西側、九郷用水の下流域近くに位置している。現在の本庄市東富田・西富田である。富田氏は真下氏と同様に周辺地域が全て庄一族に囲まれており、かなり異質な位置にある。これは富田氏の祖が庄氏の祖とは別の古代有力農民層であったのではないだろうか。

富田三郎親家は鎌倉時代前期に活躍した武士と思われ、和田氏の乱に際し、和田義盛に与し捕らえられ、後に源実朝よりその強力を賞され赦免されたことが『吾妻鏡』に見える。赦免後、富田氏は御家人として存続したものと思われる。

また親家の子富田六郎兵衛尉長家が『武蔵七党系図』に見える。長家は承久の乱で京方として参加したようである。

承久の乱に際して児玉党武士は鎌倉方として参加し、多くの犠牲を払う活躍をしたが、京方として参加した庄四郎兵衛尉家定のように富田長家も後鳥羽院の要請に応じて参戦したと思われる。京方敗戦後、長家がどうなったのかは不明である。富田氏についてはその後の動静は不明である。室町時代の明徳３年(1392)閏８月の相国寺供養の際の随兵に、富田八郎藤原言泰、富田二郎平貞重・同弾正左衛門尉平貞経の名が見えるが、児玉党系の富田氏とは確定できない。なお、戦国期の室町幕府に仕えた富田氏は、『見聞諸家紋』によれば富田氏は軍配団扇紋を使用しているので児玉党系の富田氏と考えられる。

第５節　その他の地域の児玉党

⑴ 比企・入間郡の児玉党

比企・入間郡内には児玉弘行の二男資行(相行)の流れの一族が分布する。代表的な一族には小代氏や越生氏・浅羽氏・粟生田氏がある。入間郡は中世には東西に広がった郡域であり、西部を入西郡ともいい、児玉党一族が多く分布する。

小代氏は治承・寿永の争乱時の惣領が小代八郎行平で、平家追討を始め鎌倉時代初頭期の活躍で右馬允に任官し、越後・土佐等で新恩を獲得した。その後、小代重俊の代には子息重康の勲功により肥後国野原庄を獲得している。小代氏は文永・弘安の蒙古襲来を契機として、幕府の命によって肥後国の所領に移住しその地で活躍している。

越生氏も多くの合戦で活躍し、播磨国賀古庄、但馬国日置郷・釈迦寺、紀伊国伊都賀庄、石見国加志岐彼別府等西国各地に所領を獲得した。

粟生田氏の動静は不明であるが播磨国に所領を持ち、その地で活動していたらしい。小代氏や越生氏については、『東松山市史』・『坂戸市史』・『越生の歴史』に詳しい。

⑵ 秩父郡内の平姓児玉党一族

秩父郡内は早期に平姓秩父一族が地盤を築いていたが、ほぼ同時期に丹党一族も郡内各地に広がっていた。そういう点では児玉党一族の秩父郡内への分派は遅れており、児玉党は秩父氏と婚姻関係で郡内に進出していった。

秩父一族が郡内から関東平野へ進出していった後に、児玉党一族は平児玉と呼ばれる一族が、吉田・大浜・大淵・鳥方・金沢という地(現在の吉田町から皆野町一帯)に広がった。これは秩父郡から児玉郡太駄を通って上野国に通じるルート(近世期には上州道と呼ばれた)が古くより存在していたことによる。それ以外の平野部に出るルートの多くは丹党一族が握っており、特に荒川流域には丹党の一族が多く分布している。

⑶　上野国内の平姓児玉党一族

上野国西部地域にも児玉党の一族が多く分布している。『七党系図』から抽出できる一族には、小幡・片山・新屋・山名・島名・後閑・大類・倉賀野・奥平・矢島・白倉氏がいる。現在の高崎市から甘楽町付近に分布する。この中で奥平氏は後に三河国に移り、近世期には大名家に成長する。小幡氏も戦国時代に上州にあって活躍し、一族は上野・甲斐・出羽・安芸国等に分布する。

上野国に分布する児玉党一族は『七党系図』では児玉経行系から広がった一族で、その多くは平児玉と呼ばれ、平姓秩父氏との婚姻関係で結ばれている。

この地域でいかにして児玉党の一族が分布したのかは不明だが、『横山党系図』には、横山次郎大夫経兼の注記に、後三年の役後の出来事で「上野国の多胡四郎別当太夫が八幡殿に従わないので児玉有大夫広行が討ってを承り、舎弟経行が代官となり四郎別当を討ち取った」とある。『栗生系図』には上野国多胡庄を領していた伴太大夫が八幡殿の命令で丹党・児玉党によって討たれたという。児玉党はその功でうすかねという鎧を賜ったという注記がある。これ以降、この地域が児玉党の影響化におかれ、在地の武士が児玉党に組み込まれていったものかもしれない。

第４章　児玉党一族の館

市内には児玉党一族が広く分布しており、昔より児玉党の館跡と伝えられる場所が存在する。『埼玉の館城跡』によれば、城の内(入浅見)・関根氏屋敷・武井館(下浅見)、真下氏館(下真下)、栗崎館(栗崎)、城山(本庄)、富田氏館(西富田)、堀の内(北堀)、堀の内(牧西)、堀の内(四方田)、久城田(今井)などがある。その後の発掘調査でも中世館跡が確認され、『埼玉の中世城館跡』にはさらに多くの館跡が掲載されている。この報告書にも漏れている分も含め、児玉党関連の館跡について概要を触れてみる。

第１節　児玉党庄氏一族の館

⑴　阿佐美氏と新堀館跡・城の内遺跡

下浅見地区には関根氏屋敷・御蔵屋敷・武井館・真福寺の４箇所がある。関根氏屋敷は字新堀にあり、現在個人の屋敷地となっており、以前は館(やかた)の東側に水堀が残されていたが現在は埋められた。近世期には村の郷蔵(ごうくら)屋敷であった。館の南側と北側には土塁(どるい)があったが現在は見られない。堀は館の外側にも一回り外堀があった。館の南西部には「おあちゃ稲荷」があり伝承も残されている。館跡の北西部には氏神そばに中世の五輪塔３基があり、近世の村絵図(関根家文書)にも堀が記載されている。この館跡については『下浅見地誌』に「古宅地」として「二重堀」と称し、「古くから児玉党阿佐美氏の館といわれ、その後、守護役の手島丹後守居住の地という。その後地頭の朝日寿永の居宅となる。敷地が四方に二重堀がめぐり、東の一方しか出入口がなく往来が不便なことと、名将の城跡だったので恐れ多く誰も住まないで地頭の郷蔵の敷地になった。」と記している。

御蔵屋敷は字前屋敷にあり現在は福島家の屋敷となっている。昭和40年代頃は館の東側に水堀が残っていた。近年特別に遺構は見られないが、館の北西隅の氏神脇に数基の五輪塔や宝篋印塔の部品がある。

武井館は水田地帯に面した微高地に所在し、かつては方形の区画で東部と北部に堀があったいわれるが、現在は圃場整備が行われ館跡の遺構は見られない。周辺は「在家」という小名が残されている。館跡の名称は近くに武井橋があるのでそう呼ばれているが、館の居住者にまつわる伝承などは、『下浅見地誌』に「この橋(武井橋)の北の旧字在家に稲荷あり、鉢形北条の臣松岡伊織と云うものここに住し、後に武井に改姓し時にこの橋を架すと云」とある。

字後張にある真福寺は館跡とされていないが、境内には板碑や五輪塔などが散在しており、真福寺文書に、「寺の周囲に水堀がめぐっていて、土手を崩して堀を埋めて水田にした」と書かれていて、土塁と堀があったことを示している。

入浅見地区には城の内館跡が中世館跡として知られている。城の内は生野山から数本延びる尾根の北側にあり、尾根の先端部分から微高地部分に立地する。水堀の一部が残っていたが、現在は圃場整備で消滅した。付近には「矢場(あるいは馬場)」などの小名が残る。阿佐美実高の居館との伝承もある。城

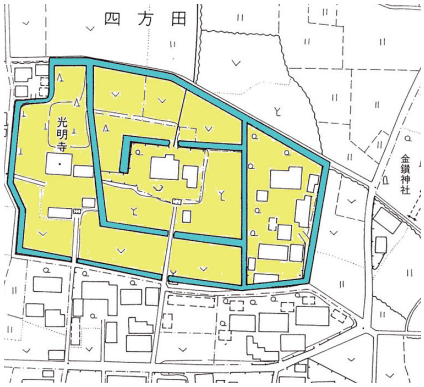
の内は発掘調査が行われている(児玉町文化財調査報告書第23集「城の内遺跡」)。
入浅見地区にはこのほか字内手付近に児玉党阿佐美氏の館跡と推定される場所がある。城の内より少し南に位置し、生野山の尾根の先端部分に位置する。その緩やかな南斜面上に東西に土塁状のものが一部残る。また谷の最深部でも中世の屋敷跡が発掘調査されている(児玉町文化財調査報告書第27集「壱丁田遺跡」)。周辺には内手・新屋敷・前田・鎌倉・矢田・庄田などの地名が残る。また推定地の付近に阿弥陀堂・観音堂・金鑽神社がある。

⑵ 蛭河氏と蛭川東廓

蛭川地区には地区のほぼ中央部、女堀川の自然堤防上に「東廓(ひがしくるわ)・中廓・西廓・南廓」の地名がある。この内、東廓に方形の区画が地籍図に見られ、ここが蛭河氏館跡と推定される。館跡の中央を国道が通り民家が建っているため遺構はほとんど見られず、わずかに堀跡が道路として利用されている。館跡内に板碑1基が残る。

⑶ 四方田氏の館跡

四方田地区の光明寺東側一帯は「堀の内」と呼ばれ、児玉党四方田氏の館跡と推定される。四方を堀がめぐり、さらにその外側にも堀が台形に周っている。中でも東側の内堀は現在寺域と区画するものとなっているが、深さは埋まって浅くなっているが幅は比較的広く残されている。内堀・外堀共に内側には土塁は残されていない。館の規模は現状で東西160メートル、南北が80メートルから110メートル程である。外堀内に光明寺が、館の北東に金鑽神社が鎮座し、館跡は比較的良い状態で残されている。



四方田館跡

⑷ 牧西氏の館跡

牧西地区にも「堀の内」と呼ばれる場所がある。牧西の集落のほぼ中央から西よりに館跡と推定される場所がある。現況では土塁・堀とも現存しないが、推定値の東側と南側の道路部分がかつて堀であったとの伝承がある。北側と西側については用水堀が通り、かつての堀跡を用水堀に利用したとも考えられる。牧西の堀の内は児玉党庄氏の一族牧西氏の館跡と推定されている。

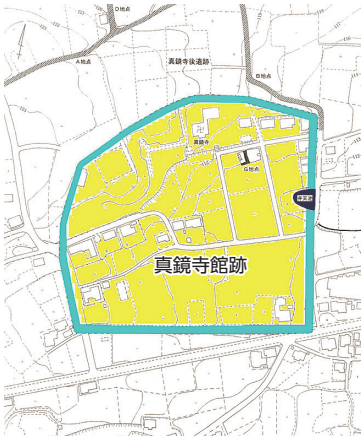
⑸ その他の館跡

今井地内には堀の内の地名や伝承は残されていないが、「西郭」などの郭地名が残る。これは複数の館が所在した可能性があるが、西郭地内にもかろうじて堀の痕跡を残している。その地の北西に金鑽神社があり、北東には長興寺が所在している。児玉党今井氏の館跡と想定されるが、今井氏は史料・記録に乏しくこの地を今井氏館跡とは必ずしも決められない。北堀の地区内には「堀の内」と呼ばれる場所がある。北堀の南側の栗崎地区内にも「堀の内」と呼ばれる場所があり、共に堀の一部が残されている。両者は児玉党庄氏の分流本庄氏の館跡と推定されるもので、栗崎一帯が中世において東本庄と呼ばれており、室町時代には本庄氏がこの地で活動していた。
高関地区も特別館跡と伝える場所は無いが、現在の小字に東廓・西廓が残り館跡の可能性もあるが特別に遺構も見られない。
吉田林地区では『埼玉の館城跡』では掲載されていないが、近年の発掘調査で字毛無しより館跡が検出された。調査自体は館跡の北西隅の調査でコーナー部分が確認されている。地割りも、地籍図によると明瞭に見て取れ、館堀が方形に記載されている。南北・東西とも60メートル程度の小規模な館跡である。ここは毛無し屋敷跡と呼んでいるが、この名の由来は『吉田林地誌』によれば、「毛無しに毛無し屋敷あり。里人の説に昔時小菅氏の後室剃髪して寓居す。よってこの名ありという。その説分明ならず」としている。小菅氏とは小菅又八郎という徳川氏家臣であるが、近世初期の段階で吉田林村・下真

下村の地頭であったらしい。しかしわずかに吉田林と下真下の旧家に伝わる由緒書などに記載されているのみで詳細は不明である。この外、館跡とは推定できないが字西組に旧地頭の蔵屋敷があり、明治初頭の絵図(『峯岸家文書』)には毛無し屋敷は方形の区画が描かれ、郷蔵屋敷も方形の敷地に描かれている。吉田林地区には字堀の内の地名も残されており、中世館跡が今後確認される可能性も残されている。

第２節、児玉党の他の一族の館

(1) 塩谷氏と真鏡寺館跡

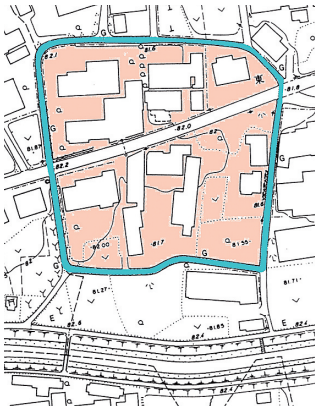


塩谷氏館跡

塩谷地区の西側、飯倉の字界近くに南面する小丘陵上に真鏡寺がある。寺の北側には東西に空堀が残り、一部には土塁上の高まりも存在した。境内には渋谷金王丸の墓と伝える五輪塔のほか、板碑や五輪塔が散在する。発掘調査によって寺域の東側の堀跡が確認され、古代末期から中世初期の出土物が確認されている。真鏡寺の空撮写真によれば館跡の全容がわかる。現状と発掘調査によって館の北側と東側は堀の存在が確認され、南側は帯状に細長く水田が区画され、かつ一段低くなっている状態が見てとれる。西側はまだ堀の存在が確認出来ないが、西側のほぼ中央に溜池があり、館の西側に広がる水田地帯の用水源となっている。土塁は北側のものが確認出来るが、ほかは残されていない。館は南面する小丘陵を整形して利用されており、館の周囲を巡る堀は北側より南側に用水を集水する機能があり、途中に溜池を設け、そこより独自の水田に用水を供給している。中世の谷戸田水田経営に類似した性格がそこにあり、金屋条里水田に用水を供給する赤根川や九郷用水は引水しない。このことは館の主が開発領主的な性格を有する条件を満たすもので、独自の所領・経済基盤を有していたことを意味する(『真鏡寺遺跡』Ⅱ)。古代末期から中世にかけてこの地域で勢力を有する者は児玉党の塩谷氏よりほかはなく、この真鏡寺館跡が塩谷氏の館跡と考えても間違いないものであろう。館の規模は北側が弓状に湾曲するが東西に約300メートル、南側が東西約250メートル、西側・東側が南北に200メートルである。真鏡寺は別名を西光院といい『新編武蔵風土記稿』には“西光院・・・北性山真鑑(鏡)寺と号す”と載せている。

(2) 真下氏の館跡(上真下・下真下の館跡)

下真下地区は児玉党真下氏がいた地域で、戦国期の文書にも真下氏の存在が見えるので鎌倉期から戦国期にわたる館跡の存在が推定される。古くより知られている真下氏館がある。この館跡については『埼玉の館城跡』では字石橋とし、現在の共有墓地付近としている。『埼玉県北部の城』でも同様であり、周辺に真下氏縁の観音堂や坂本家墓地を関連の史跡として掲載している。しかしこの館跡については遺構はまったく見られない。明治20年に編さんされた『下真下地誌』には、「明治村誌ニ云、本村中央中屋敷及び中内手ニ亘リ旧真下氏ノ居所ト載セ、又真下左兵衛ハ新田氏ニ仕ヘルト云々」とあり、さらに「里言ニ年月不詳ト雖モ、大敵辰巳ヨリ寄セ来ル、東大手ノ門ヲ鎖シ、死ヲ以テコレヲ守ル、利セズシテ裏門ヨリ西方ヲサシテ落ント欲シ、遂ニ敵兵ノ為ニ討死ス」と書れている。これによれば『埼玉の館城跡』のいう字石橋ではなく、字中屋敷・中内手付近にあったことになる。現在では下真下の北部は工業団地となっており、戦時中に陸軍児玉飛行場の造成のため民家や墓地までもが移転の対象となり、昔の風景とは一変しているため、現在遺構として残っているものはない。


伝東福寺跡

戦後、飛行場跡は開墾され畑地となったが、工業団地が造成された際に、発掘調査が行われ、字古井戸より二つの館跡が確認されている。１号館は館跡すべては確認できていないが、複郭の館で、土間状遺構や掘立柱建物跡が検出されている。遺物は板碑ほかで16世紀代のものが確認されている。２号館は二重の堀がめぐる方形館で、掘立柱建物跡が検出され、13世紀後半の遺物が確認されている。

上真下地区では館跡と伝えられた場所はないが、本来は下真下と上真下は

一村であり、戦国末期頃に分村したもので、地理的には上真下のほうが九郷用水の上流にあたり、重要な位置をしめているが、特別に伝承は伝わっていない。上真下の字東と中内而にかけて地図をみると方形の区画が確認できる。方形の区画は現在道路となっていて、その道の内側にわずかに高まっている場所が数箇所見られ、土塁の跡ではないかと思われる。方形の区画の南側に板碑一基があり、区画の南側には共有墓地がある。『上真下村誌』にはこの墓地入口から「応永弐拾弐年、真下弾正」と刻んだ古碑が発見されたという。またここは東福寺跡とも伝えている。

⑶ 富田氏の館跡

富田地区は東富田と西富田に分かれるが、中世においては一村であったと思われる。西富田の本郷地区に「堀の内」の地名が残されている。南側を女堀川が流れ、北側を児玉新道が通っている。遺構は北西隅に堀の痕跡が僅かに残る程度である。この堀の北西側に宥宝寺がある。堀の内は児玉党富田氏の館跡と推定されている。

第５章　児玉党とその伝承など

第１節　児玉地方に伝わる伝説

児玉党一族にまつわる伝説・言い伝えの類は、市内に限らず埼玉県内各地、あるいは県外にも残されている。伝説の類は直接歴史的事実を今に伝えているわけではないが、長い年月を語り継がれてきたもので興味深いものが多い。伝説・民話の類ではないが、旧家に伝わる系図や由緒書等も歴史史料という観点からは史料価値が低いが、伝説・言い伝えなどと同様に創作された面を持つ反面、歴史的事実を一部含んでいる場合が見られるのでここで併せて取り上げた。

⑴ 庄氏と伝説

１．児玉党の菩提寺「西光寺」

下浅見には「西光寺」とか「西光寺おり口」・「大門」といった小名が江戸時代の名寄帳に見える。この西光寺は児玉党の祖有道宿祢武蔵守維行が薊山(あざみやま)(浅見山・大久保山ともいう)へ一寺を建立し、阿弥陀如来を安置したのが始まりで、大門は今の八幡神社と正対する所にあったという。地名にも西光寺や鐘撞堂跡が残り、延元２年に起きた薊山合戦の時に寺は南朝北畠軍の宿陣となり、兵火のため寺の堂宇・鐘楼は焼け落ちたという(中英夫『武州下浅見誌』)。

西光寺に関する資料は存在せず、伝説と地元に残る地名程度しか残されていない。しかし西光寺が児玉党の菩提寺であるなら、西光寺の「西光」が児玉党の祖または初期の人物の法名かとも考えられる。それは塩谷の真鏡寺が「西光院」と号しているからで、真鏡寺の寺域は児玉党塩谷氏の館跡と考えられている。西光院が真鏡寺の前身の寺号であれば、児玉党と縁の深い名前と考えられよう。

２．庄忠家・高家兄弟の美談

これは小暮秀夫編『武蔵国児玉郡誌』と渡辺世祐・八代国治編『武蔵武士』に収録されている。

庄三郎忠家は児玉党嫡流の児玉庄大夫家弘の三男で、河内付近を本拠とする武士である。源平合戦当初、木曽義仲攻めの時源義経に属していた。この時、忠家の弟庄四郎高家は木曽義仲に属していた。元暦元年正月に粟津原の合戦で義仲は討ち死にし高家は主を失った。この時忠家は弟が木曽方にあることを知っており、このまま弟を死なせるわけにはいかない。数度弟のもとに使者を送り、兄が取りなすから義仲殿亡き後は義経殿に従って兄弟共に活躍しようぞと申し出たが、高家は主を失ってすぐに主を代えるのは武士の恥だ、こうなれば一番に先駆けをし討ち死にして後世まで名を挙げ、兄の面目もたてようぞといって承知しなかった。忠家は弟の固い決心は代えられず、必ず一番に先駆けするだろうから自分も真っ先に出て弟は自分の手で討ち取って義経殿の報告しようぞと誓った。やがて合戦の当日、高家は言葉通りに団扇の旗をさして真っ先に進み出た。忠家は自ら出でて高家とがっぷりと組み合った。し

ばらく優劣がつかなかったが、忠家は郎等が多くいたので高家を生け捕る事ができた。忠家は義経の面前に高家を連れて行くと、義経は忠家の弟思いに感動し高家を助命した。高家はすでに命無きことを覚悟していたが、義経に助命されたことを深く心に刻み、一の谷合戦で平家方の勇将但馬守経正を討ち取るという大活躍をした(『武蔵武士』)。

3．重衡首塚と庄高家

蛭川の平重衡首塚

蛭川にある駒形神社の東隣に釈迦堂がある。この南側墓地の一角に平重衡の首塚がある。これは地元に伝わる伝承に、源平合戦の時、一の谷合戦で蛭川の地を本拠とした庄四郎高家(後に蛭河氏を称す)は平三位中将重衡卿を生け捕るという勲功をあげた(庄太郎家長或いは庄三郎忠家が捕らえたとする説もある)。平重衡は平清盛の五男で勇将として名を馳せていた。重衡は捕らえられて鎌倉に送られたが、その毅然とした態度は頼朝を感動させたともいう。助命の話しもあったが、重衡の南都焼き討ち事件があったため、南都の僧兵らの斬首の意向は強く、重衡は斬首と決まった。その役に高家は指名されやむなく木津川で重衡の首を切った。首は南都に晒されたが、後にやるせない思いの高家は、その首を貰い請け、本領に持ち帰り手厚く葬ったのがこの首塚という。庄四郎高家が重衡を生け捕ったことは『平家物語』に見えるが、斬首役が高家だったかどうかは不明である。こういったことが実際にあったかどうかわからないが、同じ様な話に、一の谷合戦で猪俣党の岡部六弥太忠澄は平清盛の弟平忠度を討ち取り、後に故郷武蔵国榛沢郡岡部郷に葬ったのが忠度塚といわれている。

⑵　真下氏と伝説

1．真下氏と馬頭観音堂

下真下石橋の馬頭観音堂

「真下の馬頭さま」と呼ばれる民話が残っている。これは下真下にある馬頭観音堂に架かっている奉納額に書かれているもので、話の概要は「壇ノ浦合戦の時に真下太郎基行の率いる騎馬一隊は最前線に立ち、合戦の最中流れ矢のために三頭の馬が射られてしまった。しかしそれにひるまず真下太郎は先駆けをなしたという。真下太郎は死んだ愛馬のたてがみを故郷に持ち帰り手厚く埋葬してそこに馬頭観音堂を建立した」という(田島三郎編『児玉の民話と伝説』上巻)。

同所の旧家坂本家に伝わる家伝書『伝書之事』にはこう書かれている。

「一ノ谷合戦の折り源範頼の指揮下で児玉党は先陣をたまわり攻め掛かる。真下氏も平家の諸将を切り払い攻め入ったが、この時平家の勇将平教経の射る矢のため源氏方の損害が多く出た。真下太郎も命がないと観念し掛かった時、金鑽明神に心願をしたところ、不思議なるかな乗っていた馬が稲妻の光の如く宙を飛び去ること三町余り、これによって基行の命が助かったことは誠に神徳である」とあり、さらに「文治五年、真下氏乗りし馬が死んだので馬頭観音堂を建てた」ともある。下真下の地に伝わる真下氏と馬に関する伝説もこの二例でもかなり異なっているのは興味深い。この民話は坂東武者と馬との切っても切れないつながりを示す逸話とも言える。伝説に登場する真下太郎基行は『七党系図』には真下五郎太夫基行とあり、一部混乱しているが、基行は真下姓を始めて称した人物で、真下郷を開発した開発領主と考えられる。しかし真下基行が実在したかどうかを示す信頼の置ける史料・記録はなく、基行自身も源平合戦の時代には既に死去していたと考えられる。

2．真下春行の活躍

これも前掲の『伝書之事』にみえる。鎌倉幕府滅亡の時、真下佐兵衛春行と真下弾正元幸は新田義貞に従って軍功を建てたという。その後、足利尊氏が後醍醐天皇から離反したため、真下春行と元幸も義

貞に従い上京した。そして新田義興に従って東国へ下り、足利方と戦った。奥州より上った北畠顕家と一緒になり、延元元年12月に利根川で足利軍と戦い、さらに薊山にて上杉朝実勢と戦った。真下春行は上杉方の長尾小三郎を討ち取り、真下元幸は上杉朝房と戦った。この時栗崎山にいた上杉重能軍が援軍として加勢し、真下春行は討死し平塚に葬むられたという。その後、真下元幸と真下左馬丞は安保原で戦い足利軍を追い払ったという。

関東に残った真下氏については、藤岡市(旧鬼石町)域で活動した様子が窺えるが、史料記録に乏しく、真下春行の実在を始めその動静を確認できない。

3．「渋谷金王丸伝説』と真下氏・塩谷氏

塩谷真鏡寺の伝渋谷金王丸の墓

塩谷の真鏡寺墓地に大型の古びた石塔がある。地元ではお牛様と呼ばれ、渋谷金王丸が乗ってきた牛の化身と伝えている。

渋谷金王丸は相模国渋谷(武蔵国江戸の渋谷とも)出身の豪族渋谷重国の子といい、源義朝の四天王の一人ともいう。平治の乱で破れた義朝が尾張国で殺害されたあと、金王丸は仏門に入り全国を巡り最後に塩谷の西光院(真鏡寺のこと)の住職になったという(柳進編『県北の伝承と民俗』)。

前掲の『伝書之事』によれば、「文治元年に源頼朝の命により渋谷土佐入道昌俊に率いられた真下基行らの児玉党は、京都に登り源義経の居る堀川御所を夜襲した。しかし土佐入道昌俊は討ち死にしたため、基行は塩谷五郎と相談して遺骸を児玉郡塩谷村へ送り葬った」と書かれている。

この事件は『吾妻鏡』の記事にあり、頼朝は土佐房昌俊に命じて義経暗殺を実行させている。さらに京都の貴族九条兼実の日記『玉葉』には「頼朝郎従之中、小玉党武蔵国住人卅騎許・・」とあって、児玉党がこの夜討ちに参加したことが知られている。この児玉党の中に塩谷・真下両氏が参加したかどうかは定かではない。

塩谷の真鏡寺は児玉党塩谷氏の館跡と考えられ、土塁・堀跡が存在し、塩谷氏の本拠地に葬ったという伝承は興味深い。真鏡寺にある古塔は歴史的事実と伝説が混ざり合って現在に伝えられている一例といえる。しかし渋谷金王丸と土佐房昌俊が同一人物かどうか不明であり、渋谷金王丸伝説は全国的に存在し、その一例が児玉にもあるわけである。

上里町金久保の畑児塚

(3) 児玉氏の伝説

1．畑児塚と児畑塚

児玉郡内には新田義貞の重臣畑六郎左衛門時能とその家臣児玉五郎左衛門光信に関する遺跡が二ヶ所に所在する。畑時能は越前鷹巣城で討ち死にし、児玉光信がその首を故郷に持ち帰るという話しで一致している。

一つは「畑児塚」で上里町金久保に伝わる伝説では、児玉光信は主人畑時能の首を金久保まで持ち帰り陽雲寺に葬ったという。光信は墓のそばに一寺を建て、入道となって時能の菩提を弔ったという。毎年３月と10月の24日は祭日となっているが、畑氏と児玉氏の忌日という。小祠の一つが時能、もう一つが光信を祀ったものという。もう一つは神川町下阿久原池尻にある石塚で、これは畑六郎左衛門時能の首を家臣児玉五郎左衛門光信が時能の故郷秩父に持ち帰る途中、光信がこの地にあって病死し、それを葬った墓と伝える。里の人は哀れんで二人をこの地に手厚く葬ったのがこの塚という。畑時能と児玉光信は『太平記』に度々登場し秩父・児玉両郡縁の武士は昔からヒーローであったのであろう。

歴史的には畑時能が越前で討死した後どうなったかは不明である。その家臣の児玉氏も同様である。畑氏は長瀞町出身とも飯能市出身ともいわれるが定かではなく、児玉光信も児玉党一族の後裔と考えられるが定かではない。この児玉氏の系譜については『七党系図』の塩谷氏より児玉氏が派生しているが、この中に光経・光信兄弟の名前が見られるが、これに比定できるだろうか。

『七党系図』に見える児玉三郎光信と、この五郎左衛門光信とは世代的にも概ね近い時代の武士で同一人とも考えられる。児玉氏の主流は鎌倉時代の蒙古襲来を契機に安芸国に西遷しているが、関東に残った児玉氏の流れであろうか。系譜的には児玉氏の系譜は謎が多い。

2．日蓮と児玉時国(児玉の久米氏)

玉蓮寺(本庄市児玉町児玉)

慶応３年刊行の『日蓮大士真実伝』巻４に、日蓮が佐渡に流される記事に「十三日児玉に至る。六右衛門時国、大士を我が家に宿し奉り、一家残りなく改宗す。十四日上野国甘羅(楽)郡栗津まで、時国案内として送りまいらせ、長谷川長源が家に入奉る」とある。さらに同書巻五には、日蓮が赦免され佐渡より鎌倉へ向かう途中の記事に「当国の領主村田大隅守、かねて大士を信じてありたれば、(中略)見送り給ひけるゆえ事故なく武蔵国児玉に着きぬふ。児玉六郎右衛門時国、その恙なきを歓び、御赦免を祝し盃をすすめて、ここに一夜を供養し、明の日は久米川まで送りまいらするにぞ。大士悦んで姓氏を久米と賜ひ、本尊を授けぬふ。久米川曼陀羅が渕とて今に其名を伝へたる。」と載せている。この話しはよく『本国寺年譜』が引用されるのであるが、同書に記されているものとほぼ同じと思われる。

児玉町児玉にある日蓮宗寺院の玉蓮寺の由緒もほぼこの記事と同じであり、児玉町の旧家久米一族の家伝も同様である。同所久米総本家である久米六右衛門家(通称久米六)の当主久米良作氏が学者笹川臨風氏に依頼して大正11年に刊行した『児玉党』には、前記の伝説を載せ、時国は上人より久米氏の姓を授けられたのであるが、児玉系図家国の條に「久米太郎左衛門尉、文永年中日蓮上人に謁、法華宗と成、来目を久米と改、是より子孫久米と云」とあることを引用して、時国の先代より来目の地を領していて来目姓を称していたのを、日蓮に勧められて久米に代えたのだろうとしている。

これらの伝説に対して興味深い話が所沢市久米に残されている。それは平塚義角氏編『ふるさと久米今と昔』(昭和60年刊)に記載されている。久米地域には戦国時代頃に書かれた『久米記』・『久米正記』という古記録があり、それを基に天正14年に『村鑑』が書かれ、慶長16年に村鑑を基に編纂したものが『入東郡久米郷旧跡誌』、さらにそれを宝永２年に増補したのが『増補久米郷旧跡誌』という。この書には鳩峯八幡神社の項に『久米記』から引用して「当地(久米郷)の郷士久米六右衛門は鳩峯八幡神社の御神体一体と棟札を携帯して児玉郡八幡山村に転居し、その地に八幡宮を勧請した。児玉六右衛門と改名したが現在は旧姓に復して久米姓を称す」と記録している。さらに久米の曼陀羅と題して児玉六右衛門と日蓮の関係を前述した同じ由緒を載せている。

第２節　各地に伝わる伝説

(1)　埼玉県内に伝わる伝説

1．児玉重行と成田親泰

『行田市史』には『忍の行田』という本から引用して「元来、忍氏は忍三郎などの名が既に頼朝時代から『吾妻鏡』に記載されるほどの古い家であった。古く児玉党の人々が、この地に住して忍氏を唱えたといわれている。」とある。

戦国時代初期に成田親泰は忍大掾を奇襲して滅ぼし、さらに扇谷上杉氏系の児玉武蔵大掾重行をも攻め滅ぼしたという。この伝説は『新編武蔵風土記稿』にも記されている。成田氏はこの親泰以降、戦国時代に忍城を根拠として活躍している。

戦国時代初期の段階で児玉姓を名乗る一族が行田市周辺地域に居たとするこの伝説は興味深い。小代文書中にある小代行平置文にこの地域と児玉党の繋がりを示す記述がある。それは弘行の所領について書き上げた部分で「他国の分はここでは触れないが、武蔵一国の分には児玉・入西両郡並びに久下・村岡・中条・忍・津戸・野村・広田・堀須・小見野・三尾乃屋、弘行の所領である」とある。大里郡域にも弘行の所領があった事になる。

2．児玉雲太夫伝説

入間郡越生町の古刹青龍山最勝寺の由緒には「建久４年に源頼朝の命によって児玉雲太夫が創建し、頼朝は領地を与え祈願所とした」と伝えている。

最勝寺の縁起によると、「源頼朝公が則使大名であった家来の児玉雲太夫に命じて創建し領地を与え祈願所とした」とある。同町指定文化財の経箱があり、蓋裏に「武州入西郡越生郷明応３年甲子２月５日大壇那永珍」の銘があるが、越生の地は中世においては入西郡越生郷で、児玉党越生氏の本願地であった。児玉雲太夫については不明で、最勝寺の縁起によれば鎌倉時代初期の武士となるが不明である。越生氏については『越生町の歴史』に詳しい。

3．長瀞町瀧上に伝わる伝説

『新編武蔵風土記稿』によれば、野上下郷にある阿弥陀堂の伝説には、阿弥陀堂の本尊阿弥陀仏は、当地の瀧上十郎道信というものが念仏を修めようとして性真上人に乞い請けて瀧上某が持仏堂に安置し、瀧上道信が帰依仏とした。ある時、児玉党の真下五郎太郎と争いが起き、鎌倉で対決しようとし旅先で道信は争いの証拠文書を忘れてしまったことに気づいた。そんな時道信の後より来る僧が道信を呼び止めた。道信は振り返ってみると雨の中、赤脚が泥で汚れた僧が立っており、篠り杖先に書簡を付けて道信に渡したのである。道信はこれを広げてみると自分が忘れた証拠文書であった。僧は文書を渡すと忽然と消えてしまったという。道信は鎌倉に行き真下五郎太郎との訴訟に勝利したという。道信は瀧上の在所に戻り不思議に思って持仏堂の阿弥陀仏を拝むと、阿弥陀の足に泥が付いていたという。

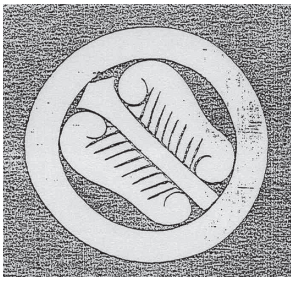
伝説では児玉党真下氏は敵役となるが、信心の厚い瀧上道信を阿弥陀仏が助けてくれたという不思議な話である。鎌倉時代前期頃の話しと思われ、ここに瀧上氏の争論の相手役として児玉党の真下五郎太郎が登場する。瀧上氏は武蔵七党の丹党一族と推定されるが、この争いは証拠文書が存在したというから、瀧上・真下氏間の所領争いにまつわる言い伝えと思われる。

⑵ 国内に伝わる伝説

1．信州中原一族と児玉党

木曽義仲を養育した中原兼遠の妻に児玉党の女性千鶴御前(児玉経遠或いは児玉貞純？の娘)がいたという。樋口兼光と今井兼家は児玉氏の血を引くことになる。樋口兼光が児玉党と関係があったことは『吾妻鏡』に記載され、宇治川の合戦で既に木曽軍が総崩れになった時に、児玉党は樋口兼光に投降を呼びかけている。児玉党は自分たちの軍功にかえて兼光の助命を申し出たのである。兼光はこれに応じて児玉党の中に投降し、児玉党は源義経に軍功に代えて助命嘆願をした。残念ながら朝廷の意向で兼光は斬首されたが、『吾妻鏡』は児玉党と樋口兼光は「親泥」の間柄といっている。かなり親密な意味合いを持つと思われる。木曽義仲の父源義賢は上野国に大きな影響力を持ち、ここを基盤に南下して武蔵に影響を及ぼそうとして、相模に勢力をもつ源義朝と衝突したことはよく知られているが、上野国西部に児玉党の一族が多く分布しているし、児玉郡は上野国に境を接していて源頼賢と関係を持つことも考えられる。実際、庄四郎高家は木曽義仲に当初従ったという。

第３節　児玉党と軍配団扇紋



岡山県の庄氏の家紋

⑴ 児玉党の旗印軍配団扇紋

軍配団扇とは今私たちが夏に日常用いているうちわ(団扇)とは違い、戦国時代に戦国武将が戦の采配に用いたものである。団扇と軍配団扇とでは形が異なるが、古い記録などに見られる「うちわ・団扇」は軍配団扇を指している。軍配団扇は中国より日本に伝えられたもので、日本古来の団扇に対して

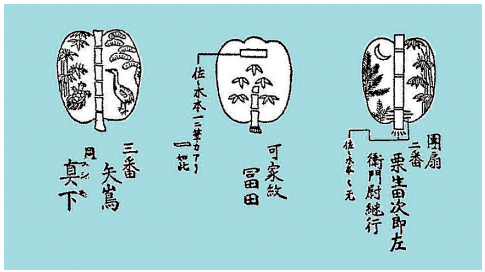
唐団扇(とううちわ)とも呼ばれている。児玉党が旗印に用いた団扇はこの唐団扇である。児玉党の子孫と伝えられる家々の多くが軍配団扇の家紋を使用している。 児玉党と軍配団扇紋の由来は、古く鎌倉時代以前にさかのぼると言われているが、源平合戦当時に既に児玉党が「うちわ」(団扇)の旗印を用いたことが軍記物語の『平家物語』や『源平盛衰記』に記載されている。

『平家物語』には、一の谷合戦の時に「こゝに児玉党とおぼしくて、うちわの旗さいたる者十騎ばかり」。『源平盛衰記』には、一の谷合戦で湊川の端を落ち行く平越前守通盛を児玉党が追いかけて「団扇の旗さして、児玉党七騎にて追懸け奉る」とある。また南北朝時代でも児玉党が軍配団扇を用いたことは軍記物語の『太平記』に見えている。建武３年(1336)６月に京都を奪回した足利尊氏を、新田義貞や名和長年(なわながとし)らが包囲した際に「丹・児玉ノウチワノ旗、三十余流連リテ」と見え、新田義貞に従った児玉党が団扇の旗差しを使用していたことが伺える。外にも「打輪ノ旗ハ児玉党」、「花一揆ヲ散サン為ニ児玉党ヲ向ハセ、打輪ノ旗ハ風ヲ含メル物也」と見える。

南北朝時代以後、室町時代にはもう児玉党といった党的武士団の結びつきは見られなくなり、児玉党が党として軍配団扇の旗印を使用した記録は見えないが、児玉党の系譜を引く一族が軍配団扇を旗印や幕の紋として使用したことは幾つかの記録に見えている。

１．『見聞諸家紋』に見える軍配団扇紋

戦国時代の天文８年(1539)に作られた室町将軍家に仕える武士の家紋を記録した『見聞諸家紋(けんもんしょかもん)』という史料には、粟生田・真下・矢島・富田氏の家紋が載せられている。これに載る軍配団扇紋は形態が現在みられる形と若干異なり、扇面の中央がへこんでいない。



２．『関東幕注文』に記載される幕紋

また戦国時代の永禄４～５年頃に越後国の上杉謙信が関東に入り小田原城の北条氏を攻めた際に、上野・武蔵・下野国を初めとして武将を集めたことを記録した『関東幕注文』(上杉文書)には幕の紋が記載されている。ここでいう「団」は団扇で軍配団扇を差している。

「幕注文」に見られるように児玉党の系譜を引く一族が中世を通して軍配団扇を旗印や陣幕の紋として用いた理由は定かではない。軍配団扇に神霊が宿るとして縁起ものとして用いたかも知れないが、本当の理由ははわかっていない。いずれにしても児玉党が鎌倉時代初期より軍配団扇を旗印として用いたことは事実で、室町時代以降には旗印や陣に張る幕の紋としても利用されるようになり、室町時代も末期から戦国時代になって家紋として定着していったものと考えられる。

『関東幕注文』に見える軍配団扇紋使用の武士

総社衆	小幡三河守	団の内六竹
同	大類弥五郎	うちハの内切竹ほうわう(鳳凰)
同	反町	うちわの内ニきり竹にほうわう
箕輪衆	倉賀野左衛門五郎	団乃内ニ松竹
沼田衆	阿佐美小三郎	竹ニ団之文(紋)
足利衆	小幡次郎	かふ竹団(株竹団扇)
同	小幡道佐	おなしもん
同	本庄左衛門三良	団之内ニ本之字
武州之衆	本庄左衛門佐	団之うちニ本之字
岩付衆	浅羽下総守	団之文
勝沼衆	岡部	団之内十方

３．『寛政重修諸家譜(かんせいちょうしゅうしょかふ)』に載る幕臣の家紋

児玉党の系譜を引く者の中で江戸時代になって名をなした一族は奥平氏(豊前中津藩主)である。近世には大名として数家に分かれて存続した。奥平家も家紋は軍配団扇(軍配団扇の中松竹、奥平団扇)を使用しており、枠や軸は竹を用い面の中に松をあしらっている。奥平団扇とか中津団扇としても知られている。江戸時代に幕臣の中で軍配団扇を家紋として使用していた武士は『寛政重修諸家

神川町有氏神社の紋

譜』によれば次の旗本家と大名家がある。

小幡(旗本)、松平(桑名藩主)、児玉(旗本)、三雲(旗本)、菅浪(旗本)、近藤(旗本)、猪俣(旗本)、内藤(村上藩主)、久下(旗本)、中島(旗本)、北条(旗本)家等が軍配団扇紋を使用している。

４．『萩藩譜録』に見える児玉氏の家紋

児玉党の中で児玉氏については幕臣の児玉氏のほかに、山口県の長州藩士の児玉氏がある。歴史的にはこちらの方がよく知られており、実際に児玉文書が現在に伝えられている。この児玉氏の系譜は『萩藩閥閲録』や『萩藩譜録』に収められている。『萩藩譜録』の「児玉伊織略系伝書」には、児玉重行の代に重行が京都にいた時に摂関家の家紋と似ていたため団扇紋に替えたという。さらに重行が頼朝公の旗揚げに一番に参じた由緒により団扇に一文字を加えたものを使用したという。

「児玉広高略系伝書」には戦国時代に小幡・児玉家ともに一時断絶の危機があり、家紋も一時領主に預けられ、児玉家再興の際に新たに相続した家で児玉家惣領家の使用する根引き団扇紋を拝領したといっている。近世期毛利家の家臣に４家の児玉家と小幡家があって、互いに惣領意識が強く残っていたことが家紋の相続でも強く表れている。

５．九州に西遷した児玉党一族の家紋

熊本市小代家

川内市児玉家

鹿児島市児玉家

九州にも児玉党の子孫の家が多くあり、熊本県には小代氏がいる。現在の子孫の家に伝えられた家紋も軍配団扇紋で、団扇を亀の図柄にした変わった軍配団扇紋や、面内に亀甲紋様を入れたものを使用している。

鹿児島県の児玉家も団扇紋を使用している。また佐賀県や長崎県付近には児玉氏の一族と伝えられる児玉氏や針尾氏があり、竹節唐団扇などを使用している。

おわりに

古代末期に登場し、鎌倉時代から南北朝時代へと動乱の世の中で、武蔵武士の勇猛果敢な姿を今に伝える児玉党一族について、限られた史料の中からその動静を概観した。

児玉党の発生から党の結成事情など不明な点が多く、児玉党の一部の一族の動きしか明らかになっておらず、多くの一族の武士達が歴史の中に埋もれている。少ない史料からの検討のため、ほかにも色々な考え方があると思われるが、本書は本庄市域に発生し、ここを本拠とした一族の一部のわかり得た結果から概観した児玉党一族の動きである。色々な検討を加えてさらなる児玉党の解明が今後の課題であり、本書が本庄市域から生まれた武蔵武士児玉党への関心を高め、これからの研究の一助となれば幸いである。

参考文献一覧　（主要なものにとどめた）

渡辺世祐・八代国治(1913)　『武蔵武士』　博文館
笹川　種郎(1922)　『児玉党』 久米良作
安田　元久(1964)　『武士団』　塙選書38　塙書房
安田　元久(1973)　『武士世界の序幕』　吉川弘文館
河合　正治(1973)　『中世武家社会の研究』　吉川弘文館
瀬野精一郎(1975)　『鎮西御家人の研究』 吉川弘文館
伊藤　一美(1981)　『武蔵武士団の一様態 ―安保氏の研究―』 文献出版
白石　元昭(1981)　『関東武士上野国小幡氏の研究』　群馬文化の会
豊田　　武(1982)　『中世の武士団』 豊田武著作集第六巻　吉川弘文館
薦田　錦一(1982)　『薦田氏出自物語』
安田　元久(1984)　『武蔵の武士団』―その成立と故地を探る― 塙選書38　有隣書店
平塚　義角(1985)　『ふるさと久米　今と昔』　山陽印刷
佐々木慶市(1989)　『中世東北の武士団』　名著出版
井上　　要(1991)　『秩父丹党考』　埼玉新聞社
國武　慶旭(1996)　『よみがえれ小代武士団』　熊本出版
五味　文彦(1997)　『殺生と信仰』―武士を探る―　角川書店
入間田宣夫(1998)　『中世武士団の自己認識』　三弥井書店
石井　　進(2002)　『鎌倉武士の実像』　平凡社
成迫　政則(2002)　『郷土の英雄　武蔵武士』上　まつやま書房
伊藤　正文(2007)　『神流の落日』中世後期児玉地方史に関する試論　北の杜編集工房
植木　成行(2008)　『中世備中の歴史』―庄氏と植木氏・三村氏―　新人物往来社
田代　　脩(2009)　『武蔵武士と戦乱の時代』―中世の北武蔵―　さきたま出版会
児玉町(1988)　　『児玉党関係史料集１』　児玉町教育委員会
児玉町(1992)　　『児玉町史』中世資料編　児玉町教育委員会
児玉町教育委員会(1997)　『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』　児玉町文化財調査報告書第23集
児玉町教育委員会(1998)　『向田A・向田B・壱丁田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第27集
本庄市(1986・1989)『本庄市史』通史編Ⅰ・Ⅱ　本庄市教育委員会
坂戸市(1992)　　『坂戸市史』通史編（１）　坂戸市教育委員会
東松山市(1985)　　『東松山市の歴史』上巻　東松山市教育委員会
越生町(1997)　　『越生の歴史』Ⅰ　越生町教育委員会
高梁市(1979)　　『高梁市史』　岡山県高梁市
矢掛町(1982)　　『矢掛町史』本編・史料編　岡山県矢掛町
北房町(1992)　　『北房町史』通史編上　岡山県北房町
埼玉県(1982～1991)『埼玉県史』資料編５・７～９、通史編２、別編４　埼玉県
荒尾市(1964)　　『浄業寺と小代氏 ―浄業寺調査報告―』文化財調査報告第１集　熊本県荒尾市教育委員会

本庄市の武蔵武士

―武蔵七党児玉党の活躍とその後―

平成２６年3月１４日

発　行　　本庄市教育委員会文化財保護課
　　埼玉県本庄市本庄３－５－３
印　刷　　山進社印刷株式会社